



Title	日本語とタイ語のアスペクト形式に関する研究
Author(s)	Rattanaseriwong, Sangtiewan
Citation	大阪大学, 2014, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/50571
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

博 士 論 文

題目：日本語とタイ語のアスペクト形式に関する研究

提 出 年 月 : 2 0 1 4 年 0 6 月

言語文化研究科言語社会専攻日本語・日本文化専修コース

氏名：ラッタナセリーウォン センティアン

การศึกษาคำช่วยแสดงการณลักษณะในภาษาญี่ปุ่นและภาษาไทย

แสงเทียน รัตนเสริวงษ์

Osaka University, Graduate School of Language and Culture

บทคัดย่อ

งานวิจัยนี้มีจุดมุ่งหมายเพื่อวิเคราะห์ความหมายของคำช่วยแสดงการณลักษณะ ‘-ru’, ‘-ta’, ‘-teiru’ ในภาษาญี่ปุ่นและคำช่วย ‘จะ’, ‘แล้ว’, ‘กำลัง’, ‘อยู่’ ในภาษาไทย ว่าแต่ละคำมีความหมายในเชิงมโนทัศน์และมีวิธีใช้อย่างไร ในงานวิจัยเกี่ยวกับการณลักษณะเปรียบเทียบภาษาญี่ปุ่นและภาษาไทยที่ผ่านมา มักมีแนวโน้มที่จะใช้ข้อมูลจากการแปลภาษาญี่ปุ่นเป็นภาษาไทยแล้วดูเพียงว่าแต่ละคำช่วยในภาษาญี่ปุ่นแปลเป็นภาษาไทยได้อย่างไร หรือวิเคราะห์ความหมายของคำช่วยแสดงการณลักษณะในภาษาไทยโดยอิงกับระบบไวยากรณ์ภาษาญี่ปุ่นเป็นหลัก ซึ่งไม่สามารถอธิบายธรรมชาติลักษณะของภาษาไทยที่ไม่มีคำช่วยแสดงกาลได้อย่างสมบูรณ์ ในงานวิจัยนี้ ผู้เขียนจึงวิเคราะห์คำช่วยและชนิดของภาคแสดงในแต่ละภาษา โดยใช้ทฤษฎีทางภาษาศาสตร์ปริชานและอรรถศาสตร์ รวมทั้งใช้ฐานข้อมูลในการเก็บตัวอย่างประโยคของทั้งสองภาษา เพื่อให้เห็นการใช้ภาษาที่เป็นธรรมชาติ

ผลการวิจัยพบว่า คำช่วย -ru และ -ta ในภาษาญี่ปุ่น แม้จะมีการใช้เพื่อแสดงการณลักษณะ แต่มีหน้าที่หลักคือเป็นเครื่องหมายบอกเวลา (Time Deixis) ซึ่งเครื่องหมายบอกเวลานี้ ไม่ได้แสดงว่าเหตุการณ์เกิดขึ้นเมื่อใด แต่แสดงจุดเวลาที่ผู้พูดรับรู้เกี่ยวกับเหตุการณ์นั้นๆ โดยคำช่วย -ru บ่งบอกจุดที่ผู้พูดได้รับรู้เหตุการณ์ว่าอยู่ก่อนจุดเวลาพูด 「発話時」 ในขณะที่คำช่วย -ta บ่งบอกจุดที่ผู้พูดได้รับรู้เหตุการณ์ว่าอยู่หลังจุดเวลาพูด ส่วนความหมายการณลักษณะของทั้งสองคำช่วยนั้นเกิดจากความหมายของภาคแสดง 「述語の意味」 ที่ผู้พูดได้ตีความ และตำแหน่งของจุดเวลาที่ผู้พูดรับรู้เหตุการณ์นั้นถูกตีความให้อยู่ใน “ช่วงเวลาที่เหตุการณ์สามารถเกิดขึ้นได้ทุกเมื่อ” หรือไม่ (實現想定区間 (井上 2001i)) ซึ่ง ‘-ru’ จะแสดงความหมายเป็นปัจจุบัน 「現在」 เมื่อจุดเวลาอยู่ภายในและแสดงความหมายเป็นอนาคต 「未来」 เมื่อจุดเวลาอยู่ภายนอก ส่วน ‘-ta’ จะแสดงความหมายเป็นการเปลี่ยนแปลง 「変化」 เมื่อจุดเวลาอยู่ภายในและแสดงความหมายเป็นอดีต 「過去」 หรือย้อนนึก (รวมการนึกสมมติ) 「回想」 เมื่อจุดเวลาอยู่ภายนอก แต่แตกต่างตรงที่อดีตเป็นเหตุการณ์ที่ผู้พูดสามารถยืนยันได้ว่าเกิดขึ้นและสิ้นสุดไปแล้ว ในขณะที่ย้อนนึกเป็นเพียงการสืบค้นจากประสบการณ์ของผู้พูดโดยตรง ซึ่งไม่สามารถยืนยันในโลกแห่งความเป็นจริงว่าได้

สิ้นสุดไปแล้วหรือไม่อย่างไร ส่วนคำช่วย ‘จะ’ และ ‘แล้ว’ นั้น เพียงแสดงการณลักษณะ ไม่มีหน้าที่เป็นดรชนีพจน์บอกเวลา โดย ‘จะ’ แสดงช่วงก่อนจุดเปลี่ยนแปลงของสภาพ 「基準的段階」 ส่วน ‘แล้ว’ นั้นแสดงช่วงหลังจุดเปลี่ยนแปลงของสภาพ 「状態変化後の段階」 คำช่วยทั้งสองจึงสามารถใช้ได้ทั้งกับเหตุการณ์ที่กำลังดำเนินอยู่ และเหตุการณ์ที่สิ้นสุดไปแล้ว รวมถึงเหตุการณ์ที่ยังไม่เกิดขึ้นอีกด้วย

ส่วน ‘-teiru(-teita)’ นั้น สามารถแยกได้เป็น ‘-tei-’ ที่แสดงการณลักษณะ กับส่วนแสดงดรชนีพจน์บอกเวลาคือ ‘-ru’ หรือ ‘-ta’ ในการใช้ ‘-teiru’ ผู้พูดจะต้องตีความถึงช่วงระหว่าง (Interval) ในภาคแสดง โดยไม่ได้คำนึงถึงจุดเริ่มต้นหรือจุดสิ้นสุดของเหตุการณ์เป็นพิเศษ ‘-teiru’ จึงแสดงความหมายได้ทั้งเหตุการณ์กำลังดำเนินอยู่ (Progressive), เหตุการณ์ก่อผล (Resultative), เหตุการณ์ก่อผลสมบูรณ์ (Perfect) ในขณะที่คำช่วย ‘กำลัง’ และ ‘อยู่’ ในภาษาไทยนั้น ผู้พูดจะตีความถึงช่วงระหว่างในภาคแสดงที่เป็นเหตุการณ์ชั่วคราว (Temporal) เท่านั้น นอกจากนี้ผู้พูดยังต้องมองที่จุดเริ่มต้นของเหตุการณ์ในการใช้ ‘กำลัง’ และต้องมองที่จุดสิ้นสุดของเหตุการณ์ในการใช้ ‘อยู่’ อีกด้วย ดังนั้น ‘กำลัง’ และ ‘อยู่’ จึงแสดงความหมายได้เพียงเหตุการณ์กำลังดำเนินอยู่ (Progressive) และ เหตุการณ์ก่อผล (Resultative) เท่านั้น

มโนทัศน์ในการใช้คำช่วยแสดงการณลักษณะของผู้พูดภาษาญี่ปุ่นและภาษาไทย สะท้อนให้เห็นถึงธรรมชาติการมองเหตุการณ์ในเชิงปริธาน (construal) ที่แตกต่างกันของผู้พูดทั้งสองภาษา จากการใช้คำช่วยที่ผู้พูดภาษาญี่ปุ่นมีการใช้ดรชนีพจน์บอกเวลาที่ต้องมองเหตุการณ์โดยใช้จุดที่ผู้พูดอยู่เป็นศูนย์กลางนั้น ทำให้สรุปได้ว่ามีแนวโน้มที่จะมองเหตุการณ์ในเชิงปริธานแบบอัตวิสัย (Subjectivity) และการที่ผู้พูดภาษาไทยมองเหตุการณ์อย่างผู้สังเกตการณ์และมองลำดับขั้นตอนของเหตุการณ์ตั้งแต่เริ่มจนจบได้นั้น ทำให้สรุปได้ว่ามีแนวโน้มที่จะมองเหตุการณ์ในเชิงปริธานแบบปรวิสัย (Objectivity) การแยกแยะความแตกต่างในการมองเหตุการณ์เชิงปริธานและมโนทัศน์ของผู้พูดในการใช้คำช่วยแต่ละคำนั้น ในอนาคตคาดว่าจะสามารถนำไปปรับใช้ในการเรียนการสอนภาษาต่างประเทศทั้งสองได้ต่อไป

日本語とタイ語のアスペクト形式に関する研究

ラッタナセリーウォン センティアン

大阪大学言語文化研究科

要旨

本研究の目的は日本語とタイ語の基本アスペクト形式である「ル・タ・テイル」と「cà・léεo・kamlaŋ・yùu」を取り上げ、各形式の用法及び意味を考察し、そして話者の視点を明らかにすることである。第1章で指摘したように、今までの日本語とタイ語のアスペクト対照研究では、日本語の体系に沿ってタイ語を分析する傾向があった。しかし、日本語の「ル・タ・テイル」はテンス性とアスペクト性が融合されている形式であるため、テンス性が含まれていないタイ語の「cà・léεo・kamlaŋ・yùu」と直接対応させて比較するには無理があり、中立的な基準を利用して分析すべきだと考えられる。

第2章では、アスペクトとテンスの捉え方について論じた。一般的に、アスペクトは状況アスペクト (Situation Aspect) と視点アスペクト (Viewpoint Aspect) に分けられる。まず、状況アスペクトに関しては、Smith (1991) と Phillips & Thiengburanathum (2007) の基準を援用し、主に日本語とタイ語の述語を「状態」、「活動」、「活動達成」、「達成」、「一回的」、「到達」という6つのグループに再分類した。しかし、この分類は目安に過ぎず、同じ述語でも話者によって多義的な解釈が可能である。特に、「状態」は普通、時間的構造を持たないとされているが、話者の認知の世界で現在の発話行為を決定するために将来か過去（現実の世界に起こってなくても良い）を見越せば、状態の変化を捉えることが可能になる (Langacker 1987)。状況アスペクトは、出来事の有り様を示すが、視点アスペクトは、話者がその出来事の有り様に対してどのように見ているかを表すと考えられる。視点アスペクトには主に「Perfective」、「Imperfect」、「Perfect」という種類がある。

一方、テンスは、いわゆる時間ダイクシスを表している。ダイクシスとは、Deictic Centre と対象 (Target) との位置関係を表す。指示される対象は出来事自体ではなく、「話者が出来事を把握した (する) 時点」である。このことから、厳密に見ると現在という時点は存在しないが、我々が把握している「現在」という期間は、つまり話者にとって当該の出来事がいつ (発話時前後) 実現されてもおかしくない区間という「実現想定区間」の内部に出来事が指示されているのである。

そして、第3、4、5章では、第2章で導入した概念を利用して分析を進めた。第3章では、「ル」と「cà」の意味について述べた。「ル」は話者の述語に対する解釈によって、一般的に現在しか表せない形容詞と共起して「未来」のことを表すこともできる (仁田 2010)。しかし、その「話者の解釈」が一体どのようなものを指すかについてまだ明確にされていないため、本研究では、その点について注目して「ル」の本質と使用条件を再考察した。その結果、「ル」は話者が出来事を「発話時以降」の出来事として把握したことを示すものであると考える。さらに、「ル」は、話者が出来事を「実現想定区間」の内部に登録する場合、「現在」の意味となり、外部に登録する場合には「未来」の意味となる。一方、「cà」の機能については、従来、3つの見方がある。それらは、テンスの「未来時制」、アスペクトの「近未来」、モダリティの「非現実」である。本研究は、「cà」が過去の出来事とも共起することから、「cà」の本質は状態の変化時点前の段階という「基準的段階」のアスペクト性を表す形式であるとし、モダリティ性は派生的な意味であると考え。こうすると、「cà」の本質は「実現想定区間」の外部の出来事を指す「ル」と意味が重なることになり、両形式が翻訳上で対応することが多いことが傍証される。一方、「cà」は発話時以前の出来事と共起する場合、「ル」とは対応しない。

第4章では、「タ」と「léo」の意味について分析した。従来、「タ」の意味については、テンスを表す「過去」説、アスペクトを表す「完了」説や「パーフェクト性」説、モダリティを表す「ムード」説など様々な見方があったが、本研究は、話者が出来事を「発話時以前」の出来事として把握したことを示すものと捉え、「ル」と対立させる。「実現想定区間」の内部に出来事が登録される場合、「タ」は「変化」を表し、外部に登録され

る場合、「過去」か「回想」及び「発見」以外の「ムード」を表す。しかし、「過去」は発話時にでもその出来事が事実であることを確認できる点が、話者の認知の世界で起こった出来事を示す「回想」や「ムード」と異なる点だと考えられる。一方、本研究は「lɛɛo」を「状態変化後の段階」、つまり、状態変化時点の後の段階を示すと見なし、「cà」と対立する形式として扱う。なお、開始時点と終了時点はどちらも状態の変化を示す時点であるため、変化時点として捉えられる。そのため、状態変化後の段階を表す「lɛɛw」は、開始時点後の段階か、終了時点後の段階か、どちらかを示すこととなる。「cà」と同様に「lɛɛw」も時間ダイクシスの意味を持っていないため、未来の出来事との使用も許される。「lɛɛo」は、未来の変化を表す場合以外においては「変化」の「タ」と対応するが、「実現想定期間」の外部に位置する出来事とは対応しない。

そして、第5章では、「テイタ」も含む「テイル」の意味と、「kamlaŋ」と「yùu」の意味について調べた。まず、本研究では、「テイル（テイタ）」はアスペクトの部分（「テイ-」）とテンスの部分（「ル」か「タ」）が融合している形式であると捉える。話者は出来事から「間隔（interval）」を捉えるだけで「テイル」の使用が可能となるため、「テイル」の使用幅は広く多様である。Imperfective の「動作の継続（Progressive）」と「（一時的）結果の継続（Resultative）」、さらに Perfect の用法まで見られる。Imperfective は一時的な出来事を示すため、「反復」などの用法は Imperfective から派生していると思われる。そして、Perfect は属性的な出来事であると考えられるため、「経験」や「記録」などの用法は「Perfect」から派生していることになる。一方、タイ語の「kamlaŋ」と「yùu」も、話者が出来事から「間隔」を捉えるが、「kamlaŋ」の場合、出来事の開始時点にも着目するため、「ちょうど」などの意味が派生したと考えられる。そして、「yùu」の場合、出来事の終了時点にも着目するため、終了時点を示す期間とも共起することができ、「しばらく経った」というようなニュアンスも生じる。さらに、Kullavanijaya&Bisang (2007) によると、「kamlaŋ」と「yùu」は一時性（Temporal）を持っているため、「テイル」のように Perfect の用法を持たないと予測できる。

最後に、第6章では、分析のまとめとして、日本語とタイ語の話者の事態把握の仕方について論じた。日本語母語話者のアスペクト形式の捉え方は、いつも自らが出来事の当事者であり、目の前の出来事のように当該の事態を把握する「主観的把握」の捉え方を反映していると結論づけることができる。一方、タイ語は時間ダイクシスを表す形式を持たないことと、「cà」と「lɛɛo」など対立したアスペクト形式を複合的に使用することができることから、タイ語話者はいつも出来事を外から観察するように、出来事の順序を傍観者のように把握する「客観的把握」の捉え方を反映していると思なすことができる。さらに、第6章では、本研究の分析を第二言語教育に生かすための提言として、タイ語を母語とする日本語学習者のための日本語教科書における「テイル」の文法記述についての妥当性を考察した。その結果、教科書では、「(一時的) 結果の継続 (Resultative)」と「変化の結果の継続 (Perfect)」用法の区別がまだはっきり述べられていないことが分かった。従って、本研究での成果からすると、「テイル」を導入する際には、少なくとも用法を一時的な出来事を示す「動作の継続」と「結果の継続」、そして効力が永遠に続く「変化の結果の継続」という3つに分ける必要があるという提案を行った。

目次

要旨

第1章 はじめに.....	1
1.1. 日タイ両語アスペクト対照に関する先行研究とその問題点.....	2
1.1.1. ラッチャニー (1981)	2
1.1.2. 田中 (2003、2004)	4
1.1.3. Methapisit 他 (2000)	6
1.2. 問題提起及び本研究の流れ.....	9
第2章 アスペクトとテンスの捉え方.....	11
2.1. 時間的構造 (Time Schemata)	11
2.2. 状況アスペクト (Situation Aspect)	14
2.2.1. 述語の分類.....	15
2.2.2. 複雑な場面 (Complex Scene) における状態述語.....	18
2.2.3. まとめ.....	21
2.3. 視点アスペクト (Viewpoint Aspect)	22
2.3.1. 完結相 (Perfective)	23
2.3.2. 不完結相 (Imperfective)	25
2.3.1. パーフェクト (Perfect)	28
2.4. テンスとしてのダイクシス (Deixis)	29
第3章 「ル」と「cà」のアスペクト性.....	32
3.1. 先行研究のまとめと問題点.....	32
3.1.1. 「ル」について.....	32
3.1.2. 「cà」について.....	35

3.2. 本研究の仮説.....	39
3.2.1. 「ル」の意味.....	39
3.2.2. 「cà」の意味.....	41
3.3. 「ル」と「cà」の用法.....	42
3.3.1. 複雑な場面における (Complex Scene) 「ル」と「cà」.....	43
3.3.1.1. 静的述語の場合.....	43
3.3.1.2. 動的述語の場合.....	49
3.3.2. 単独事情 (Single Configuration)	55
3.3.3. 「cà」とモダリティ解釈.....	57
3.4. まとめ.....	59
 第4章 「タ」と「 έεο」のアスペクト性.....	 60
4.1. 先行研究のまとめと問題点.....	60
4.1.1. 「タ」について.....	60
4.1.2. 「 έεο」について.....	64
4.2. 本研究の仮説.....	72
4.2.1. 「タ」の意味.....	73
4.2.2. 「 έεο」の意味.....	79
4.3. 「タ」と「 έεο」の用法.....	81
4.3.1. 「変化」を表す「タ」と「状態変化後の段階」を表す「 έεο」.....	81
4.3.1.1. 活動述語の場合.....	81
4.3.1.2. 必然的終了時点を持つ述語の場合.....	85
4.3.1.3. 状態述語の場合.....	88
4.3.1.4. 「発見」の「タ」.....	91
4.3.1.5. その他の「 έεο」の使い方.....	92
4.3.2. 「過去」を表す「タ」.....	95

4.3.3. 「回想」を表す「タ」	96
4.4. 「léεo」と「dâi」と「khəəi」の比較	97
4.5. まとめ	99
第5章 「テイル」と「kamləŋ」・「yùu」のアスペクト性	101
5.1. 先行研究のまとめと問題点	101
5.1.1. 「テイル」について	101
5.1.2. 「kamləŋ」と「yùu」について	107
5.2. 本研究の仮説	115
5.2.1. 「テイル」の意味	115
5.2.2. 「kamləŋ」と「yùu」の意味	117
5.2.2.1. 「kamləŋ」の意味	117
5.2.2.2. 「yùu」の意味	122
5.3. 「テイル」と「kamləŋ」・「yùu」の用法	125
5.3.1. 「テイル」の用法	125
5.3.1.1. 活動述語と共起する場合	125
5.3.1.2. 必然的終了時点を持つ述語と共起する場合	128
5.3.1.3. 受身構文で現れた「テイル」	130
5.3.2. 「kamləŋ」の用法	131
5.3.2.1. 活動述語と共起する場合	131
5.3.2.2. 状態述語と共起する場合	132
5.3.2.3. 知覚動詞の内容節に現れる場合	134
5.3.2.4. 到達述語と共起する場合	136
5.3.3. 「yùu」の用法	136
5.3.3.1. 活動述語と共起する場合	137
5.3.3.2. 状態述語、必然的終了時点を持つ述語と共起する場合	139

5.3.3.3. 派生的な用法.....	140
5.3.3.4. 複合動詞としての「yùu」	141
5.3.4. 「kamlaŋ+動詞句+yùu」	142
5.4. まとめ.....	144
第6章 むすび.....	145
6.1. 日本語とタイ語の基本アスペクト体系.....	145
6.2. 日本語話者とタイ語話者の事態把握.....	148
6.2.1. 「事態把握」とは.....	148
6.2.1. 事態把握の仕方.....	149
6.3. 第二言語教育に生かすために.....	152
謝辞.....	153
参考文献.....	156
略語資料	

第1章 はじめに

タイ語では表現上、アスペクトが大きな役割を果たしているが、テンスは存在していない。そのため、テンスとアスペクトを持っている日本語を学習する際に、タイ語を母語とする学習者にとっては、テンスとアスペクトが非常に難しい文法項目の一つとなる。学習者に対して効果的な文法指導を行うためには、学習者の母語と日本語との異同を明らかにした対照研究の成果を参照して指導する必要があると考えられるが、実際は日タイ両語におけるアスペクトについての対照研究はまだ十分になされていない。

日本語の基本的なアスペクト形式は「ル・タ・テイル¹」だとされている（工藤 1995）。一方、タイ語は「cà・léεo・kamlaj・yùu²」という形式を持っており、さらに動詞のその原形も文脈によってアスペクト性が含まれていることがある。そのため、「ル・タ・テイル」と対応するタイ語のアスペクト形式は、一対一の関係ではなく、重なったりズレたりする部分が多くある。例えば、「テイル」は一般的に「kamlaj」か「yùu」と対応しているが、「結婚する」など出来事が瞬間的であることを表す述語の場合、「léεo」と対応することになる。

その上、日本語のアスペクト研究が様々な側面から数多く研究されており、極めて先進的であるのに比べ、タイ語のアスペクト研究はまだ不精密なところが多く残されている。

「cà・léεo・kamlaj・yùu」の各形式の意味の類似・相違点などを体系的に扱うタイ語学の研究は未だに少なく、両言語の対照研究を効果的に行うためには、まずタイ語の各形式の関係を明らかにしなければならないと考えられる。

本研究は、両言語の基本アスペクト形式である「ル・タ・テイル」と「cà・léεo・kamlaj・yùu」を取り上げ、各形式の用法及び意味を考察し、類似・相違点をまとめる。

¹ 以下、「テイル」は「テイ（ル/タ）」を示す。

² 以下、タイ語の発音表記は、富田竹次郎（1997）『タイ日大辞典』の基準による表記である（“๕”を“u”に書くことを除く）。

なお、本研究は各形式の意味を分析するために名詞修飾など、文中に現れるアスペクト形式を取り上げることもあるが、研究の対象は主に文末に現れるアスペクト形式である（単文と複文を含む）。

第一章では、まず両言語のアスペクト対照に関する先行研究をまとめ、残されている問題点を示す。そして、本研究の立場と論文の全体的な流れを紹介する。

1.1. 日タイ両語アスペクト対照に関する先行研究とその問題点

本節では、日本語とタイ語のアスペクト体系を網羅的に扱っている先行研究を概観し、残された課題について指摘する。

1.1.1. ラッチャニー（1981）

ラッチャニー（1981）は文末における動詞の「ル」、「タ」、「テイル」、「テイタ」と、タイ語の「V」（動詞の原形）、「cà+V」（未来形³）、「V+lěeo」（完了形）、「kamlaŋ+V」と「V+yùu」と「kamlaŋ+V+yùu」（進行形）とを比較している。ラッチャニー（1981）は初めて体系的に両言語のアスペクトを分析し、各形式が対応する範囲の全体像を示した点に大きな意義を持った研究だと言える。その成果は以下の通りである。

³ ここで述べた各形式の呼び方はラッチャニー（1981）に従うものである。本研究で扱う各形式の意味とは違う。

表1. 日本語とタイ語のテンスとアスペクトの対照表 (ラッチャニー1981: 87)

状 継 瞬 第四			意 味			状 継 瞬			
ル			現在	状態・存在		V			
	ル	ル		習慣			V	V	
ル			未来	状態・作用		C+V			
	ル	ル		動作・作用			C+V	C+V	
			話し手（疑問文の場合・聞き手）の意志						
タ			過去	状態・存在		V			
	タ	タ		習慣			V	V	
				動作・作用				V	
タ			思いおこし						
	タ	タ	期待の実現			V+L	V+L	V+L	
			完了						
	シテイル	シテイル	現在	動作・作用	進行継続	V K+V V+Y K+V+Y	V K+V V+Y K+V+Y	K+V	
					結果	V V+L		V V+L V+Y	
	現在の動作・作用のくり返し					V	V		
	経験								
		シテイル	現在の単なる状態			V			
シテイル	シテイタ		過去	動作・作用	進行継続	V K+V V+Y K+V+Y	V K+V V+Y K+V+Y	K+V	
					結果	V V+L		V V+L V+Y	
					過去の動作・作用のくり返し				V
シテイタ			過去の単なる状態			V			

注：V は動詞の原形

状 は状態動詞

C はcà

継 は継続動詞

L はléəo

瞬 は瞬間動詞

K はkamlag

第四は第四種の動詞

Y はyùu

タイ語は動詞の活用でテンスを表すことができないが、実際には時の副詞や助動詞が動詞の前後に置かれることによって文の内容の時間的な解釈が可能となる。そのため、タイ語の「V」は過去、現在、未来と関係なく使用できる。そして、「ル」は、現在に関する場

合は「V」と対応し、未来の出来事か人の意志に関する場合は「cà」と対応する。一方、「タ」は過去と思い起こしの場合は「V」で表され、期待の実現と完了の場合は「léεo」が使用される。最後に、「テイル」及び「テイタ」は、「V」、「kamlaŋ」、「yùu」あるいは複合形式の「kamlaŋ+V+yùu」と対応する。

ラッチャニー（1981）の研究は、このように両言語のアスペクト体系を分かりやすくまとめたという点に功績があるが、考察は翻訳の側面において各形式がどのように対応しているかに止まっている。なぜそうであるか、または複数の形式が同じ意味を表す場合、どのような違いがあるか等、実際はまだ様々な問題が残っている。例えば「léεo」は「タ」と共に「テイル」も「テイタ」も対応可能であるように見える。それならば、「タ」と「テイル」と「テイタ」が共通している意味とは何であろう。あるいは、進行継続を表すために、タイ語では4つも形式が存在するように見えるが、各形式の相違性に関しては述べられていない。つまり、各言語内のアスペクト形式がそれぞれどのような意味を果たしているか、どのようにアスペクト体系が成立しているのかについて、考察の余地を残していると言えるであろう。

1.1.2. 田中（2003、2004）

田中（2003、2004）もラッチャニー（1981）と同様に日本語におけるアスペクト性を基準にし、それぞれを表すタイ語の形式を整理することに止まり、両言語が対応している表現だけ確認することとなっている。田中（2003）自身が述べているが、異なる言語を対等に扱うのは無理があり、コーパスなど自然言語データを通じて検討すべきだと考えられる。

例えば、テンスについて、田中（2003、2004）は動詞原形以外にも過去の出来事を表すことができるもう一つの形式の「dâi」を取り上げ、「意志と未来」を表す「cà」と組み合わせ肯定の場合と否定の場合の違いも示しながら、両語のテンス的構造を以下のようにまとめている。

表 2. 日タイ両語のテンス的構造 (田中 2003 : 60)

		肯定		否定		
		アスペクト無標識	アスペクト有標識	アスペクト無標識	アスペクト有標識	
日本語	ル形	スル	シテイル	シナイ	シテイ	シテイル
	タ形	シタ	シテイタ	シナカッタ	シテカッタ	シテイタ
タイ語	現在形	(cà) kin ⁴	kin yùu	(cà) mâi ⁵ kin	mâi-dâi kin	
	過去形	(dâi) kin				

以上の表によると、タイ語ではアスペクト無標識肯定文の「過去」を表す形式が2つあり、それは動詞原形と「dâi+V」である。一方、否定の場合、「dâi」はアスペクト有標識となってしまいうように見える。ここでの問題は、そもそも「cà」と「dâi」は対等に扱っていいのかということである。否定文の場合を見てみると、「cà」の構造は [cà [mâi [kin]]] であり、「mâi」より上位にあると考えられる (* [mâi [cà [kin]]])。それに対し、「dâi」は「mâi」より下位にあり、[mâi [dâi [kin]]] という構造を持っている (* [dâi [mâi [kin]]]) ことから、「cà」と「dâi」が支配している部分は異なり、「dâi」が過去性が含まれている形式のに対し、「cà」は単なるアスペクト性しか持っていないと扱ったほうが整合性があるだろう（詳しくは第3章を参照）。田中(2003)に修正を加えると、以下のようにまとめられる。

表 3. タイ語のテンス的構造 (改訂)

		肯定		否定	
		アスペクト無標識	アスペクト有標識	アスペクト無標識	アスペクト有標識
タイ語	現在形	kin	kin yùu, cà kin, kin léeo 等	mâi kin	cà mâi kin, mâi kin léeo 等
	過去形	(dâi) kin		mâi (dâi) kin	

そして、田中 (2004) は、タイ語のアスペクトを「進行相」、「既然相」、「直前相・直後相」、「結果相・確保相」、「始動相・将全然相」、「終結相」、「継続相」、「経

⁴ 「kin」は「食べる」という意味で、ここでは動詞の原形を示していると考えられる。

⁵ 「mâi」は「否定」を表すマーカーである。

験相」、「傾向相・頻度相」、「試行相」、「時空変化相」、「方向動詞を用いた状態・様態変化相」に分け、それぞれの意味を表す形式を紹介しているが、各形式の本質や語彙アスペクトと文法アスペクトとの相互的關係に関しては触れていない。

1.1.3. Methapisit 他 (2000)

Methapisit 他 (2000) は、国立国語研究所が作成した『日本語学習者による日本語作文と、その母語訳との対訳データベース ver. 1 (試用版)』を使用し、101 人のタイ語を母語とする日本語学習者の作文に現れる「ル」、「タ」、「テイル」、「テイタ」という文末に置かれる 4 つのアスペクト形式の使用における誤用を調査している。なお、テンス・アスペクト体系について、日本語は工藤 (1995) ⁶を参考にしているが、タイ語は Methapisit 他 (2000) が独自で提案している。本節では、両言語のテンス・アスペクト体系に関する部分のみを考察する。

表 4. 日本語のテンス・アスペクト体系 (工藤 1995 : 161)

時間的限定性・ムード アスペクト テンス	具体的・アクチュアル			抽象的・ポテンシャル	
	完成性	継続性	パーフェクト性	反復性	
未来	スル	シテイル	シテイル	(/)	スル
現在	/	シテイル	シテイル シタ	シテイル	スル
過去	シタ	シテイタ	シテイタ	シテイタ	スル

⁶ 「ル」＝完成性未来、「タ」＝完成性過去/パーフェクト性現在、「テイル」＝継続性未来/継続性現在/パーフェクト性未来/パーフェクト性現在、「テイタ」＝継続性過去/パーフェクト性過去 (工藤 (1995) p. 161)

表 5. タイ語のアスペクト体系 (Methapisit 他 2000 : 10)

時間的限定性・ムード アスペクト テンス	具体的・アクチュアル			抽象的・ポテンシャル	
	完成性	継続性	パーフェクト性	反復性	
未実現の未来	cà-V	khon-yag-V-yùu	khon-V-léeo	(/)	cà-V
既実現の現在	/	kamlan-V-(yùu) V-yùu	V-léeo	V-yùu-mod ⁷ mák-cà-V	cà-V V
既実現の過去	V, V-V ⁸	kamlan-V-(yùu) V-yùu	V-V (pai)-léeo dâi-V-léeo	V-yùu-mod mák-cà-V	cà-V V

「時間的限定性」とは、「具体的（一回性）」、「抽象的（反復性）」、「一般的（超時）」に分けることができるが、「時間のなかに現象する出来事を確認・記述する文」のみテンス・アスペクト性を持っているため、「一般的（超時）」を除くことになる（工藤 1995 : 25-27）。そして、ここの「ムード」は、つまり「広義モダリティ」を示しており、「アクチュアル」は「現実性」、「ポテンシャル」は「可能性」とされている（工藤 1995 : 148-150）。Methapisit 他（2000）は工藤（1995）の分析結果を基準にしたまま、タイ語のアスペクト形式にも適用している。表 5 の中では、「cà・léeo・kamlan・yùu」以外、モダリティ形式の「khon」と「mák」も取り上げられている。しかし、「khon」と「mák」のアスペクト性について明らかにした研究がまだ見当たらないが、一般的にこれらはモダリティ形式の一種として認められている（khon＝事態の予測, mák＝事態の反復を意味する）。従って、アスペクト基本体系に入れるべきかどうかは、さらなる検討が必要だと考えられる。

そして、Methapisit 他（2000）では、日本語とタイ語のアスペクトに対する認識の相違が興味深くまとめられている。しかし、いくつかの問題点もまだ残っていると考えられる。

⁷ mod=Modifier（修飾語句）である。この場合、時間を表す修飾語句。

⁸ Methapisit 他（2000）によれば、V-V は「動作動詞＋結果動詞」タイプの複合動詞である。アスペクト標識がなくても完成性を表す。

表6. Methapisit 他 (2000) の日タイ両語のアスペクトに対する認識の相違と

本研究の見解・疑問

Methapisit 他 (2000 : 12)	本研究
①日本語では、＜未来・現在＞と＜過去＞が対立しているのに対し、タイ語では、＜未実現の未来＞と＜既実現の現在・過去＞が区別されているように見えるが、これは適切か。日本語のようにテンスを基準にして区別する必要があるのか。	①「cà」と「khon」で＜未実現の未来＞と＜既実現の在・過去＞が区別されているように見えるが、これは適切か。日本語のようにテンスを基準にして区別する必要があるのか。
②日本語では、「テイル」「テイタ」は継続性、パーフェクト性、反復性の意味機能を表しうののに対し、タイ語では、「kamlan」は継続性の進行を、「yùu」は継続性と反復性を、そして、「léew」はパーフェクト性を表す。	②「kamlan」と「yùu」の違いはさらなる検討が必要である。そして、「テイル」と対応する「léew」も存在するため、それをどう説明していくか。
③タイ語は動詞が原形のままで用いられることが多いのは、形態的要素よりも時間副詞や動詞の語彙的要素に依存することに特徴がある。	③時間副詞や動詞の語彙的要素に依存することに特徴があると述べられているが、それはどのような特徴であるか。
④個々の動詞を見た場合、動詞の語彙的意味とアスペクト形式との相関性にも違いが見られる。特に、変化動詞では「ル」形は未実現の意味しか持たない。実現した変化状態を表すには「テイル」形をとまう必要がある。タイ語の変化動詞は実現した変化状態を表しているの、原形のままで用いられる。	④動詞の語彙的意味とアスペクト形式との相関性における違いとは、具体的にどのようなものであるか。なぜ変化動詞あるいは到達動詞の場合、実現した変化状態を表すのは「yùu」ではなく、動詞の原形か「léeo」のみ使えるのか。
⑤日本語では「思う」「信じる」などの内的状態動詞の場合、アスペクト形式と人称性との共起制約があるが、タイ語にはそのような制約はない。	
⑥過去に起こったことを現在において経験や記録として捉える場合に用いられる「テイル」の用法は、タイ語の「khəey＝経験する」の概念に類似するので、このような時はタイ人学習者は「～タことがある」の表現を用いる傾向が強い。また、過去の経験という認識から「タ」と結びつくことで誤用を起こしてしまうことがある。	⑤「タ」は過去だけではなく、多義的意味を持っているため、これもより詳しく分析する必要がある。

上記の Methapisit 他 (2000) のまとめを整理してみると、日本語とタイ語との違いは、アスペクト形式で表す時間に対する認識などの事態の捉え方 (①、②、⑥) と、両語における述語に内在している意味 (③、④) に大きく分けることができる。要するに、両語での相違は主に 2 つのレベルに生じていることが分かった。従って、日タイ両語アスペクト対照研究は、各言語における話者の認識と各言語の語彙的アスペクトの違いに重点をおいて考察を進めるべきだと考えられる。

1.2. 問題提起及び本研究の流れ

以上、従来の日タイ両語のテンス・アスペクト対照研究には、いくつかの大きな問題がまだ残されていると考えられる。その問題点は以下のようにまとめられる。

- ① 日本語のテンス・アスペクト研究は従来からの蓄積があり、大きな成果を上げている。形態面から分析することにより、各要素を系統的に扱うことに成功している。しかし、タイ語はテンスとアスペクトの要素が別々であり、体系的に扱うためには不精密なところが多く残っている。
- ② タイ語の述語の意味、つまり語彙アスペクトの追究はまだ求められている。
- ③ 今までの先行研究は全て日本語の体系に沿ってタイ語を分析してきた。しかし、実際には中立的な基準を利用して分析すべきだと考えられる。
- ④ 言語は人の認識によって表現される。話者は実際にどのように言語を使用しているか、そして、言語自体だけではなく、言語を使用する際、話者がどのように捉えているのかについても考察する必要がある。つまり、対照言語研究は実際の使用 (コーパスなどの分析) と認知言語学からの両面のアプローチが必要であると考えられる。

そして、これらの問題を明らかにするため、本研究は以下を目的とする。

- ① 中立的な基準を利用して日本語とタイ語の語彙アスペクトについて明らかにする。

- ② 日本語はテンスとアスペクトが統合しており、テンス性とアスペクト性を共に扱うことができるが、タイ語はそうはできない。従って、タイ語を分析する際、テンス性とアスペクト性を別々に分けて再考察する。しかし、あくまでもタイ語はテンスの標識を持たない言語のため、アスペクト性を中心に研究を進める。具体的にいうと、タイ語の「cà・léεw・kamlan・yùu」と日本語の「ル、タ、テイル」のアスペクト的な意味・用法を分析する。主な分析対象は、コーパスからの例文を取り上げる。必要なだけ、作例を使用する。

全体的な流れは以下のようなものである。

第2章では、本研究で用いる理論と用語を定義する。まずは、時間的な構造や述語の分類など、テンスとアスペクトの捉え方に関する概念をこの章で紹介する。

第3章では、アスペクトの「ル」と「cà」を中心に論じる。

第4章では、アスペクトの「タ」と「léεo」を中心に述べ、「dâi」と「khəəi」の使い方についても触れておく。

第5章では、「テイル」と「yùu・kamlan」を中心に論じる。

第6章では、第3章から第5章までの分析結果を生かして両言語のアスペクト体系をまとめる。そして、話者の事態把握のし方、第二言語教育に生かすための提案についても記述する。さらに本研究のむすびとして残っている課題を述べる。

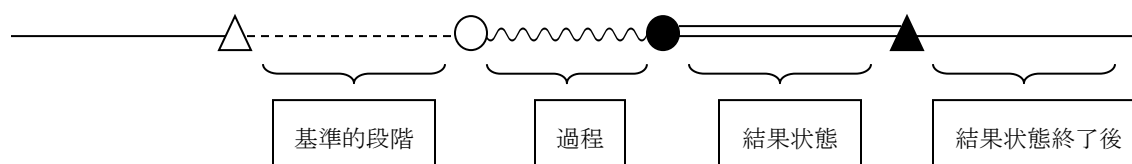
第2章 アスペクトとテンスの捉え方

人は、他者と同じ出来事を観察したとしても、他者と同じ言葉でその観察した出来事を表現するわけではない。発話者の母語が異なれば、そのズレは一層著しくなるであろう。このことから、日本語を母語としている話者とタイ語を母語としている話者は頭の中でどのように事態を把握しているか、言い換えれば、出来事の有様の描き方の傾向を考察する必要がある。まずは、アスペクトの意味に最も関係が深い時間的構造（Time Schemata）、及び各種アスペクトについて述べ、時間指示（Time Diexis）概念を提示し、日本語のテンスを説明する。

2. 1. 時間的構造（Time Schemata）

恒常的な出来事や一般的な知識、属性などを述べる場合以外、状態を表す述語でも全て時間的構造を持っていると考えられる。話者の視点（Viewpoint）が着目する時間的構造の部分は「局面（phase）」と呼ばれる。そして、出来事の始まりと出来事の終わりを示す時点はそれぞれ「開始時点（Initial Point）」と「終了時点（Final Point）」と呼ばれる。出来事は色々なタイプの時間的構造を持っているため、様々な分類（Situation Types）のし方があり得る（Smith 1991 など）。動的述語の時間的構造は以下のように一般化できる⁹。

図1. 動的述語の時間的構造（一般化）



⁹ 図1. は、金水（2000：16）を参考にして作成したものである。

出来事が開始する前の段階は、「基準的段階」と呼ばれる。例えば、「猫が魚を食べる」という出来事に対し、「猫が魚を食べようとしている」という文は基準的段階の局面を表している（金水 2000）。そして、「過程」は、出来事が開始時点から終了時点まで運動が展開することを示し、例えば「猫が魚を食べている」という文は過程の局面を表している。運動が終了した後、その運動によって残存する結果は、「結果状態」と呼ばれ、結果が観察できなくなる状態は「結果状態終了後」と呼ばれる。どの時点が開始時と終了時になるかについては、話者がどの局面を捉えようとするかによって異なってくる。図 1 を見ると、△は基準的段階の開始時となり、○は基準的段階の終了時となっている。しかし、過程の局面において○は開始時となり、●は終了時となっている。同様に、結果状態の局面では●は開始時であり、▲は終了時になっている。つまり、全ては局面の変化を示す時点となり得るのである。

Smith (1991) では、状態 (State) は局面を持っていないとされているが、もしその状態が複雑な場面 (Complex Scene) であれば、例え静的な状態であっても、変化を推定できる (Langacker 2008)。例えば、「(花子は) きれいだ」とは、「花子は生まれてから美人である」というように単独事情 (Single Configuration) としての解釈が可能なのに加え、「花子は普段よりいい服を着てきたから、格好よく見える」など、何かが出来事的前提（「普段（発話時の出来事ではない）」対「発話時の出来事」）となり、複雑な場面としての解釈も可能であり、その場面において局面の変化も起こり得る。このような前提は「予期」と呼ばれている（仲本 2008）。予期とはテキスト上に現れておらず、話者の認知の世界に起きたものである。話者が現在の発話行為を決定するために将来か過去（現実の世界に起こっていないとしても良い）を見越すものである。この現象は静的状態に限らず、動的状態でも起こっている。上に述べた「基準的段階」もその例の一つである。

「マンゴーが熟している」という文を考えてみよう。マンゴーが「熟した」状態になる前、マンゴーが「青い」状態であったという予期は無理なく想定される。マンゴーの色が変わりつつ、「熟した」状態になったと判断された時点は、変化の時点かつ「熟した」状態の開始時点として捉えられ、話者は状態が開始した局面に着目する（太い線）。なお、

同じ出来事を表すためにタイ語は「kamlan」を使用しなければならない（má-mûan（マンゴー） kamlan（継続相） sùk（熟する））。もし使用しないと（má-mûan（マンゴー） sùk（熟する））、「sùk（熟する）」は、「完熟マンゴー」のように名詞修飾節のように解釈されてしまう。

図 2. 「マンゴーが熟している」状態の時間的構造



一方、「マンゴーが熟していない（青い）」という状態を表す場合、時間的構造は「熟する」と同様であるが、話者が着目する局面は異なる。つまり、マンゴーはいつか必ず熟するため、その時点を青い状態の終了時点として捉えるのである。つまり「マンゴーが熟している」状態は変化時点（開始時点）の後に着目するが、「マンゴーが熟していない（青い）」状態は変化時点（終了時点）の前に着目するのである。

図 3. 「マンゴーが熟していない」状態の時間的構造



このように、状態と見られる述語の場合も、時間的構造を持っていると予測できる。動的述語より静的述語の変化時点は曖昧であるように見えるかもしれないが、実は動的述語も静的述語も、どの変化時点や局面に着目するかということは話者の判断（予期が想定される）によるものと言えよう。例えば、「人間は、何を滑稽だと思ふかによって、何よりもよくその性質を示す（ゲーテ）」、「噂をすれば影が射す」、名言やことわざなどの述語も動

的の場合があるが、これらは属性や性質を表すため、アスペクト性が欠けており、時間的構造を持たないと考えられる。Langacker (1987 : 143) では、どの述語も時間軸上で変化の時点が起こることから、全ての述語はプロセス (process¹⁰) を持っていると言われている。用語が異なるが、これは本研究で述べてきた時間的構造と類似した¹¹概念だと考えられる。

以上を改めてまとめると、時間的構造は、述語に内在している意味と話者の視点の総和として認知レベルで形成されるものである。これは広義的に使われている「アスペクト」を指す。述語に内在している意味は「状況アスペクト (Situation Aspect)」と呼ばれる。そして、話者がどの局面に着目するかという意味は「視点アスペクト (Viewpoint Aspect)」と呼ばれ、その意味を表すために用いるのは「アスペクト形式」となる (Smith 1991)。そのため、アスペクト形式が表す意味は述語に内在している意味と共通でなければならないと考えられる。例えば、過程を示すアスペクト形式は、当然ながら過程の局面を持たない述語を伴うことは不可能であることになる。しかし、注意したいことは、状況アスペクトも固定的なものではなく、多様な解釈ができる¹²ということである。

2. 2. 状況アスペクト (Situation Aspect)

アスペクト形式の多義性が生じる一つの原因は述語に内在している意味であると考えら

¹⁰ この Process は、動詞述語に内在している「過程」を表すのではなく、時間的構造において局

面の変化が起こることを示すため、「過程」という用語より広義的な意味として使われている。

¹¹ Langacker (1987) では、変化の時点が発話者によって開始時点となったり終了時点となったりすること、及び基準的段階などについても扱っていないため、プロセスは時間的構造と一致する概念ではないと見られる。

¹² 例えば、「ある」という動詞は、一般的に「存在する」を意味するが、「(財布が) あったわ!」のように「見つける」を意味する場合もある (ラッタナセリーウォン 2011)。こう考えると、「ある」は少なくとも二つ以上の時間的構造を持っていると考えられる。

れる。例えば、日本語では、金田一（1976：33-37）によると「タ」は静的述語につくか、動的述語につくかによって用法が異なってくることが指摘されている。タイ語でも、ラッチャニー（1981）は金田一（1976）をふまえて「lɛɛo」を分析した結果、「タ」と同様に述語の種類によって多義性が現れると述べている。

しかし、両言語の分類方法が一致しているわけではない。翻訳上、同じ意味を表す動詞のように見えても詳しく分析してみると、内在している意味が異なることもしばしばある。例えば、日本語の「殺す」は動作の結果の局面（対象が死ぬ状態になる）まで含まれているのに対し、タイ語の「khâ」はその局面が含まれていない（対象が死ななくても良い）¹³。従って、各言語における述語の意味を分類するに当たり、基準を定める必要がある。

本研究では、名詞文と形容詞文（日本語の場合は形容詞、タイ語の場合は形容動詞）と一部の動詞文（状態動詞）を静的述語とし、残りの動詞文は動的述語とする。

2. 2. 1. 述語の分類

最も知られている Vendler (1967) と Dowty (1979) をふまえて Smith (1991) は「±Static（状態）」、「±Durative（期間）」、「±Telic（終了点）」の基準で英語の述語を State（状態）、Activity（活動）、Accomplishment（達成）、Semelfactive（一回的）、Achievement（到達）という5種類に分けている。

表 7. Smith (1991：30) の述語分類

Situation	Static	Durative	Telic
States	[+]	[+]	[-]
Activity	[-]	[+]	[-]
Accomplishment	[-]	[+]	[+]
Semelfactive	[-]	[-]	[-]
Achievement	[-]	[-]	[+]

¹³ 「khâ」は Event Cancellation 構文を持っているためである。「khâ man (lɛɛw) tɛɛ man mâi taai（殺そうとしたが死ななかった）」「*殺したが、死ななかった」

（単独事情の場合に限って）状態述語は経過と終了時点を持たないが、長期間継続することができる。活動述語は経過と期間を持っているが、いつまでも継続可能であるため、終了時点を持たないとされている。そして、達成述語と到達述語は両者とも経過と終了時点を持っているが、到達述語は期間を持っていない。最後に、一回的述語は経過も終了点も期間も持たず、一瞬で終わってしまい、何の変化も起こさないものである。

しかし、補足しなければならない点がある。上で述べたように、活動述語は一般的に終了時点を持っていないが、動作の結果が含まれている動詞句の場合は終了時点が読み取れる。例えば、「公園に走る/wîŋ（走る）pai（行く）sǎan-sǎa-tha-ra-ná（公園）」は「走る/wîŋ」と異なり、「1時間で/nai（で）nùŋ（1）chûa-mooŋ（時間）」などの期間を表す副詞と共に起することができる。このような述語は達成述語と性質が類似しており、活動達成（Active Accomplishment）述語と呼ばれている（Phillips & Thiengburanathum 2007）。両言語の述語分類は以下の表のようにまとめられる。

表 8. 日タイ両語における述語分類の例

	日本語	タイ語
State (単独事情)	“元気な” “不快な” などのな形容詞、“寒い” “良い” “面白い” などのい形容詞、“ある” “いる” など「テイル」を伴わない動詞、“優れている” “そびえている” “曲がっている” など常に「テイル」を伴う動詞	“yàai（大きい）” “pùai（病気）” “sǔai（きれいいな）” などの状態動詞、“mii（有する）” “pen（コピュラ動詞）” “yùu（居る、存在する、住む）” “hǎn（見える）” などの形容動詞 ¹⁴
Activity	“走る” “食べる” “働く” “書く” “飲む” “見る” “話す” “会う”	“wîŋ（走る）” “kin（食べる）” “duu（見る）” “phúut（話す）” “dùwm（飲む）”

¹⁴ 分類方法の詳細については 2.2.2. で述べる。

Active Accomplishment	“手紙を書く” “丸を描く” などの動詞句、“思い出す” “取り調べる” “思い出す” “やり直す” などの複合動詞	“khǎn (書く) còt-mǎai (手紙)” “tət (切る) phǒm (髪)” “hǔn (炊く) kháao (米)”
Accomplishment	“焼く” “溶かす” “壊す” “開く” “消す” “決める” “割る” “落とす”	“sāan (建てる/作る)” “yái (移動する/させる)” “com (沈める)” “la-lai (溶かす)” “phóp (会う)”
Semelfactive	“くしゃみする” “叩く” “羽ばたく” “点滅する”	“khó (叩く)” “caam (くしゃみする)” “kra-phrip (点滅する)” “kra-phwu (羽ばたく)”
Achievement	“到着する” “結婚する” “爆発する” “割れる” “溶ける” “焼ける” “消える” “死ぬ”	“ra-bèt (爆発する)” “taai (死ぬ)” “tèck (割れる)” “tòk (落ちる)”

なお、表に挙げた例は目安にすぎない。前述したように、文脈の解釈によって意味は左右される。そして、「la-lai (溶かす/溶ける)」など、タイ語は形態に現れない動詞の自他交替があるため、文脈なしで述語の分類を断言するのは無理がある。

述語の内在している意味以外、Smith (1991) は動作が終わった後に動作主か対象に結果を残すか否かにも注目し、「因果連鎖 (The Causal Chain)」という概念を用いて説明している。

図 4. 述語が表す意味と因果連鎖の例

	CAUSE	SUBJECT	INSTRUMENT	ACTION	OBJECT	RESULT
a. 書く						
b. 手紙を書く						
c. 会う						
d. phóp (会う)						

図4. は Smith (1991) を参考にして作成した例である。まず、a. と b. を見てみよう。一般的に「書く」は活動述語であり、終了時点を持たないとされている。当然、「書く」動作によって起こる結果の意味も含まれていない。しかし、b. 「手紙を書く」のように、文脈が追加される場合、述語全体の意味が変わり、図4. のように解釈できる。そして、c. 「会う」はタイ語に翻訳すると一般的に d. 「phóp (会う)」となるが、内在的な意味は「会う」と相違がある可能性がある。例えば、「*一時間で会おう」は不自然であるが、「phóp (会う) kan ([誘う]) nai (で) nùŋ (1) chûa-moong (時間)」は難なく言える。さらに、「会いに行ったが、会わなかった」は言えるが、「*pai (行く) phóp (会う) tɛɛ (しかし) mâi ([否定]) phóp (会う)」は言えない。つまり「会う」は活動述語であるが、「phóp」は達成述語だと考えられる。その反対の例も前述の「殺す」と「khâ」などがある。従って、両言語とも、述語の意味を考察する際、動詞そのものの語彙的意味だけではなく、文脈をふまえて分析する必要がある。なお、本研究では、動作の結果が内在している意味に含まれている場合は「結果性」と呼び、そうではない場合は「不結果性」と呼ぶ。

2. 2. 2. 複雑な場面 (Complex Scene) における状態述語

2.2.1. で状態述語について少し触れた。単独事情の場合、述語の内在している意味としての過程を持たないため、当然変化の局面を読み取ることも不可能である。そこでこの節は複雑な場面 (Complex Scene) における状態述語の時間的構造に注目する。

分析に入る前に、まずタイ語の静的述語について説明しておく必要がある。形態素からみると、タイ語の形容詞は動詞と同じ位置を占めていることが分かる。

- 1) a. phim pen khon sŭai.
 ピム [CPL¹⁵] 人 きれい

¹⁵ 訳文にある略語の意味は、追加資料 (略語) を参照のこと。

=ピムはきれいな人だ。

b. phim sǔai.

ピム きれい

=ピムがきれいだ。

c. sǔai lɛɛo!

きれい lɛɛo

= (もう) きれいになったよ！

例1) の a. は名詞修飾節で現れる場合、b. は述語で現れる場合、c. はアスペクト形式を伴う場合である。動詞と同じ位置にあり、さらにアスペクト形式と共起することもできるため、タイ語の述語を分類した多くの研究では動詞と区別せずに扱っている。

Phillips & Thiengburanathum (2007) はタイ語の状態述語をさらに形容動詞 (Adjective State) と状態動詞 (Verbal State) に分けている。程度比較の形式「kwàa (より)」との共起をテストすると、形容動詞は可能であるが、状態動詞は不可能であることが明らかになっている (Phillips&Thiengburanathum 2007 : 171)。

2) a. pìtì pùai kwàa mǔu.

ピティ 病気である [比較] ムー

=ピティさんはムーさんより病気がひどい。

b. *pìtì mii ʔŋəən kwàa mǔu.

ピティ 有する お金 [比較] ムー

=ピティさんはムーさんよりお金を (たくさん) 持っている。

「pùai (病気である)」のような形容動詞は「kwàa (より)」と共起できるのに対し、状態動詞の「mii (有する)」は許されないため、両者は区別する必要があるとされている。

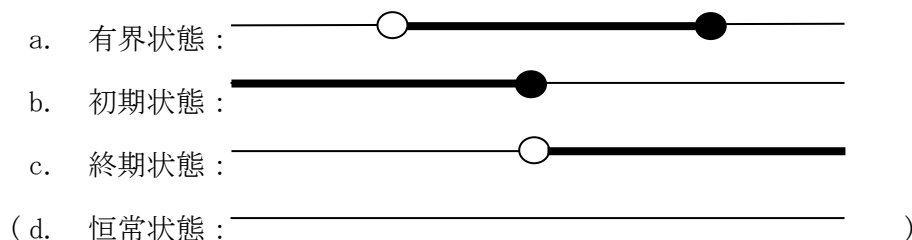
る。両言語の状態述語はいずれにしても一般的に過程や変化を持たないため、時間的構造は以下のように描かれる。

図 5. 状態述語の時間的構造



しかし、上にも述べたが、話者の認知の世界で現在の発話行為を決定するために将来か過去（現実の世界に起こっていなくても良い）を見越すこと、あるいは予期が想定されれば、状態の変化を捉えることが可能になる（Langacker 1987）。そして、話者の視点がどの局面に着目するかにより、状態述語の意味を分類することができる。沈（2005）は以下のように簡単にまとめている。

図 6. 状態変化の種類



以上の図は沈（2005）を参考にして作成したものである。○は開始時点、●は終了時点（沈（2005）では、それぞれを出現と消失と呼ばれている）、そして、太い線は話者が着目する状態の局面を表す。a. 「有界状態」とは、状態が一時的であり、変化が繰り返して起こりうるということである。この種の状態は変化の時点をもつて2回捉えることができる。そして、b. 「初期状態」とは、出現する開始時点はないが、いつかその状態が終わると見られる。一方、c. 「終期状態」とは、状態が出現する開始時点を持ち、そのままの状態が続く局面を示す。b. と c. は、変化の時点を一回しか捉えていない。なお、d. 「恒常状態」

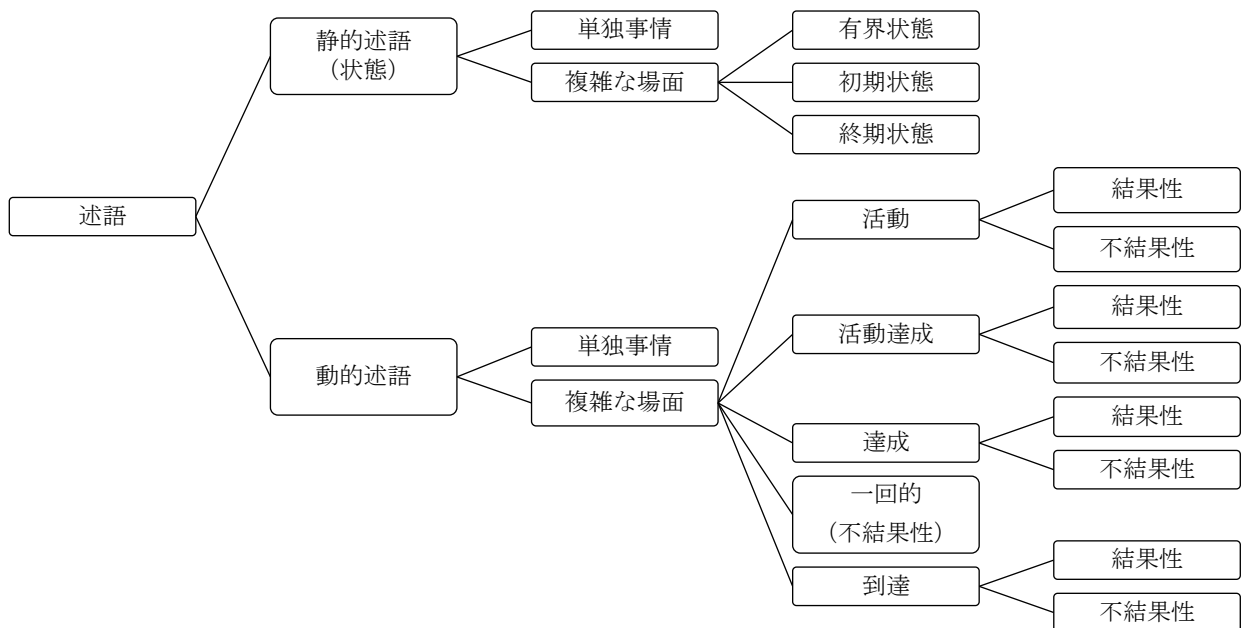
は変化の時点が想定されず、時間的構造で変化時点（開始時点も終了時点も）を持たないと考えられる。この種に入るのは、例えばことわざや名言など、単独事情的な状態である。

このように、状態述語はどの局面、及びどの変化の時点が着目されているかによって、アスペクト形式が表す意味及び用法は異なってくると考えられる。

2. 2. 3. まとめ

以上、両言語を分析する際に適用する述語分類の基準を考察した。その基準は図7. のようにまとめられる。

図7. 本研究で扱う述語分類



以上で見られるように、最終的にはその述語が結果の局面を含んでいる否かを考察する必要があると考える。しかし、複雑な場面の状態はすでに変化の結果として捉えられるため、さらに分類する必要はないのである。

2. 3. 視点アスペクト (Viewpoint Aspect)

以上で論じてきた状況アスペクトは、話者が表そうとする出来事の背景だとすれば、視点アスペクトは、話者がその出来事に対してどのように見ているかを表すために用いられる概念である。両アスペクトの関係を理解するために「ウォーリーをさがせ！」というゲームと比較したい。「ウォーリーをさがせ！」とは、人が入り乱れた絵の中から「ウォーリー」という男の子を見つけ出すゲームである。

図 8. 「ウォーリーをさがせ！」とウォーリーの絵¹⁶



一般的に現実世界における出来事の有り様は複雑であり、様々な側面から見ることができ、様々な要素から成り立っていると考えられる。そのため、図 8. のような複雑な絵は話者が認識した出来事の有り様に例えることができる。話者は、その複雑な出来事の中から何らかの目的で自分が関心のある部分を取り出すために、ある「フレーム」を利用して

¹⁶ 絵は <http://yonimokimyo.com/blog-entry-67.html> から。

その部分を探り出して定着させる。「ウォーリーをさがせ！」において考えれば、「ウォーリーという人は、メガネをかけて赤いボーダーシャツを着ている人だ」というような条件は、プレイヤーが関心を持っているウォーリーを探すための「フレーム」と考えられる。

出来事の有り様は、いわゆる述語の「状況アスペクト」である。そして、その「フレーム」は、いわゆる「視点アスペクト」と同じような働きを持っている。話者は「視点アスペクト」といったフレームで「状況アスペクト」をスキャンするのである。「状況アスペクト」に内在している意味が、「視点アスペクト」のフレームと合う部分があれば、その部分が取り出されて言語化されるのである。

「ウォーリーをさがせ！」では、実はウォーリー以外の仲間たちを探すこともある。ウォーリーのフレームだけではなく、魔法使いのフレームもあり、犬のフレームもある。言語においても「フレーム」に例えられる「視点アスペクト」は様々なタイプが存在する。ここでは、「視点アスペクト」の基本である「Perfective（完結相）」と「Imperfective（不完結相）」と「Perfect（パーフェクト）」を持つ「フレーム」を簡単にまとめておく。

2. 3. 1. 完結相 (Perfective)

Perfective とは、出来事の時間的構造をひとまとまりとして捉える視点である (Comrie 1976)。その出来事が現実に関係なく、短い期間でも長い期間でもひとまとまりとして扱える。つまり、出来事が内在している時間的構造の複雑さを無視し、出来事全体を一つに圧縮して時間軸上の一つの時点 (a point of time) のように把握している (Smith 1991)。とはいえ、Perfective で捉えた出来事は開始時点から終了時点までを含んでいる。従って、Perfective を表す形式の意味は、テンスの過去の意味と重なっていることが多い。日本語とタイ語の Perfective 形式の例を見てみよう。

- 3) a. 一九九七年に上海を訪問し、復旦大学の学生と討論を

したことがある。

(少納言¹⁷)

b. lǎo-cùu khəəi ráb-râat-chá-kaan pen khon-duu-lɛɛ

老子 khəəi 公務員になる [CPL] 管理人

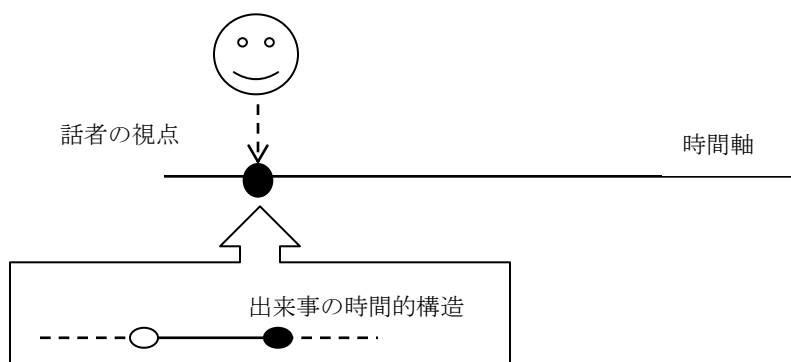
hônŋ-ʔək-ka-sǎan khǒŋ râat-chá-wŋ-coow.

資料室 の 周朝

= 老子は周朝の資料室管理人として働いたことがある。(TNC¹⁸)

日本語の「～タことがある」とタイ語の「khəəi」の用法は、出来事をひとまとまりとして捉える視点を表す形式の例である。例3)の a. と b. の述語は、終了時点のない活動述語の「討論する」と状態述語のコピュラ動詞「pen」であるが、各形式の働きで終了時点が捉えられる。しかし、出来事全体の存在は時間軸上での一つの時点として捉えているに過ぎず、発話時現在の出来事と切り離されている。

図9. Perfective の視点



出来事の時間的構造の中には、開始時点と終了時点が含まれている。しかし、以上でも述べたように、Perfective 視点で捉える際、話者はその内在している構造に関心を持たない。つまり、出来事の時間的構造は発話時までには及ばないと考えられる。復旦大学生と

¹⁷ 国立国語研究所と文部科学省科学研究費特定領域研究が共同で開発したコーパスである。

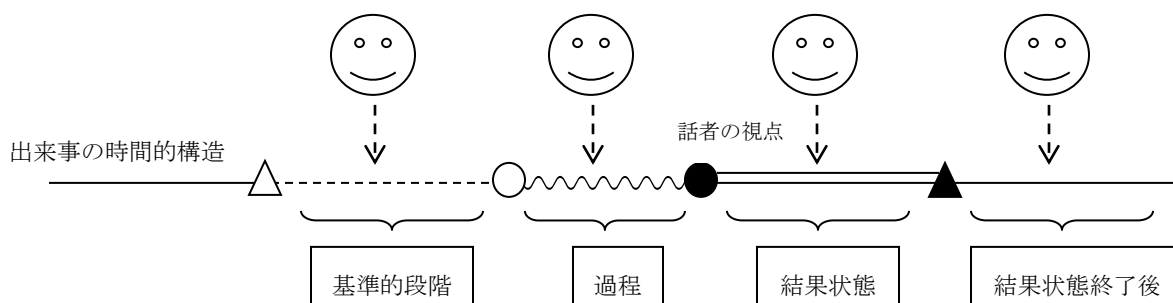
¹⁸ タイのチュラーロンコン大学が開発したコーパスである (THAI National Corpus (TNC))。

の討論が長く続くかどうか、老子が何年資料室の管理人として働いていたかは注目されないのである。日本語もタイ語も「～たことがある」と「khəəi」以外にも Perfective を表す形式がある。詳しい分析は後で記述する。

2. 3. 2. 不完結相 (Imperfective)

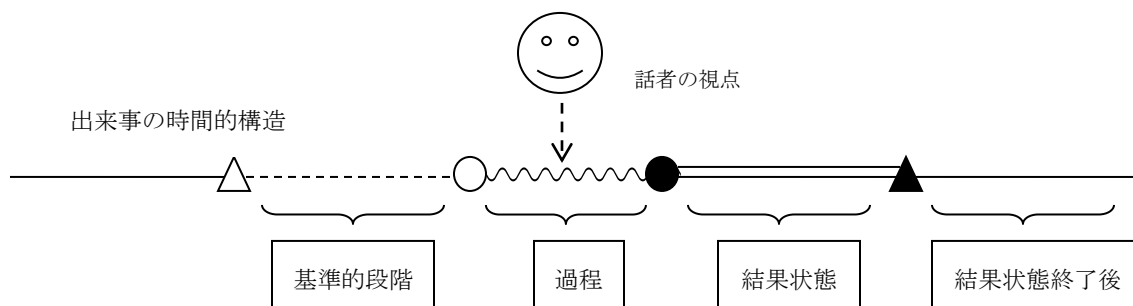
Perfective が出来事をひとまとまりとして外部から捉える視点を表すものであるとすれば、Imperfective はその反対であり、出来事の時間的構造の内部に注目し、構造が成立した各局面を示すものである (Comrie 1976、Smith 1991)。Imperfective は述語に間隔 (interval) を要求し、その述語は静的でも動的でも構わない。

図 10. Imperfective の視点 (一般化された動的述語の場合)



図を見ると、話者は様々な局面に視点をおくことが可能であることが分かる。視点は主観的なものであるため、どこに局面に着目するかということは話者の判断によると考えられる。視点が着目する局面により、さらに Imperfective を下位分類することができる。ここでは、Progressive (進行) と Resultative (結果継続) を簡単に説明しておく。

図 11. Progressive の視点（一般化された動的述語の場合）



図のように、Progressive は、述語の意味に間隔を与えるが、開始点と終結点には着目しない。Progressive が示せる述語は動的である場合に限られる (Smith 1991)。以下は日本語とタイ語の例である。

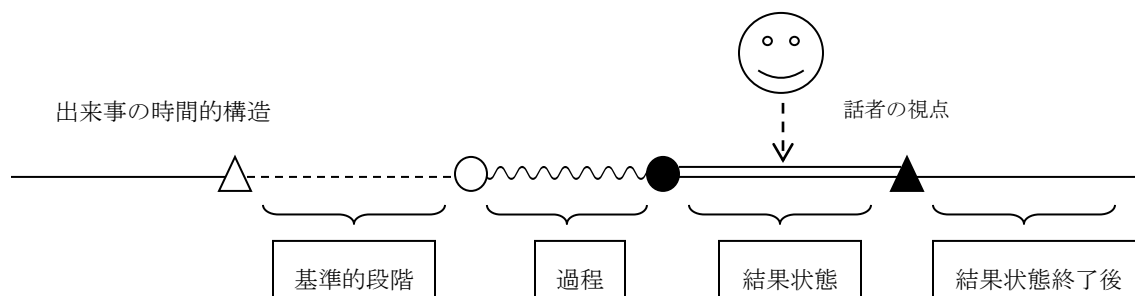
4) a. キリンたちは、エサ箱に首をつっこんで熱心に草を食べている。(少納言)

b. nai hōŋ-rian sǐi-khǎao rík fɔɔ-rées léɛ ceen kam-lan
 中 教室 白い リック フォレス と ジェーン kamlan
nāŋ khui kan yùu thîi kâo-ʔi thǎeo lǎaŋ-sùt khǒŋ hōŋ.
 座る 話す 一緒 yùu [場所] 椅子 列 最後 の 部屋
 = 白い教室の中で、リックとフォレスとジェーンは部屋の最後の列の椅子に
 座って一緒に話している。(TNC)

例 4) a. と b. はそれぞれ、「食べる」と「nāŋ khui (座って話す)」の時間的構造における過程を表している。日本語は「テイル」、タイ語は「kamlan」を使用している。b. を見ると、もう一つの形式「yùu」も使用されているように見えるが、この場合は「thîi kâo-ʔi (椅子で)」という場所を示す「yùu」と考えられる。タイ語では、Progressive を表す形式が「yùu」ではなく「kamlan」であることは後の章でまた詳しく分析する。

そして、もう一つの Resultative は、Progressive と同じく出来事に間隔を与え、且つ開始点と終結点に着目しないが、話者の視点が時間的構造の過程ではなく、変化が起こった後の結果の局面に置かれるのである。

図 12. Resultative の視点（一般化された動的述語の場合）



Smith (1991) では、Resultative は位置・場所や存在を表す述語 (verb constellations of the positional or locative type) を伴う傾向があると述べられている。

5) a. 自分の持ち物等の整理整頓が難しく、机の周辺が散らかっている。(少納言)

b. sùan dāan-lǎng thīi yaj lǔa pen thīi-lōŋ mii raaw

方 後ろ [RP] まだ 残る [CPL] 空いている場所 有する 棒

tàak phāa làak-sǐi tàak krà-caai yùu pen rá-yá.

干す 服 彩り 干す 散らかる yùu [CPL] 間

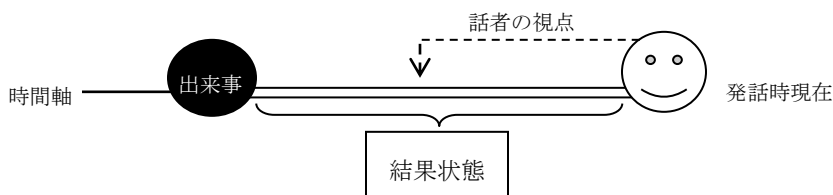
=後ろの方はまだ空いており、色鮮やかな服を干している物干し棒があっちこっち散らかっている。

5) は「散らかる」と「(tàak) krà-caai (干して) 散らかる」¹⁹の結果を表している。日本語の「テイル」は Progressive 以外に Resultative を表すこともできる。一方、タイ語は別の形式の「yùu」を用いなければならない。そして a. も b. も「机の周辺」と「thii-lông (空いている場所)」といった位置・場所を表す要素があるため、述語はものの存在を示している。「テイル」と「yùu」「kamlaŋ」についての詳しい分析は第6章で論じる。

2. 3. 3. パーフェクト (Perfect)

Perfect は、Perfective と Imperfective の視点とは異なる。Perfective は時間的構造をひとまとまりとして外部から視点を置くのに対し、Imperfective は時間的構造の内部に視点を置く、という反対の関係を持っているが、Perfect は現在に関係のある場面、つまり過去の出来事の結果が現在に残っていることを表す視点である (Comrie 1976)。

図 13. Perfect の視点



最も大きな違いは、話者が観察地点をどこに置くかということである。Perfect の場合、話者は観察地点を時間軸に置いて（発話時）、過去に起こった出来事の結果に視点を置く。Perfective と Imperfective は時間軸における出来事が起こった時点と発話の時点の関係、つまりテンスには無関心であるため、時間軸外から出来事を捉えているのである。Perfect は、時間的構造の内部を無視して出来事を点的に把握する点は Perfective と似ており、結果状態に視点を置く点は、Imperfective の Resultative と類似している。話

¹⁹ なお、「tàak krà-caai」の「tàak」は干している服のことを意味するのではなく、物干し棒の存在（あっちこっち散らかっている状態）を表すのである。

者が時間軸に観察地点を置くため、Perfect の視点はテンスと深く関わっていると考えられる。

- 6) a. アメリカ探検家クラブが調査したところウソらしいことがわかり、
すっかり信用をなくした。 (少納言)
b. 後手に縛り上げられた手首が感覚をなくしている。 (少納言)

6)の a. の「なくす」行動はただ過去に起こったひとまとまりの出来事であり、その出来事の結果が発話時現在まで継続するかどうかは分からない。一方、b. の場合なら、「なくす」の結果が発話時現在まで続いていると解釈できる。なお、日本語の場合、「テイル」はパーフェクトの視点も表すことができると言われている（工藤 1995）。

2. 4. テンスとしてのダイクシス (Deixis)

第一章でも少し述べたように、日本語の「ル」「タ」「テイル」といった基本アスペクト形式はアスペクトの意味だけではなく、テンスの意味も有していると様々な研究で述べられている（金田一 1976、工藤 1995、金水 2001 など）。そのため、テンスの捉え方について触れず、アスペクト形式の意味を分析することは不可能であると考えられる。

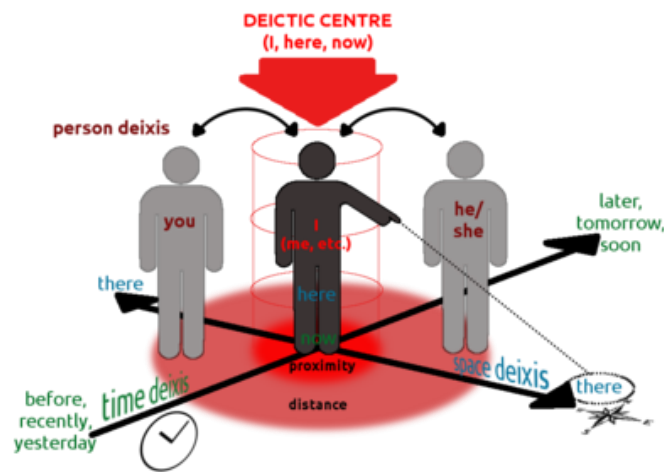
一般的に、問題とする出来事が過去・現在・未来のいつ起こるかを表す形式はテンス形式だとされている。しかし、それだけでは説明できない例も多い。

- 7) 忘れていたが、彼女はとてもきれいだった。特にいま、頬を上気させていると。 (少納言)

もし、テンス形式が出来事の起こる時間を表す形式だとすれば、7) の「タ」を説明できない。7)では「きれい」の状態が「いま」の状態であると解釈できるのに対し、「タ」が使われている。この「タ」はいったい何を表しているのだろうか。

Chung (2012) では、ダイクシス (Deixis) の概念を導入し、韓国語のテンスを分析している。韓国語の「-았」も日本語の「タ」と類似しており、過去に起こった出来事ではない場合にも用いられる。本研究もテンス形式を「時間ダイクシス (Time Deixis)」を表す形式として扱えば、この現象を説明することができると考え、基本的に Chung (2012) に従う。

図 14. ダイクシス (Deixis)

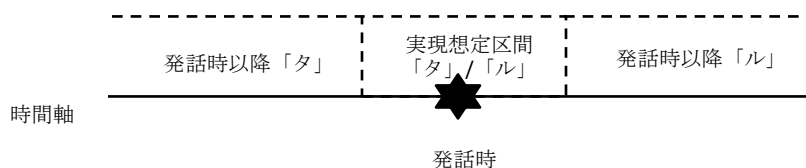


(<http://en.wikipedia.org/wiki/File:Deixis.png>)

ダイクシスとは、Deictic Centre と対象 (Target) の位置関係を表す。Deictic Centre は一般的に話者のこと、つまり話者自身・発話時の場所・発話時の時点を示す (Ostension)。ここで注意すべきは、指示される対象は出来事自体ではなく、「話者が出来事 (= 情報) を把握した (する) 時点」である。これは情報のアクセスポイント (定延 2001) とも、参考時点 (Reference Point) (Langacker 1987、2008) とも呼ばれている。把握した (する) 時点は発話時現在以前であれば、「過去」となり、発話時現在と同時であれば「現在」、発話時現在以降であれば「未来」というようにまとめられる。厳密に言えば、現在という時点は考えられない。話者がその発話をする前に、必ず情報を先に把握しなければならない (= 過去) からである。しかし、出来事は「実現想定区間」

に属していれば「現在」の出来事として捉えることが可能になる。「実現想定区間」とは、話者にとって当該の出来事がいつ（発話時前後）実現されてもおかしくない区間である（井上 2001i）。従って、把握した情報は発話時の状態と無関係であると言え、例7）の「タ」の使用が許されるようになる。日本語の場合、発話時以前を表す形式は「タ」、発話時以降を表す形式は「ル」である。そして、「実現想定区間」での出来事は話者が「ル」か「タ」かを選択する権利を持っている。つまり「現在」に相当する時点は、「ル」でも「タ」でも表現可能だと考えられる²⁰。

図 15. 「実現想定区間」²¹



なお、タイ語はテンスを持たないと言われているが、時間ダイクシスの概念を持たないということではない。時間ダイクシスの観点からタイ語の時間副詞を①Posteriority（前方性）、②Simultaneity（同時性）、③Anteriority（後方性）という3つのタイプに分類している研究も見られる（Kullavanijaya 2003）。従って、タイ語は時間ダイクシスを表すために動詞に接続する特定の形式は存在しないが、時間の副詞や文脈などを用いて出来事を把握した（する）時点と発話時現在の関係を捉えていると考えられる。

²⁰ しかし、話者の視点との相違があるため、表すニュアンスは厳密には異なる。だが、現実的にはこのようにまとめられると本研究は考える。

²¹ 井上（2001i）を参考にして作成した図である。第4章の4.1.1.にも参照。

第3章 「ル」と「cà」のアスペクト性

前章でも少し述べたように、日本語のアスペクト形式はテンスの意味を含んでいる。時間ダイクシスの観点から「ル」のテンスの意味は、話者の発話の時点から見ると、その出来事に関する情報を把握できる時点が発話時以降であることを示す。そして、Perfectiveのアスペクト性との相関を考えると、動的述語でも静的述語でも複雑場面（Complex Scene）の解釈において状態変化が捉えることができれば、「ル」は「未来」を表すことになる。しかし、単独事情（Single Configuration）に解釈される場合、状態変化を捉えられない場合は、出来事の基準的段階（Preliminary Stage）の状態を捉えることが不可能であるため、「ル」は「現在」か「恒常」の出来事を表すようになると考えられる。一方、タイ語の「cà」は時間ダイクシスの意味が含まれておらず、話者が出来事における局面の基準的段階に視点を置くことが本質であるため、出来事は必ずしも未来の出来事ではなくても良いと考えられる。

3. 1. 先行研究のまとめと問題点

まず、各形式の意味用法に関する先行研究を簡単にまとめ、本研究との共通・相違点及び立場を述べていきたい。

3. 1. 1. 「ル」について

先行研究によれば、日本語の「ル」の見解は大きく2つに分かれている。一つは、「ル」を「タ」と対立させ、それぞれが「未然」と「已然」の意味を表すとする研究である（寺村 1984 など）。そして、もう一つは、「ル」は「タ」とのテンス的な対立の関係（非過去・過去）を表すとし、両者とも Perfective のアスペクト性（ひとまとまり性）を表すとする研究である（工藤 1995、金水 2000 など）。本研究は、基本的に後者を支持しているが、例外もしばしば見られるため、追加の説明が必要であると考えられる。

- 8) a. 僕はお金が要る。
b. 僕は明日お金が要る。
c. 彼は大学4年生だ。
d. 彼は来月から大学4年生だ。
e. *僕、明日足が痛い。 (仁田 2010 : 7)

動的述語の場合、一般的には「ル」を伴うと、「未来」を表すとされている。しかし、8) a. は「現在」の出来事を表す。一方、静的述語は、一般的に「現在」を表すが、8) d. のように「未来」を表すこともできる。しかし、「来月から」のような時間副詞があれば「ル」の使用が常に許されるというわけではなく、8) e. のように述語「痛い」は「明日」と共起しても非文となるのである。これはテンスとアスペクトの観点だけでは説明できない現象である。

仁田 (2010) は、8) のような問題点を取り上げ、述語の意味（「事態の種類」という用語を使っている）と「ル」の意味用法との相関に注目している。属性を表す文でのテンス形式（「タ」）の現れ方を分析し、「未来」を表す「ル」の分析に利用している。時間軸に存在位置のない属性でさえも、主体が時間の流れの中に比較的容易に変わりうるものと、一度獲得すると変わりえない（変わってしまうと存在が消える）ものに分けることができる (p. 9)。「優しい」「日本人 (国籍)」「お巡りさん (職業)」などは前者の例であり、「京都生まれ」「哺乳類 (種類)」などは後者の例である。このことから、状態を表す述語も、動きを表す述語も、「未来」を表しやすい (あるいは、未来での変更が予測しやすい) タイプと表しにくい (あるいは、未来での変更が予測しにくい) タイプがあると考えられる。例えば、「予定」「天気予報」など話者が発話時に手にしている情報から、未来での現れを予測できるものと、「心情・感覚」「属性」など話者が未来での現れを発話時において予測することが無理・困難なものである。具体的な例は以下の通りである (仁田 2010 : 15-16)。

- 9) a. 僕は明日は忙しい。/これから少し暇です。
 b. 高気圧の影響で西日本の最高気温は平年より3度前後高い。
- 10) a. 「多分、あたしの方が、ずっと悲しいのよ」
 b. 「*明日はあたしの方が、ずっと悲しいのよ」
 c. この椅子は硬い。
 d. *この椅子はもうすぐ硬い。

9) a. と b. はそれぞれ話者の自分自身の予定を述べる場合と天気予報の場合である。これは既に決まっている情報を基に予測した出来事であるため、話者にとって未来での現れを捉えやすい。一方、10) b. と d. のように、人の感情など観察できず安定しているもの、変わりにくいものの属性などは未来での現れを捉えられない。仁田 (2010) は「ル」が未来の出来事を表しやすい場面を、①既に決まった（予定表に書き込まれた）出来事、②話し手が意図することで未来での発生を確実しうる出来事、③未来での発生・出現を発話時において把握しうる出来事、の3種に整理している。

本研究も述語の意味に着目して「ル」の使用を分析していくため、基本的に仁田 (2010) と同様の立場をとる。しかし、仁田 (2010) では、「ル」を伴って未来を表すようになる状態は比較的に変わりやすい状態であるという指摘に留まっており、その変わりやすさとは具体的に何か、話者はどのように状態を捉えているのか、「ル」はなぜ二義的に解釈できるのかに関しては述べていない。本研究は、仁田 (2010) の知見に加え、話者の視点について言及し、「ル」の本質を考察していく。

先に簡単に述べておくと、第2章で少し紹介したが、話者が現在の発話行為を決定するために将来か過去に把握した情報を見越すことを意味する「予期」の概念を取り入れることによって、「ル」の二義性が説明できると考える。つまり、話者は「予期」を認識していれば、予期として捉えた事情は前提となり、出来事の内在的意味は複雑な場面に解釈できる。しかし、実は「ル」が二義的な解釈にできる理由は、予期の有無だけではなく、「ル」の「発話時以降の出来事を示す」といったテンスの意味と、「基準的段階」といっ

たアスペクトの意味とも関連していると考えられる。さらに、従来「恒常」の出来事は時間軸と関らない、特別な存在を持つ述語であるため、よくテンスとアスペクトの研究においては例外とされてきた。しかし、「恒常」の出来事を表現する際には「ル」形が用いられるため、「ル」の意味を考察する際には考察に加える必要があると考える。

3. 1. 2. 「cà」について

「cà」の意味に関する見解は様々である。印欧語文法になぞらえてタイ語の文法を記述しようとした時期には、多くの研究は「cà」を未来時制（?anaakhótkaan）とした（Uppakitsinlapasarn 1964、Scovel 1970 など）。しかし、最近の研究では、タイ語がテンスの形式を持たないという立場に立ち、アスペクトの観点から「cà」を「基準的段階（Preliminary Stage）」を表す形式とする研究（Muansuwan 2002、Koenig&Muansuwan 2002）、モダリティの観点から「cà」を「非現実（Irrealis）」を表す形式とする研究（Srioutai 2004i、高橋 2009）、「開始時点が起こる前に短い期間を与える」形式という時間副詞のような扱いをする研究（Kullavanijaya&Bisang 2007）、そして、「cà」の多義性を認める研究（田中 2004）等がある。つまり、多くの研究では「cà」が未来テンスを表す形式とは認めていないが、時間ダイクシス（テンス）と述語の内在的な意味（アスペクト）との関連を否定していない。その中でも「非現実」を表すモダリティ形式とした見解は興味深い。

Srioutai (2004i) は「cà」をテンス形式として認めない理由を2つ述べている。

- ① 「cà」は様々なモダリティ形式と共に現れる。特に「hěn-cà（～のようだ）」、「nâa-cà（～のはずだ）」、「thâa-cà（～のようだ）」などの認識的モダリティ複合形式に現れ、これらは「cà」と共起せず単独で現れると意味を持たない語らである。
- ② 過去における「可能・許可」の出来事を表す文では「cà」が欠かせない

上記の2つの理由から、「cà」が示す出来事の発生時点は必ずしも発話時以降ではなくても良いと述べている。

- 11) a. ʔit-thî-phon khǝɔŋ chon-chán nák-bùat nai sa-măi nán
権力 の 階級 聖職者 中 時代 その
nâa-cà maa càak khwaam-rôɔb-rúu dân daa-raa-sàat.
nâa-cà 来る から 知識 分野 天文学 (TNC)
=その時代の聖職者階級の権力は、天文学の知識から生まれたはずだ。

- b. raw cà dâi pai duu lá-khɔɔn-sàt dūai-kan.
我々 cà dâi 行く 見る サーカス 一緒に
=私たちは一緒にサーカスを見に行くことができた。(Srioutai 2004i:6)

例 11) a. では「cà」が用いられなければ文が成立しない。一方、11)b. では「cà」がなくとも文が成立するが、意味は「私たちは一緒にサーカスを見に行った²²」となり、「サーカスに行ってもいいという許可を得たのは以前であるが、行く行為はまだ発生していない」という b. のニュアンスと異なる。

高橋 (2009) は「cà」がモダリティ形式であることを主張し、Srioutai (2004i) が述べた理由以外の理由も説明している。それは、関係代名詞の「thîi」の後に非現実事態の補語を導く形式にも「cà」が必ず使用されることである。例えば、「phûa-thîi-cà (～するために)」、「phɔɔ-thîi-cà (～するのに十分だ)」、「khít-thîi-cà (～しようと考えてる)」などである。

しかし、コーパスのデータからみると、関係代名詞「thîi」の後に必ず「cà」が現れるわけではない。その間には主語が現れることもしばしばある。さらに、非現実事態を表す場面では、「thîi」と「cà」、あるいは「thîi」か「cà」がなくとも文が成立する。

²² 「dâi」の働きで、出来事の発生時点は発話時以前であることが解釈できる。詳しくは第4章で述べる。

12) a. dī-chǎan yêk-tua ʔòk càak khɿp-khrua thîi sǣn ʔòp-ʔùn
 わたし 離す 出る から 家族 [RP] とても 温かい
 khǒŋ dī-chǎan. maa yùu kàp phûan phûa-thîi [rao] cà
 の わたし 来る 住む と 友人 ~ために 我々 cà
 dâi phôb-pà kan ʔgâai khûn. (TNC)
 [可能] 会う と 簡単に [変化]

= わたしは温かい我が家族を離れた。私たち（私と友人）がより頻繁に会えるようになるために友人と一緒に暮らしている。

b. khǎo dən pai hǎa thəə thîi hǒŋ-lǣp phûa cà rɔɔ
 彼 歩く 行く 探す 彼女 に 研究室 ~ために cà 待つ
 klàp-baan phróom-phróom-kan. (TNC)
 帰宅 一緒に

=彼は（彼女と）一緒に帰るために彼女に会いに研究室に（歩いて）行った。

c. chaai-nùm lúk-khûn càak tiəŋ troŋ pai yaŋ
 男性 立ち上がる から ベッド まっすぐ 行く に
 tó-tham-ʔgaan phûa duu pa-tì-thin sǒŋ ʔaa-thít. (TNC)
 机 [CJT] 見る カレンダー 二 週間

=男性はベッドから立ち上がると、二週間めくりのカレンダーを見るためにまっすぐ机に向かった。

例 12) は、高橋（2009）で取り上げられた非現実の出来事を表す一つの表現「phûa-thîi-cà（～するために）」からの派生的な使用例である。a. では、従属節の主語「rao（我々）」が関係代名詞「thîi」と「cà」の間に現れる例である。そして、12) b. では、関係代名詞「thîi」がなくても非現実の出来事を表すことができる例である。12) c. は関係代名詞「thîi」も「cà」現れない例である。この現象から、非現実を表す形式だと主張するためには、関係代名詞「thîi」と「cà」の共起はあまり重要でないようである。

Srioutai (2004i) で指摘されていたように、例 11) a. で現れた「nâa-cà (～のはずだ)」のようなモダリティ形式の場合、「cà」が必須であるが、実は「nâa-cà (～のはずだ)」の「nâa」単独でもモダリティ的な意味を持っている。

- 13) mǎo dâi duu sa-phâap sòp duu thîi-kèt-hèet faj khôo-muun
医者 dâi 見る 状態 死体 見る 事件の現場 聞く 情報
kô pra-muan wàa khôo-muun níi mǎi nâa thùuk-tòŋ nák
で 分析する と 情報 この [否定] nâa 正解 そんなに
lé rêm sǒŋ-sǎi nai phlú-tì-kam khǒŋ phûu-pen-lûuk.
そして 始める 疑う 中 行動 の 子である人物
＝ 医者は死体の状態と事件の現場を見て、情報を聴いたが、その情報があまり
り正確ではなさそうだと分析した。そして、(死んだ人の) 子である人の
行動を疑い始めた。 (TNC)

例 13) のように、「nâa-cà (～のはずだ)」の「nâa」は、単独で予測を表すモダリティの意味を持っていることが分かった。そのため、「nâa-cà (～のはずだ)」は、「nâa (予測)」と「cà」それぞれが含有している意味から生じたと考えることも可能であろう。

以上の例から、本研究は「cà」が非現実モダリティ形式であるという説に対して様々な疑問を持っている。しかし、「cà」のモダリティ性を否定するというわけではなく、むしろ、モダリティの意味は「cà」の本来のアスペクト的な意味から派生したと考える。本研究は Muansuwan (2002) における「cà」のアスペクト説に賛成するが、Muansuwan (2002) では触られていない「cà」のモダリティ性についても検討する。

3. 2. 本研究の仮説

以上の先行研究をふまえ、本研究は「ル」も「cà」も多義的な形式だと考えるが、本質の意味は一つであり、それ以外の意味は話者がどのように出来事を把握しているかによって派生的に生起したと考える。

3. 2. 1. 「ル」の意味

第2章の30ページでも述べたが、話者にとっての「現在」とは何かというと、その出来事が「実現想定区間（井上 2001i）」という、いつ実現されてもおかしくないといった発話時前後の区間内で出来事の情報把握することである。このことを出発点として、「ル」の意味はこのように仮定できる。

- 14) 「ル」の意味：時間軸上、話者が把握した出来事を発話時以降の時点に登録したことを示す。発話時を含む実現想定区間に出来事の情報登録される場合、「ル」は「現在」を表す。一方、実現想定区間外に登録される場合、話者は出来事をひとまとまりとして捉え、「未来」を表す。前者の場合、実現想定区間内に把握可能な述語は既の実現されているか、いつでもそうである、変わりのないといった内在的意味に解釈可能な述語に限る。一方、話者が出来事を発話時以降の時点に実現すると登録したため、実現想定期間外に把握可能な述語の意味は、発話時以降に変化時点（開始時点）を持たなければならないことになる。

つまり、「ル」の本質は「話者が把握した出来事を発話時以降の時点に登録した」といった発話時から見た位置を表すという時間ダイクシスの意味だと考えられる。しかし、発話時以降といっても、その出来事が実現想定区間内に登録されて「現在」として捉えられるか、または実現想定外に登録されて「未来」として捉えられるかについては、話者が出来事の状態変化を捉えるかどうかによる。

図 16. 現在を表す「ル」

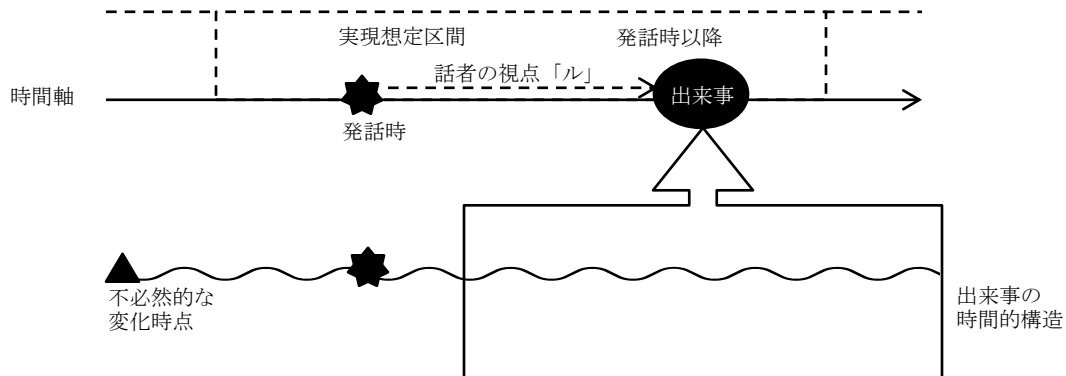
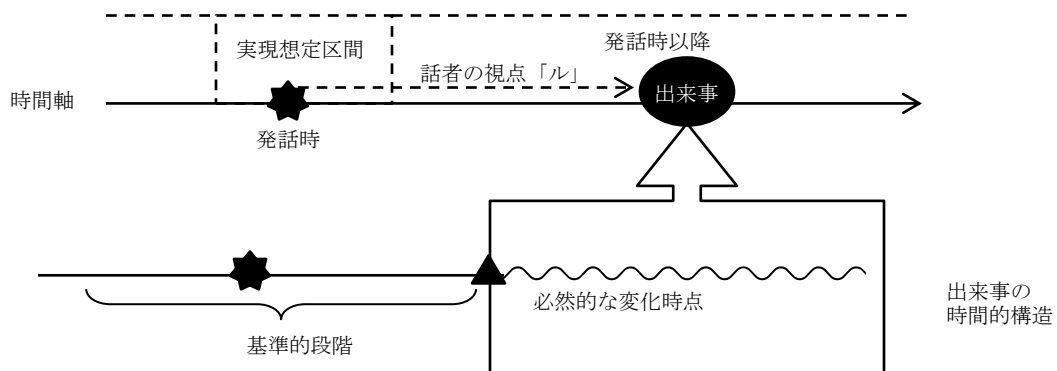


図 16. のように、現在を表すために出来事が実現想定区間内、つまり「いつ起こってもおかしくない」と解釈できる区間に登録されるため²³、発話時の状態と出来事の状態の区別がなくなると考えられる。従って、この場合、発話時において既にその状態となっていることを含有している述語のみ「現在」の解釈を許す。すなわち、単独事情や恒常事情を表す静的述語、そして、動きを表す述語（既に開始した状態）に限って「ル」が現在の出来事として表現可能である。この種の「ル」の実例は以下の 3.3.2. にて詳しく述べる。

一方、「ル」は未来を表す場合でも、「出来事を把握した時点は発話時以降である」といった本質は変わらない。ただし、この場合、捉えようとする出来事は実現想定区間内で捉えられない。

図 17. 未来を表す「ル」



²³ 実現想定区間内でも、出来事は発話時以降の時点にいないなければならない。

未来を表すためには、実現想定区間外に出来事をひとまとまりとして把握しなければならない。そして、出来事の開始かつ変化は、発話時以降にあると予測されるため、発話時の状態はその変化が起こる前の期間という「基準的段階 (Preliminary Stage)」の状態になるため、「ル」の未来解釈が可能になる。そのため、この場合は述語が表す意味の中に変化の時点が含まれていると考えられる。以下の 3.3.1. で実例を挙げる。

以上、「ル」の本質について述べた。しかし、これは「ル」が文末に現れる場合のみであり、「〜ル前」など従属節の場合には、テンスの意味が弱まり、「基準的段階」といったアスペクト性の側面が強まると考えられる。本研究は、以上の仮説を基にして「ル」の用法を分析していく。

3. 2. 2. 「cà」の意味

3.1.2. で言及した先行研究の問題点を踏まえ、「cà」はアスペクトを表す形式として扱うべきだと考える。タイ語は日本語と違い、時間的ダイクシスの概念は持っているものの、それを表す特定の形式はない。「ル」の本質はテンス的な意味だと考えられるが、アスペクト性も含有しており、区別することは難しい。しかし、「cà」はテンス的な意味が含まれておらず、出来事を把握する時点が発話時以降でも以前でも使用が可能である。

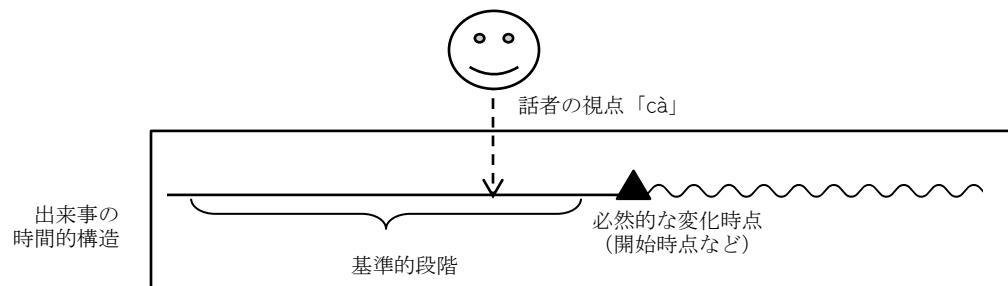
- 15) 「cà」の意味：出来事は時間軸上、どこで把握されても構わない。話者は出来事の時間的構造を見通し、各局面における変化が起こる前の期間「基準的段階 (Preliminary Stage)」に視点を置く。そのため、「cà」が示す出来事の内在の意味には変化時点を含まなければならない。

「cà」は「ル」といくつかの点が異なる。まず、「cà」は時間ダイクシス、いわゆるテンス的な意味を含有していないため、必ずしも未来を表すわけではない。そして、「cà」を使用する際、話者が着目するのは、ひとまとまり (Perfective) としての出来事の基準的段階ではなく、Imperfective 的に述語の意味を捉え、時間的構造に内在して

いる様々な局面の基準的段階である。そのため、「cà」の本質は「局面の基準的段階」であると言えよう。しかし、「cà」には非現実モダリティ用法もあると言われている (Srioutai 2004i、高橋 2009)。これは「cà」の意味仮説からどう説明していくか、以下の 3.3.3. で論ずる。

「cà」を伴う述語の時間的構造に変化時点が無ければ、基準的段階を捉えることは不可能になる。このことから、変化の局面を持たない恒常や単独事情は「cà」が使えないと考えられる。

図 18. 「cà」の意味



出来事が把握された位置と発話時との関係は「cà」の使用条件に関与しない。そのため、図 18. のように、述語の時間的構造のフレームのみ現れており、時間軸との関係が含まれていない。話者の視点は述語の時間的構造内にある局面の基準的段階にのみ着目していると考えられる。つまり、発話時以前に出来事が把握されても、使用条件さえ満たされば「cà」を用いることができる。

3. 3. 「ル」と「cà」の用法

各述語の種類によって「ル」と「cà」が表す意味はいかに異なるか分析する。なお、タイ語では、アスペクト形式は動詞句の前か後ろに付く (Muansuwan 2002)。「cà」の文の中の位置は、動詞句の前である。

3. 3. 1. 複雑な場面 (Complex Scene) における「ル」と「cà」

第2章の21ページでまとめているように、静的述語でも動的述語でも、主に話者によって二つの捉え方があると考えられる。一つは属性など、時間的構造を持たない単独事情 (Single Configuration) である。もう一つは、話者は「予期」として何かの情報を把握し、その後に捉えようとした出来事の情報と関連付けるという複雑場面である。ここでは、まず複雑な場面に現れる場合の両形式を考察する。

3. 3. 1. 1. 静的述語の場合

「ル」と「cà」は両者とも複雑場面を表す静的述語を伴うことができる。

- 16) a. そもそも応急仮設住宅というのは応急の住宅でありますから、夏は暑くて
冬は逆に寒い。 (少納言)
- b. まずはフライパンを強火で熱して、煙が立つくらい熱くなったら、ここ
らが早い。あまりに早いので、あらかじめ市販の「シマダヤの中華塩焼そ
ば」の麺を袋から出しておいってください。 (少納言)

「ル」は静的述語を伴う場合、一般的に現在の状態を表すと言われているが、16)では全て「未来」を表す例である。16)a.での述語「暑い」と「寒い」は、主題の「夏」と「冬」の属性であるように見えるかもしれないが、実はこの場合、話者は（普通の住宅の場合）「夏になると涼しく、冬になると暖かく暮らす」という予期の情報を持っていると見られる。しかし、応急仮設住宅であることを原因として、「夏になると暑く、冬になると寒く暮らす」という状態が予測され、つまり予期の状態を変化させる。従って、例16)a.の「ル」は属性ではなく、発話時の状態は「夏になると暑く、冬になると寒く暮らす」という出来事になる前の基準的段階であるため、「ル」は未来の出来事を示すようになる。そして、16)b.も同様に、話者は「ゆっくりと料理する」状態を予期として捉え、

「フライパンを強火で熱して、煙が立つくらい熱くなった」ため、発話時の状態は料理の過程が早くなる前の基準的段階にあり、「ル」は未来を表すことになる。

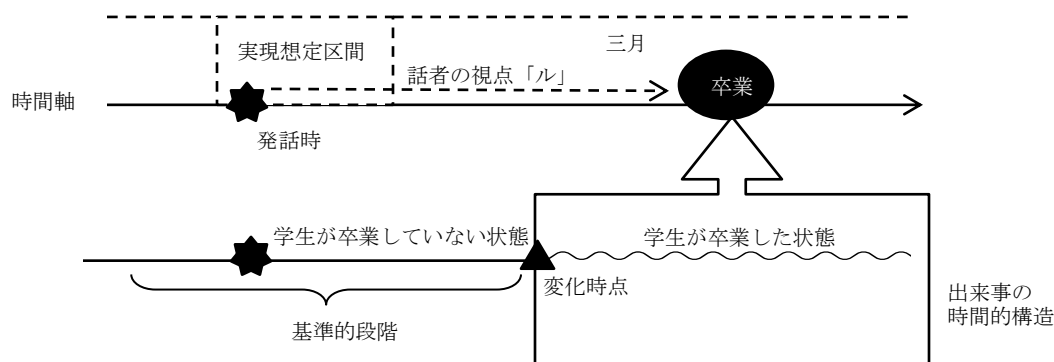
- 17) a. 一巡りしました。早かった、というか、やっと、というか、さあ～これから始まりです。 (少納言)
- b. 今日からお盆で、田舎に帰省。日記は、しばらくお休みだ。 (少納言)
- c. 今日は6月24日、もうすぐ七夕ですね。今年は彦星と織姫が天の川で会えるでしょうか (少納言)
- d. ヘボン先生の率いる六年生も、この三月いよいよ卒業だ。 (少納言)

16)は形容詞文であったが、17)のように名詞文も未来の解釈ができる。17)a. では、予期として何らかの理由でやりたいことがまだ始まっていない状態になっているが、もうすぐ「始まり」の状態になることを見越し、変化が起こる前の段階は発話時の状態として捉えられる。そして、17)b. では今まで日記を続けて書いていた状態を予期として捉え、「お盆で田舎に帰省」することによって日記を書くことが「休み」状態に変化することを予想し、発話時の状態は変化の前の基準的段階となる。17)c. も同様であり、発話時「今日は6月24日」は七夕ではない状態であることを予期とし、7月7日になると「七夕」である状態に変化することを読み取り、発話時の状態は変化の前に位置付けられる。17)d. では、発話時は「三月」ではないため、学生が「卒業」していない状態が予期になり、発話時の状態は学生が「卒業」する状態になる前の基準的段階である。以上の16)と17)の例では、未来を表す時間副詞「そもそも」、「ここから」、「これから」、「もうすぐ」、「いよいよ」と共起しているが、「ル」が未来を表すことができるのは、これらの働きではない。

- 17) d' ヘボン先生の率いる六年生も、(この三月) ~~いよいよ~~ 卒業だ。

例えば、17)d. と d' を比較して分かるように、「いよいよ」がなくても「卒業」が未来の三月に起こる出来事であることは変わらないのである。なお、日付を表す言葉「この三月」も同時に落とした場合でも、「卒業」は未来の出来事という解釈は同じである。この例を図で説明すると以下のようなになる。

図 19. 例 17) d. における「ル」の意味



話者は「卒業」をひとまとまりの出来事として捉え、「卒業」の開始・終了時点や過程など内在的意味を問題としない。そして、その出来事は発話時以降（三月の区間）の区間に登録され、発話時の状態は「卒業」の前段階「基準的段階」になる。そのため、「ル」を伴う「卒業」は未来の出来事として解釈できる。

次にタイ語の「cà」の用法を見ていく。第二章の 2.2.2. で紹介したように、タイ語では、状態述語として現れる形容詞を動詞と区別せず、「形容動詞 (Adjective State)」として扱っている。そして、他の状態を表す動詞を「状態動詞 (Verbal State)」と呼んでいる (Phillips&Thiangburanathum 2007)。ここでは「cà」とこの二種の述語との共起を見る。

- 18) a. khon-rao cà sǔai cà lòo thîi-sùt tɔɔn chûaŋ ʔaa-yú
 人 cà きれい cà ハンサム 一番 時 頃 年齢

thào-rài.

いくら

(GOOGLE 検索)

=人は何歳くらいが一番きれい、一番ハンサム (になるの) か。

b. chûaŋ-nîi prà-teet thai khôo-sùu nâa-rón dooy ?aa-kàat cà

最近 国 タイ 入る 夏 [CJT] 気温 cà

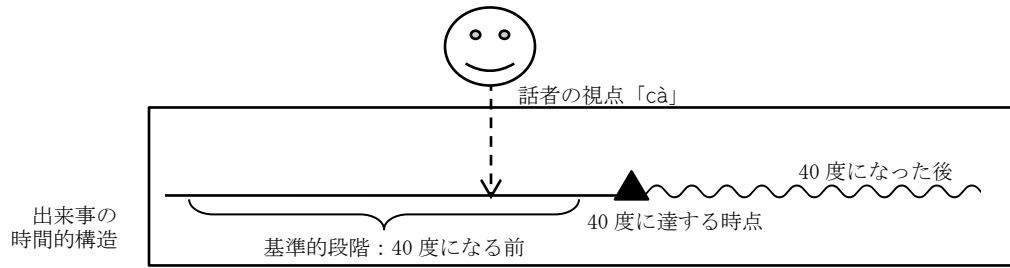
rón sũu sũt thũŋ sîi-sîp ?oŋ-săa-sel-sîas. (GOOGLE 検索)

暑い 高い 最も まで 40 摂氏温度

=最近タイは夏に入って、最高気温が摂氏 40 度まで暑 (くなった)。

例 18) は「cà」を伴い、形容動詞が述語として現れた例である。「sũai (きれい)」、
「lò (ハンサム)」など、普通は変化の時点が含まれない静的状態を表す述語だが、こ
の場合、「cà」との共起から、内在的意味に状態の変化を含意させ、基準的段階の期間
を把握することが可能になる。18)a. では、話者の視点が「一番きれい、一番ハンサム」
状態に達する前の基準的段階に置かれ、その状態がいつ起こるか、質問している。そして、
主体が「一番きれい」の状態ではない (少なくとも、そう思っていない) ことを予期とし
て話者が読み取っているが、時間ダイクシスが含まれていないため、必ずしも発話時の状
態が予期と同様であるとは言えない。18)b. も同様に「一番暑い (40 度)」状態に達する
前の基準的段階が着目され、予期としての基準的段階は「まだ一番暑い状態、つまり 40
度に達していない」と捉えられている。18)a. と b. の共通点の一つは、最高点を意味する
単語が書かれており、より変化の時点が強調されているため、「cà」が現れやすいので
はないかと考えられる。例として図で 18)b. の「cà」を考察すると、以下のように表せる。

図 20. 例 18)b. における「cà」の意味



上記のように、「cà」で捉えられる基準的段階は、必ずしも発話時の状態である必要はない。18)b. の出来事「一番暑い (40 度)」は、既に起こっている、あるいはまだ起こっていない、どちらの解釈でもおかしくないのである。発話する際、話者が着目しているのは、「一番暑い (40 度)」に達していない状態だけである。

19) a. thâa yan mâi ruai tham-tua ruai kôo cà con.

もし まだ [否定] 金持ち 身なり 金持ち [CJT] cà 貧乏

=もしまだ (本当の) お金持ちではないのに身なりをお金持ちのようになると、貧乏 (になるの) だ。(GOOGLE 検索)

b. faj tham-má léeo cà sà-baai cai.

聞く お経 léeo cà 楽 心

=お経を聞くと、心が楽 (になるの) だ。(GOOGLE 検索)

例 19) は、条件文である。条件文は現実の世界にまだ起こっていない出来事であり、話者の頭に生まれた出来事であるため、話者が変化を予測してそれについて述べやすい環境である。そのため、タイ語では、条件節を表す「thâa (もし)」はよく「cà」と共起している。この場合、条件文の条件節は予期の状態を変化させた原因だと見なすことができる。19)a. では、「まだお金持ちではない」状態が予期と同一視され、お金持ちのようにお金をたくさん使ったりすることで、「お金持ち」ではない状態から「貧乏」の状態に変わり得ることを述べている。19)b. では、19)a. のように「thâa (もし)」節は無いが、

「心が楽」ではない予期の状態を捉えられている。そしてその状態が「お経を聞く」こと
によって「心が楽」な状態に変化するのである。

20) chà-lǎəm phěei càak-níi kaan-muaŋ cà rǒɔn-rɛɛŋ khûn.

チャレム 明かす これから 政治 cà 熱い (激しい) 上がる

=チャレムさんはこれから政治が激し (くなる)と明かした。(GOOGLE 検索)

「cà」は変化の基準的段階を読み取ることができれば、引用節にも現れる。例 20)では、
「cà」は引用節に現れて主語の「チャレムさん」が読み取った「政治が激しい」状態へ
の変化を示している。

21) lǎk-sà-nà-ʔaa-kàat dooi-thûa-pai khǒɔŋ pii-níi khâat wâa

気象の状況 一般 の 今年 予測する と

ʔaa-kàat cà mái nǎaw-yen mâak nák. (GOOGLE 検索)

気象 cà [否定] 寒冷 とても そんなに

=今年の全体的な気象は、そんなに寒冷ではないと予測された。

「cà」は否定を表す形式「mái」とも共起可能である。例 21)では、昨年、一昨年、一
昨々年など前の記録から「寒冷な気象状況」だった状態が予期とされ、その状態を否定し
て今年は「寒冷な気象状況ではない」状態に変化する可能性があるとして述べている。

22) a. rao cà mûŋ-pai sùu khwaam-fǎn lé prà-sòp-khwaam-sǎm-rèt

我々 cà 向かう に 夢 と 成功する

yàaŋ-rai dooi nam-phaa khon thîi rao rák pai

どうやって で 連れる 人 [RP] 我々 愛する 行く

dûai-kan. năŋ-sǔw lêm-nii cà mii kham-tòp hâi khun.

一緒に 本 この冊 cà 有る 答え あげる あなた

= 我々はどうやって愛する人を、夢に向かって成功するまで共に導くか。

この本は（あなたにあげる）答えがある。 (GOOGLE 検索)

b. pii-nâa hǒŋ cà pen chéem phrii-mîa-lîik!

来年 白鳥（リヴァプール） cà [CPL] 優勝者 プレミアリーグ

= 来年リヴァプールはプレミアリーグの優勝者だ（ぞ）！ (GOOGLE 検索)

例 22) は状態述語を伴う「cà」の場合である。22)a. で捉えられる予期は、主語の本が「答え」のない状態なのではなく、ある人が本を読む前に、ある問題に対して「答え」を持たない状態にあることが予想されている。そして、本を読むことでその人が「答え」を見つけるような状態変化を示すのである。22)b. では、「pii-nâa（来年）」という時間ダイクシスを表す言葉があるため、「リヴァプールは優勝していない」状態は予期でもあり発話の時点の状態でもある。しかし、話者にとって来年の時点になると、その状態が変化し、「リヴァプールは優勝者」になることを述べている。

以上、通常変化の時点を持たない静的述語でも、テキストに現れていない「予期」を捉えれば、複雑場面の出来事として解釈可能であり、状態の変化を読み取ることができる。分かった。「ル」は「出来事を発話時以降の時点に登録した」ことを示す本質を持っているため、「ル」は「未来」の出来事を表すと考えられる。一方、「cà」は時間ダイクシスの意味が含まれていないため、単なる状態が変化する前の基準的段階を示しており、必ずしも未来の出来事を表すわけではない。しかし、例 22)b. のように時間副詞がある場合、「cà」も「ル」のように未来における変化を示すことができる。

3. 3. 1. 2. 動的述語の場合

動きを表す述語は、一般的に時間的構造を持っており、少なくとも「開始時点」を持っていると考えられ、変化の時点として捉えやすい。従って、「ル」は動的述語を伴う場合、

未来の出来事を表すと言われてきた。一方、「cà」は「ル」のように出来事をひとまとまりとして捉えていないため、必ずしも未来の出来事を表すとは限らない。

- 23) a. 今日とうさんのお家に行く。 (少納言)
b. 12 日の 60 キロ級に出場したあと、続いて 14 日から 5 日間、国際ジュニア合宿にも参加する。 (少納言)
c. 今日はここまで。明日は「蹴上インクライン」編・2 を、お送り致します。
d. はっきりと言います。五年のうちに今の資産価値ががんがん落ちます。
e. これで「調査書くん」のフォーマットが終わりました。次はデータの入
れ方を説明します。 (少納言)

例 23) では、動的述語を伴って「ル」が「未来」の出来事を示している。23)a. は時間副詞の「今日」があるが、発話時の状態を「行く」状態として表すのではなく、むしろ未来（今日中）における「行く」状態の基準的段階を示している。23)b. から e. までも同様に、時間や時点を示す言葉の「14 日」、「明日」、「五年のうち」、「次」と共起しており、その時点は発話時以降であると捉え、発話時の状態は出来事が発生する前の段階であると述べている。「行く」「説明する」等の必然的な終了時点を持たない活動述語でも、必然的な終了時点を持っている「落ちる」等の到達述語でも、話者は同じように問題とする出来事をひとまとまりとして捉えている。例 23) では時間副詞が現れているが、状態の変化時点を捉えれば、副詞がなくても未来の出来事に解釈できる。

- 24) a. いままでの食事のとり方、生活スタイルをちょっと変えるだけで、
ダイエットは成功します。 (少納言)
b. 確かに彼らは今はお金のない貧乏学生だ。しかし彼らはやがては結婚し、
子どもを産み、生活をする。 (少納言)

例 24)では、未来の時間を表す言葉が明確に現れていないが、「ル」が未来の出来事を表すことが解釈されている。通常、話者の認知の世界のみに存在する予期が文脈から捉えられるため、発話時以降における状態変化が読み取りやすくなる。従って、未来の時点を示す言葉や時間副詞がなくても、十分に未来の出来事が「ル」で表せるのである。24)a. と b. では「いままで」、「今は」という副詞で発話時の状態を把握することができる。なお、24)b. の「生活をする」のニュアンスは、発話時の状態である「貧乏学生」と対立されたことで、「(貧乏ではない)生活をする」といった状態変化を意味していると考えられる。

このように、話者は予期を捉えることさえできれば、出来事の解釈は複雑な場面となり、未来における状態変化を把握できるようになる。

- 25) a. あなたが死なねばならないというなら、わたしも死にます。(少納言)
 b. 時間がたつと切り口が乾いてしまい、見た目も味も落ちます。(少納言)
 c. 何気ない一言で傷つけるようなことがあったら大変だ。

例 25)は条件文で、反実仮想の出来事である。反実仮想は現実の世界ではないため、発話時の状態とは異なると考えられる。そのため、条件節の内容が満たされれば、現実の状態が発話時以降の時点に変化するという前提があるので、「ル」は未来に起こる（可能性がある）出来事を表すと考えられる。25)a. では、現実で発話時の状態では「死ぬ」状態ではないことが予期として捉えられる。25)b. も発話時の状態は、まだ「落ちる」状態になっていない。従って、例 25)も 24)のように「ル」は未来の出来事を表すと見なされる。なお、条件文に現れる 25)c. のような静的述語の場合でも同じ解釈ができると考えられる。

次は、動的述語と現れる「cà」を見てみよう。

- 26) a. m̥ɛ cǎa. tham-mai mài m̥a sák-thii. nũu cà m̥ai tham
母 [ENDP] なぜ [否定] 来る やつと 私 cà [否定] する

kee-ree cà sǎn-yaa pen dèk-dii. (GOOGLE 検索)

いたずら cà 約束する [CPL] いい子

= ママ。(待っていても) なぜ来ないの。わたし、いたずらしない、いい子になるように約束するよ。

b. khà-nà-nii cwŋ phá-yaa-yaam dən khruwŋ-pha-lit-fai-fáa thii mii
現在 から 努力する 動く 発電機 [RP] 有る
tôn-thun tám-sút yàŋ roŋ-fai-fáa mɛɛ-mó thii cháit thàan-hĩn sùan
コスト 最低 例えば メーモ発電所 [RP] 使う 石炭 一方
roŋ-fai-fáa-pha-laŋ-khwaam-róŋ cà dən nóŋ-sút sũŋ cà
火力発電所 cà 動かせる 最少 それで cà
tham-hâi khâa-fai dooy-ruam mâi pràp-tua sũŋ khũn. (TNC)

[使役] 電気料金 全体的 [否定] 修正 高い 上がる

= 現在、石炭を使用するメーモ発電所など最もコストの低い発電機を動かせるように努力している。一方、全体の電気料金が高くないように修正するため、火力発電所を最小限動かす。

c. nai-tɛɛ-lá-wan duan-can cà praa-kòt hâi hẽn mii kha-nàat
日々 月 cà 現れる [使役] 見える 有る 大きさ
tànŋ-tànŋ-kan. thán-nii-phró duan-can khlũan rôp lôok.

様々 その理由 月 動く 回る 地球

= 毎日、月は様々な大きさで現れる。これは月が地球を回しているからだ。

(TNC)

例 26) は動的述語を伴う場合の「cà」である。26) a. では文の中に「cà」が複数現れており、話者は自分が予想した状態変化を「cà」で続けて述べることができるが、二つの出来事が連続して発生しているという意味ではない。26) a. の場合、「いたずらをしない」

状態と「いい子になると約束する」状態におけるそれぞれの基準的段階に視点を置いていると解釈できる。26)b.でも「cà」が二ヶ所現れているが、「cà dən nóoy-sùt (最小限動かす)」の「cà」は主節の述語に現れ、「sũŋ cà tham-hâi khâa-fai dooy-ruam mâi pràp-tua sũŋ khûn (全体の電気料金が高くないように修正させる)」の「cà」は修飾節に現れている。それぞれの「cà」は状態の基準的段階を表している。そして、26)c.の「cà」は、月が「praa-kòt (現れる)」動詞の基準的段階を示すのではなく、動詞句が表す「praa-kòt hâi hěn mii kha-nàat tàaŋ-tàaŋ-kan (様々な大きさで現れる)」といった全体的な状態を示しているのである。つまり、毎日月の形が変わっており、毎日月を見るたびに形の状態変化を感じることができるため、26)c.はその状態の基準的段階に立って述べているのである。

「cà」は「ル」のように条件文に現れている。例 19)で述べたように、条件文で述べられる出来事は、現実の世界と異なるため、話者は状態の変化を予測し述べやすい。そのため、タイ語では、条件節を表す副詞、例えば「thâa (もし)」、「hàak (もし)」などはよく「cà」と共起している。動的述語を伴う場合もその例外ではない。

- 28) thâa plɛŋ-tua pen hà-nu-maan dâi kô cà hò khûn
 もし 変身する [CPL] ハヌマーン [可能] なら cà 飛ぶ 上がる
pai yùt rôt phrá-ʔaa-tít hâi lɛn cháa loŋ
 行く 止める 車 太陽 [使役] 運転する 遅い 下がる
 mũan-yàaŋ nai rûaŋ raam-má-kian. (TNC)
 のように 中 話 ラーマーヤナ
 =もしハヌマーンに変身できたら、ラーマーヤナの話のように空へ飛び上が
って太陽の車を止めて運転を遅くさせる。

例 28)では、条件節の内容（波線）が満たされれば、状態変化が起こると解釈できるため、「cà」は条件文など、反実仮想を表す場合によく現れる。一方「ル」の場合、その

出来事が発話時以降に捉えられる場合のみ使用できる。しかし、「cà」は発話時以前に捉えられるはずだった反実仮想の場合でも現れる。

29) a. mia phǒm ʔao mɯw pàt-pàai pai thûa tók-jai lon-laan
 妻 僕 用いる 手 払う 行く 全体 驚く 慌しい
 con song-tua kùap mâi yùu tɛ̃p cà lóm.
 まで バランスを取る ほとんど [否定] 立つ ほとんど cà 転ぶ
 =僕の妻は驚いて、慌ただしく手であっちこっち払って、バランスを崩して、
ほとんど転びそうだった。 (TNC)

b. mûa doon khâo-pai bèp-níi kô thêp cà róng-hâai
 時 [受身] 当たる このように と ほとんど cà 泣く
 klàp-bân kùap thúk-khon mûa khui kan mâi rúu-rûan
 帰宅する ほとんど みんな 時 話す 互い[否定] 理解する
 kô mâi mii phûan cà kin ʔaa-hăan hâi ʔa-ròy-pàak
 [CJT] [否定] 有る 友達 cà 食べる 料理 [使役] 美味しい
 kô mâi dâi. (TNC)
 [CJT] [否定] [可能]

=こういうことされた時、みんなは泣きそうな顔になってほとんど家に帰った。 互いは話が理解できないために友だちにもなれず、料理もおいしく食べることができなかった。

例 29)では、発話時以前の反実仮想の出来事を表している。この場合、「thêp (ほとんど)」副詞がよく「cà」と共起する。29)a. と b. では、「mia (妻)」が本当に転んだのではなく、そして「thúk-khon (みんな)」が本当に泣いて家に帰ったのではないが、その状態になる前の段階を示している。「cà」は局面の基準的段階に視点を置くという性質を持っているからこそ、この解釈ができるようになったと考えられる。

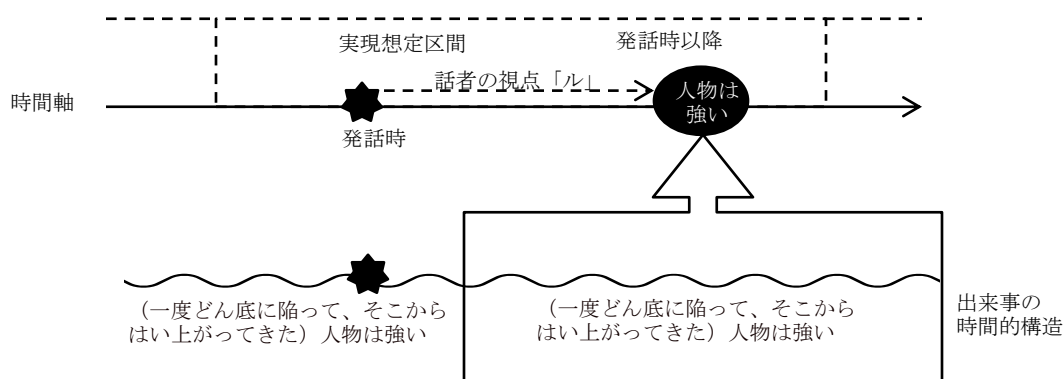
3. 3. 2. 単独事情 (Single Configuration)

「cà」は述語に基準的段階を与え、「cà」と共起する出来事は全て複雑的場面の解釈になるため、タイ語は単独事情の場合、アスペクトを付けない。しかし、「ル」はそうではない。発話時以降に出来事が実現想定区間内に登録される場合、出来事の解釈には状態変化が存在していなくても「ル」の使用が許されるのである。従って、「ル」は変化時点が必要としない単独事情を伴うことができるが、「cà」はできないと考えられる。

- 30) a. 今日は、夏みたいに、暑いね。 (少納言)
- b. 豆腐店は朝が早い。旅館の朝食を炊くのにおあつらえ向きだ。 (少納言)
- c. 私は、4才の男の子ともうすぐ2才になる女の子のママです。 (少納言)
- d. プールでは、水着のおねーちゃんを観察するのが良い。 (少納言)
- e. 経営者にしても、一度どん底に陥って、そこからはい上がってきた人物は強い。逆境は誰にでもある。 (少納言)

例 30) では、単独事情の解釈で「ル」は静的述語を伴って現在の状態を示している。30)a. から e. までは状態の変化が捉えられず、共起可能な出来事は 30)a.、b.、c. のように発話時以前から既に始まっているか、30)d.、e. のように時間の流れと関係なく、いつでも真実である恒常的状态として捉えられる場合のみである。そして、その出来事がいつ実現されてもおかしくないといった性質を持つ実現想定区間の内部に登録可能だと考えられる。従って、「ル」は発話時の状態を現在の状態として示していると考えられる。

図 21. 例 30)d. における「ル」の意味



例 30)c. の属性を表す述語「(一度どん底に陥って、そこからはい上がってきた) 人物は強い」は、時間の流れに関らず話者にとっていつでも真実である恒常の状態である。この状態は発話時まで、出来事を登録した時点まで継続すると考えられるため、「ル」は現在の出来事を表すと解釈できる。

一方、一般的に状態変化が含まれているとされている動的述語も、単独事情として解釈され、出来事は実現想定区間内に登録される場合、状態変化の局面が捉えられなくなる。

- 31) a. サムギョプサル同様サンチュやケンニップに包んで食べる。もちろん日本での焼肉と同じで、まったく辛い。 (少納言)
- b. 「その辺の箱の上に、たしかバールがあったはずだ。それが要る。きみはバケツを持っていてくれ。誰かに会ったら、それで叩きのめすんだ。できるか？」 (少納言)
- c. 人間は誰しも間違いを起こします。 (少納言)

例 31) の「ル」は動的述語を伴うが、現在の出来事を表している。31)a. は食べる習慣を説明している文であり、変化のない状態だと考えられる。31b. では、終了時点を捉えられず、なんらかの原因で「要る」状態が発話時以前に発生しており、発話時の状態と発話

時以降で捉えられた出来事の時点まで及ぶと考えられる。そして、31)c. は恒常的な解釈になり、当然その状態が発話時までも出来事の時点までも継続しているのである。

以上、単独事情で現れる「ル」の意味を考察した。出来事が実現想定区間内に登録され、いつ実現されてもおかしくないといった性質が生じるため、同じ性質に解釈できる述語のみ共起できると言えよう。こうすると、発話時の状態＝出来事の状態だと見なし、「ル」は現在の出来事を表すようになる。しかし、「出来事を把握した時点は発話時以降である」という本質は変わらないのである。

3. 3. 3. 「cà」 とモダリティ解釈

Srioutai (2004i) では、「cà」が様々なモダリティ形式と共起可能であることや反実仮想を表す条件文 (Unreal Conditional) に現れることなどから、「cà」をモダリティ形式として扱うべきだと主張している。しかし、本研究はこれらの現象が「cà」の「局面の基準的段階」といったアスペクト性なしでは説明できないと考える。反実仮想を表す条件文の「cà」は、以上の 3.3.1. で説明した。反実仮想の出来事だからこそ、条件節の内容で現実の状態を変化させる (/変化させた) ため、発話時の状態は自動的に基準的段階として捉えられるのである。「cà」は時間ダイクシスを持たないため、発話時以前と以降に捉えられる反実仮想の出来事を捉えることができることも、既に 3.3.1. で述べた。

ここで注意すべきことは、状態変化とはただ基準的段階の状態が変化して新たな状態が生まれることを表すが、基準的段階の状態と新たな状態は必ず反対の関係を持っているわけではない (例えば、例 18))。このことから、基準的段階は新たな状態が始まる前の段階として解釈しても良い。ここで、改めて例 11) を取り上げ考えてみる。

- 11) a. ?it-thî-phon khǒŋ chon-chán nák-bùat nai sa-mǎi nán
権力 の 階級 聖職者 中 時代 その

nâa-cà maa càak khwaam-rôob-rúu dân daa-raa-sàat.

nâa-cà 来る から 知識 分野 天文学 (TNC)

=その時代の聖職者階級の権力は、天文学の知識から生まれたはずだ。

「cà」が現れるモダリティの複合形式の場合も、この解釈で説明できる。例 11)での「nâa-cà (はずだ)」は、「cà」が欠かせない要素である。しかし、それは「cà」がモダリティを表すことが理由ではなく、文脈から予期が捉えられ、状態変化のニュアンス(権力を持つようになる原因)が読み取れるため、新たな状態が始まる前の基準的段階といったアスペクト性が必要とされているのである。タイ語の「nâa-cà (はずだ)」は、「cà」が持っているアスペクト性の働きで、「未来か過去に起こる (/起こった) 予想された変化 (≠確信された現実)」の意味として使われている。

しかし、これは「cà」がモダリティ性を持たないというわけではない。だが、「nâa-cà (はずだ)」など他のモダリティ形式と複合した形式を分析するより、「cà」そのものを見るべきであると考える。

32) a. dûai baa-rá-mii khǒɔŋ phrá-ʔoŋ cà tham-hâi yaai

[CJT] 優れた徳 の 彼 (王様) cà [使役] 祖母 (話者)

mâi-penʔarai. cà nùai cà rɔɔn khêɛ-nâi yaai thon

大丈夫 cà 疲れる cà 熱い どれだけ 祖母 (話者) 耐える

dâi. khǒɔ phiang dâi chûwn-chom phrá-baa-rá-mii (TNC)

[可能] ください だけ [可能] 眺める (王様の) 姿

= 王様の優れた徳のおかげで私 (祖母) は大丈夫だ。 どれだけ疲れても暑く

ても私 (祖母) は耐えられる。王様のお姿を眺めることができるなら。

b. phûa rák-sǎa chii-wít mǎa thîi mâi-wâa cà duu sîn-wǎŋ

ため 守る 命 犬 [RP]それにも関わらず cà 見る 絶望

kha-nàat-năi cà pen ʔam-ma-pâat dən mâi dâi yàaŋ-rai
 どれだけ cà [CPL] 麻痺 歩く [否定][可能] どうやって
 kô-yarŋ ʔût-sàa khwŭan-khwŭai tem-thîi. (TNC)
 まだ わざわざ 努力する 全力
 = どれだけ絶望的に見えても、麻痺になって歩けなくなっても、犬の命を守るためなら、全力で努力する。

例 32) の「cà」、反実仮想の出来事を表している。話者は発話時の状態（状況）でやりたいことは、状態（状況）が変化しても変わらないという自分の意志を表す。出来事の基準的段階を与える「cà」の働きがないと、状態変化が読み取れないのである。

「cà」のモダリティ用法の考察によって、モダリティ複合形式の場合でも、条件文など反実仮想を表す場合でも、「cà」のモダリティ解釈は、基本的に「cà」のアスペクト性から派生した分析が可能であると分かった。これは「cà」の本質はモダリティを表す形式ではなく、アスペクト形式であるという説を支持するものである。

3. 4. まとめ

以上、「ル」と「cà」の様々な用法及び意味解釈を論じた。両形式は複数の意味用法を持っていると考えられるが、本質は一つであると考えられる。「ル」は「出来事を把握した時点が発話時以降である」ことを示す形式であり、「cà」は「局面の基準的段階」を示す形式であると整理できる。話者が出来事を実現想定区間外に登録したとき、「ル」は、それに伴う述語が状態の変化を捉え得る複雑場面を表せば、「cà」の本質と意味が重なり、両形式が翻訳上で対応する。一方、「cà」は時間的ダイクシスを持たないため、発話時以前に登録された出来事と共起する場合、「ル」とは対応しない。さらに、「cà」がモダリティを表す際は、他の要素及び文脈の働きと「cà」の本質が混合して生じているため、日本語を考える場合、単独の形式では表現できず、「なる」など他の要素に頼らなければならないこともある。

第4章 「タ」と「léεo」のアスペクト性

本章では、様々な場面に現れる「タ」と「léεo」の用法を整理し、どのように捉えればよいかを考えていく。従来「タ」の意味については、テンスを表す「過去」説、アスペクトを表す「完了」や「パーフェクト性」説、モダリティを表す「ムード」説など様々な見方に分けられている。本章は「タ」と「léεo」の本質を一つにまとめ、両形式が持っているアスペクト性に注目する。さらに、翻訳上、「タ」に対応しうる他の形式「dâi」と「khəəi」の意味との違いについても述べる。

先に結論を簡単に述べると、「タ」は「ル」の対立として発話時以前に出来事の情報が見えらることを示す。そして、アスペクト性は述語の意味と話者の視点との相互作用から捉えることができるようになるのだと考えられる。一方、「léεo」を使用する際、話者は変化時点の後の段階に着目しているため、「cà」と同じように「léεo」も述語における変化時点を要求する。さらに「léεo」は時間的ダイクシスの意味が含まれておらず、「タ」とは異なり、使用条件が満たされれば、発話時以降の出来事を示すことも可能である。

4.1. 先行研究のまとめと問題点

「タ」と「léεo」の意味については、これまで数多く研究されてきた。ここでは、代表的な先行研究と、本研究の立場に関わる先行研究を紹介する。

4.1.1. 「タ」について

「タ」の各用法を網羅的に扱った代表的な研究は寺村（1971）である。寺村（1971）は「タ」のテンス性、アスペクト性、モダリティ性を全て認める立場に立ち、文の種類及び述語の意味によって様々な「タ」の用法が現れると述べている。動詞述語の場合、特に時間を表す副詞がなければ、「タ」はテンスの過去かアスペクトの完了を表し、二義的であると指摘している。

33) Q: 昼ごはんを食べたか。

A: いや、(まだ) 食べていない/食べなかった。(寺村 1971)

一方、状態述語を表す形容詞文、名詞文の場合は過去の意味しか表せないと述べている。そして、状態述語動詞文の場合は、一般的に過去を表すが、話者の解釈によって現在のことを表すこともできるとしている (pp. 260-261)。

34) Q: この椅子は先刻からここにあったか。

A: いや、なかった/ずっとあったのではない。(寺村 1971)

「いや、なかった」という質問は過去を表しているのに対し、「いや、ずっとあったのではない」のは現在の否定文である。寺村(1971)の指摘から、動詞的述語であっても「タ」の意味は述語の意味によることが明らかにされている。

さらに、「ムード」の用法についても分析している。「ムード」説とは過去の反実仮想を述べる際、話し手の心的状態が反映されるとする説である。ムードの用法は6つに分けられている。

35) a. 同病院の渡辺正大外科医長は「運ばれてきた時は、からだは冷たく、危険

状態だった。もう少し遅かったら助からなかった」とっている。

b. (終わった将棋の棋譜を検討している) 5六馬、または2二銀でした。

c. 失礼ですが、お名前は何でしたかね?

d. ①起訴にしたものか不起訴にしたものか。

②月が鏡であったなら…

e. さあ、買った買った。

f. 多分そうだとにらんでいたが、やっぱり彼が犯人だった。(寺村 1971)

35)a. は「①過去に実際に起こらなかったことを、起こり得たこと」と主張する用法、35)b. は「②過去に実際しなかったことを、すべきであった」と主張するか回想する用法、35)c. は「③忘れていた過去の認識を思い出す」用法である。そして、35)d. の①と②は両方とも「④未然のことを、既の実現したことのようになす」用法である。35)e. と f. はそれぞれ、「⑤さし追った要求を、既の実現したことのようになして表す」用法と「⑥（過去の）期待の実現を表わす」用法である（pp. 266-275）。

寺村（1971）の分類は様々の「タ」を含んでおり、非常に明確な説明だが、なぜ動詞述語の場合は二義であるか、なぜ状態述語を表す形容詞文と名詞文は過去しか表わさないのか、そして、なぜムードの意味が生じるのか、及び三つの意味に共通する本質に関して、まとまった分析はまだ行われていない。

一方、寺村（1971）とは異なり、「タ」は単なるテンスかアスペクトを表す形式ではなく、むしろテンス性もアスペクト性も統合している形式だと述べている工藤（1995）の研究がある。工藤（1995）は、従来の過去の「タ」は「完成相過去」としている。つまり、アスペクト性の「完成」とテンス性の「過去」の統合であり、従来の完了の「タ」は「パーフェクト相現在」とし、アスペクト性の「パーフェクト」とテンス性の「現在」が含まれていると示唆している。前者の「完成相過去」は、現在と切り離し、発話時における状態に注視せず、過去の出来事を回想する性質を持っている。過去において複数の出来事の時間的展開を述べる際、「完成相過去」の「タ」が使われるとされている。

- 36) 「それから、わたしはうちへ帰ったの。そして、テレビをつけた。今日のお買い物案内というのが終わって、すぐニュースは始まったわ。つまらないから切っちゃった」
(工藤 1995 : 131)

一方、「パーフェクト相現在」の「タ」は、現在と切り離すことができない。そして、時間軸にある他の出来事との関係を捉えず、発話時に残存している動作の結果・効力を表し、その結果・効力が存続していることによって、未来における次の行動を表す出来事に

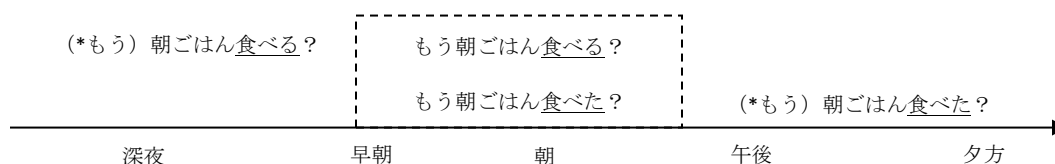
関連付けるが可能であると示している。

- 37) 「先生、邦枝さんから速達でお手紙が届きました。これで最後なのですか
ら、どうぞ読んで差上げください」 (工藤 1995 : 130)

「_____」線は、「パーフェクト相現在」の「タ」で表す事態によって関連付けられたこれからの行動を表す出来事である。発話者は「タ」を伴う述語を現在の出来事として捉え、未来につなげようとするのだとしている。要するに、「完成相過去」と「パーフェクト相現在」の最も大きな違いは、現在の状態との関わりの有無である。しかし、工藤 (1995) では、述語に内在する意味によって「タ」の意味が変わると指摘しているものの、「タ」の本質についてまだ明確にされていない。

「タ」の意味を現在の状態との関りの有無を中心にして研究したのは井上 (2001i) である。井上 (2001i) の研究の最も重要な点は、前章で「ル」の分析にも使用した「実現想定区間」の概念である。井上 (2001 i) では、「タ」は過去を表す形式だと主張しつつ、工藤 (1995) のパーフェクト性を表す「タ」について論じている。「タ」のパーフェクト性は、いわゆる言語形式というより、その述語に内在している「発話時の前後を含む一定の区間内のどこで実現されてもおかしくない」というような性質から生み出されると考えられている (p. 125) と述べ、ムードの「タ」を含む全ての用法は、「出来事の実現時が (発話時直前を含む) 発話時以前であれば使える」といった本質で説明できると指摘している。そして、「実現想定区間」の存在を確認するために、「もう」との共起が観察されている。

図 22. 井上 (2001i : 127) の実現想定区間



「もう朝ごはん食べる/食べた？」という質問を現在の状態として捉えるためには、出来事が「早朝」と「朝」の期間内に登録されないと不自然である。このことから、「実現想定区間」は「早朝」と「朝」の期間を示すのである。「タ」であれば出来事は発話時以前に実現され、「ル」であれば発話時以降に実現される。本研究の前章も井上（2001i）のこの知見を出発点として分析を行っている。

興味深い先行研究は他にも、「タ」のムードを対象にして分析した金水（1998）、岡野（1999）、徐（2008）、定延（2008）などの研究がある。状態変化に着目した許（2009）や孫（2009）などの研究、そして、話者の事態把握（Construal）²⁴の概念から見た新村（2009）、本多（2009）などもある。このように、「タ」は非常に多様な観点から研究されている。本研究は、これらの研究を参考にし、まだ改善する余地があると考えられる話者の視点といった認知の面からの検討を加え、タイ語の「lɛɛO」と対照させるために「タ」の意味分析を進めていく。

4.1.2. 「lɛɛO」について

タイ語の「lɛɛO」も「タ」と同様に、「完了」説、「パーフェクト」説、「パーフェクティブ」説、「多義性」説など、様々な見解に分けられている。本研究の分析に入る前に、初めて言語学の観点から現代タイ語を分析したタイの言語学者 Uppakitsinlapasarn（1964）の研究を始め、日本語の「タ」と対応する表現を記述したチュンスィーウィロート（2001）や田中（2004）など、そして「lɛɛO」の意味を分析した Chiravate（2002）や Kullavanijaya&Bisang（2007）などをまとめておく。

²⁴ 本研究も日本語話者とタイ語話者の事態把握（Construal）について考察する。詳しくは第6章で述べる。

Uppakitsinlapasarn (1964) は、印欧言語の文法をタイ語に適応しようとし、「lɛɛo」をkaan-sǒm-buun²⁵ (完了) を表す形式として分析している。kaan-sǒm-buunは、kaan-sǎa-man (テンス) と共起し、4つの用法があると述べている。

表7. Uppakitsinlapasarn (1964) における Perfective としての「lɛɛo」

kaan-sǒm-buun (Perfective) kaan-sǎa-man (テンス)	「lɛɛo」
pa-rat-yú-ban-kaan (現在) 「kamlaŋ」	①khǎo <u>kamlaŋ</u> kin khâao <u>lɛɛo</u> . 彼 kamlaŋ 食べる ご飯 lɛɛo (=彼は(もう) ご飯を <u>食べている</u>)
?a-dîit-ta-kaan (過去) 「dâi」	②khǎo <u>dâi</u> kin khâao <u>lɛɛo</u> . 彼 dâi 食べる ご飯 lɛɛo (=彼は(もう) ご飯を <u>食べた</u>)
?a-naa-khót-kaan (未来) 「cak」(「cà」 ²⁶)	③khǎo <u>cak</u> kin khâao <u>lɛɛo</u> . 彼 cak 食べる ご飯 lɛɛo (=彼は(これから) ご飯を <u>食べる</u>)
?a-nút-ta-kaan (超時) 「動詞の原形」	④khǎo <u>kin</u> khâao <u>lɛɛo</u> . 彼 食べる ご飯 lɛɛo (=彼はご飯を <u>食べた</u>)

表の分類を見ると、タイ語はテンスを持っている言語のように見えるが、取り上げられた形式は、必ずその「現在」「過去」「未来」の出来事を表すのではない。例えば、「未来」を表すとされている「cak (cà)」も第3章で論じたように、アスペクト性を持っている形式であり、過去の出来事も示し得ることが明らかになっている。さらに、「lɛɛo」に対しては「完了」を表す形式とされているが、必ずしも「完了」とは解釈

²⁵ Uppakitsinlapasarn (1964) は「kaan-sǒm-buun」を「weelaa thî tham kaan nán-nán sèt lɛɛo (その出来事を完成した時を示す)」と定義している。本研究は日本語の「完了相」と類似した意味で使われていると考え、「完了」と訳した。

²⁶ 両者は同義である。しかし、現代タイ語では「cak」より「ca」の方がよく使われている。

できない場合がしばしばある。例えば、表7の③のように、「cak (cà) 」と共起する場合、「cà」の本質は「局面の基準的段階」であるが、その局面は終了時点の局面に限らず、開始時点の局面も表すことができるため、ここでは「彼は（これから）ご飯を食べる」という解釈になり、「完了」を示しているとはいえない。④のような?a-nút-ta-kaan（超時）を表すとされている動詞の原形の場合も、「完了」の意味以外に、「彼はご飯を食べ（始め）た」といった終了する前の局面をとっても良いので、Uppakitsinlapasarn（1964）による「完了」として「lɛɛo」を扱う知見は不適切だと考えられる。

「lɛɛo」は一対一で「タ」と対応しているのではない。チュンシーウィロート（2001）は日本語から翻訳された小説を調査資料として「タ」に訳すことができる表現を記述している。829 例文のデータから、タイ語で8パターンの表現が可能であるとしている。興味深いことは、「lɛɛw」の使用率が驚くほど低く、1.09%に止まっていることである。一方、動詞原形の使用率は圧倒的に高く、76.12%に上っている。その他に「dâi」と「khəəi」も現れ、それぞれ1.09%と0.12%であった。チュンシーウィロート（2001）の研究は各形式の使用率と例文を記述することに止まっているが、チュンシーウィロート（2001）の成果から、少なくとも会話の場合ではない第三者からの観点で語った叙述のテキストにおいては、「lɛɛo」などのアスペクト形式はあまり使用されていないことが予測できた。実際、チュンシーウィロート（2001）で挙げられた「lɛɛo」の使用例も全て小説に登場した人物の会話場面に現れている例である。第三者からの観点で語った叙述のテキストの特徴は、その世界の出来事が発生する時間は「非現実的時間」なので、過去形が時間ダイクシスの概念及び述語の解釈で捉えられた述語の意味との関係づけが存在しない²⁷（工藤1995：21）ことが原因かもしれない。本研究がコーパスを調べた結果、叙述のテキストでも「lɛɛo」の使用が少なくないことがわかった。しかし「タ」とは対応しておらず、話において複数の出来事の時間的展開を述べる際に接続詞として多く使用されている。

²⁷ 超時的な意味を持っている動詞原形が、最も使用率が高いことも一つの証拠になると考える。

一方、田中（2004）は「léεo」を「完了」を表す形式とし、対応する表現を記述している。「léεo」は一般的にアスペクト性を表す「完了」の「タ」に対応する。しかし、「タ」以外にも、「始まる」「結婚する」などの動詞を伴う場合、日本語は「テイル」で表すが、タイ語は「léεw」になる（pp. 428－429）。田中（2004）では述べていないが、これらの動詞は、点的な（punctual）時間的構造を持っている到達述語に分類される。従って、「léεo」は結果継続の局面を示す「テイル」と対応していると言い換えられる。整理すると、田中（2004）は「léεo」を5つの用法に分けている。

38) a. ʔè! rót-fai maa léεo.

〔感嘆〕 電車 来る léεo

=あつ、電車が来た。

b. khun khá, chúak rɔŋ-tháao lùd léεo.

あなた [ENDP] ひも 靴 ほどける léεo

=すみません、靴ひもがほどけていますよ。

c. maa yùu muang-thai pen weelaa kii-pii léεo?

来る いる タイ王国 なる 時間 何年 léεo

=タイに来て何年になりますか。

d. mâi kin khâao léεo.

〔否定〕 食べる ご飯 léεo

=もうご飯は食べない。

e. chǎn tham-khwaam-saʔàad léεo sák-phâa. (田中 2004)

私 掃除 léεo 洗濯する

=私は掃除をして洗濯をした。

例 38) a. は「①完了を表す」用法である。この用法は「タ」と対応している。38) b. は「②状態継続を表す」用法であり、「テイル」と対応している。38) c. は「③完了と同時

に現時点までの継続を表す」用法ある。否定文 (mâi~léeo) で現れる場合、38)d. のように「④未然である行動の中断を表す」用法になる。そして、38)e. では複文に現れる場合であり、「⑤2つ以上の動作の前後関係を表す」用法だと述べられている。

本研究は、田中（2004）の分析についていくつか疑問を持っている。例えば、38)a. の場面では本当に「完了」と言えるのかという点である。また、例 38)b. で現れた「léeo」は「②状態継続を表す」とされているが、38)b. の述語「lùd（ほどける）」は上述した「結婚する」や「始まる」のような到達述語ではなく、むしろ達成動詞であろう。到達述語は「yùu」など継続を表す形式と共起できないが、達成動詞はできる。達成述語と共起する「léeo」は「yùu」と一緒に扱っても良いのか。

38) b' khun khá, chûak rɔŋ-tháao lùd yùu kha. (筆者)

あなた [ENDP] ひも 靴 ほどける yùu [ENDP]

=すみません、靴ひもがほどけていますよ。

例 38) b. と b' の違いは、状態変化を観察したかどうかという点にあると思われる。38)b' では、話者が観察した瞬間、靴ひもは既にほどけている。しかし、38)b. は、話者が初めて観察した時には結ばれていたが、もう一度観察してみた時にほどけている状態になっていたという状態変化のニュアンスが含まれている。このことから、38)b. の「léeo」は「状態継続を表す」用法だと扱うべきではないと考えられる。さらに、38)e. のような「⑤2つ以上の動作の前後関係を表す」用法では、もし「léeo」は田中（2004）が主張したように「完了」を表すとすれば、以下の文を説明できなくなるのである。

39) khǎo yuwn (khûn) léeo rɔŋ phleeng-châat. (筆者)

彼 立つ 上がる léeo 歌う 国歌

=彼が立（ち上）って国歌を歌った。

「léεo」は「完了」であれば、例 39) の解釈は、「彼が立って（そしてどこかに座った後）国歌を歌う」になるはずである。しかし、実際の解釈は「彼が立（ちあが）ったまま歌う」となっている。これらの疑問は、同じ根本的な問題点から発生したと考えられる。要するに、「léεo」の本質は Uppakitsinlapasarn (1964) や田中 (2004) が主張しているような「完了」説ではない、ということである。従って、別の立場の「léεo」の先行研究も考察する必要があると考えられる。

Chiravate (2002) は、アスペクト形式の「léεo」と複文に現れた接続詞としての「léεo」を別々に扱うべきではないと述べ、両用法での「léεo」は基本的には同じ性質を示すと指摘している。その理由の一つは、接続詞の「léεo」は他のアスペクト形式と共起できるが、アスペクト形式の「léεo」とは共に現れないという点である。

40) a. cɔɔn kin ʔép-pên yùu léεo tho-ra-sab kô dan.

ジョン 食べる りんご yùu léεo 電話 [CJT] 鳴る

=ジョンはりんごを食べている。そして、電話が鳴った。

b. *cɔɔn kin ʔép-pên léεw léεo tho-ra-sab kô dan.

ジョン 食べる りんご léεo léεo 電話 [CJT] 鳴る

=ジョンはりんごを食べた。そして、電話が鳴った。

c. *cɔɔn pai roong-pha-yaa-baan léεw mûa-waan léεo pai

ジョン 行く 病院 léεo 昨日 léεo 行く

prai-sa-nii.

郵便局

=昨日ジョンは病院に行った。そして、郵便局に行った。

(Chiravate 2002)

タイ語のアスペクト形式は、基本的に動詞句の前に現れるか、後ろに現れる (Muansuwan 2002)。例 40)a. のように、接続詞の「léεo」は動詞句の後ろに現れる

「yùu」とも共起できる。しかし、40)b. では、同じく動詞句の後ろに現れるアスペクト形式の「léεo」と共起できない。発音が同じであるため、文のすわりが不自然になるからとも見られるかもしれないが、例 40)c. のように「mûa-waan」（昨日）という時間を表す言葉が二つの「léεo」の間にあっても非文になる。

もう一つの理由は、発話者の事態に対する確定の程度を表す認識モダリティ (Epistemic Modals) と共起する場合、アスペクト形式「léεo」も接続詞の「léεo」も同じ位置に現れるからというものである (p. 231)。

41) a. cɔɔn tɔŋ pai niu-yòk léεo.

ジョン [しなければならない] 行く ニューヨーク léεo

=ジョンはニューヨークに行かなければならなかった。

b. cɔɔn ʔaad-ca pai niu-yòk léεo.

ジョン [かもしれない] 行く ニューヨーク léεo

=ジョンはニューヨークに行ったかもしれない。

42) a. cɔɔn tɔŋ pai niw-yòk léεo haa-ʔɣaan.

ジョン [なければならない] 行く ニューヨーク léεo 仕事を探す

=ジョンはニューヨークに行って仕事を探さなければならない。

b. cɔɔn ʔaad-ca pai niu-yòk léεo haa-ʔɣaan.

ジョン [かもしれない] 行く ニューヨーク léεo 仕事を探す

=ジョンはニューヨークに行って仕事を探すかもしれない。

例 41)a. と b. はアスペクト形式「léεo」の位置を表している。アスペクト形式「léεo」は動詞と目的語「pai niw-yòk (ニューヨークに行く)」の後ろに置かれることが分かった。一方、接続詞の「léεo」を表す例 42)a. と b. も動詞と目的語「pai niu-yòk」の後ろに置かれている。Chiravate (2002) は、両方の「léεo」とも認識モダリティに支配されていることは偶然ではないと指摘している。

そして、最後の理由として、どちらの「léεo」も「局面の開始」と「局面の終了」(the end and the beginning of the situations)を表すことが挙げられる。

43) a. cɔɔn kin ʔép-pên léεo.

ジョン 食べる りんご léεo

=ジョンはりんごを食べ始めた/食べた。

b. cɔɔn kin ʔép-pên léεo dùwm náam-sôm.

ジョン 食べる りんご léεo 飲む オレンジジュース

=ジョンはりんごを食べて、オレンジジュースを飲んだ。

例 43)a. では、「léεo」は「局面の開始」を表す「ジョンはりんごを食べ始めた」と、「局面の終了」を表す「ジョンはりんごを食べ（終わっ）た」という二義的な解釈ができる。一方、接続詞の「léεo」が現れた 43)b. でも「ジョンはりんごを食べ終わった。そして、オレンジジュースを飲み始めた」と解釈されており、「局面の終了」の「ジョンはりんごを食べ終わった」と「局面の開始」の「オレンジジュースを飲んだ」という二つの意味を表すことができる。以上の3つの理由から、アスペクト形式の「léεo」と接続詞の「léεo」は同じ要素「léεo」にまとめるべきであることが明らかになっている。本研究は、この点について Chiravate (2002) に同意する。両方の「léεo」は同じ性質を持っていると考える。

「léεo」の本質について、Chiravate (2002) は両方の「léεo」が「局面の開始」も「局面の終了」も表すことが可能であるため、「léεo」は出来事に限界の時点 (Culmination points) を与え、述語の意味によって多義性が現れると述べられている。このような性質を「隣接性」(Abutment) と呼び、「パーフェクト」の特徴であると述べている。従って、Chiravate (2002) は「léεo」が「パーフェクト」(Perfect) 形式であるという結論を出している。しかし、本研究は「léεo」が「パーフェクト」(Perfect) を表す形式なのか、疑問を持っている。

「パーフェクト」の定義については、第2章の28ページにも述べていたが、つまり「現在に関係のある場面、つまり過去の出来事の結果が現在に残っていることを表す視点」であり、時間ダイクシスとの関りが深い概念であると考えられる。しかし、「léo」の実例を見ると、未来の出来事を述べることもできる。

44) a. お母さん：のびちゃん。宿題あるんでしょ。

のび太：やります。

b. khun-mêε : no-bi-caŋ mii kaan-bâan mâi-châi-ró?

のびちゃん 有る 宿題 ではないか

no-bi-tà : tham léo khráp.

する léo [ENDP] (『ドラえもん7』 : p. 18)



例 44)b. での「léo」は、過去の出来事の結果を示しているのではない。むしろ、発話時現在の状態が近似未来において変化することを表している。日本語の場合も「ル」が使われている。44)b. の例はパーフェクトの概念では説明できないであろう。

本研究は、Chiravate (2002) が提案した「léo」の性質である「隣接性 (Abutment)」を出発点とし、先行研究にまだ残されている問題点を踏まえ、「léo」の意味を一つまとめることを試みる。

4. 2. 本研究の仮説

4.1. で「タ」と「léo」の先行研究を考察した。「タ」の意味については多くの研究があるが、本研究は井上 (2001i) が提案した「実現想定区間」と述語の意味に内在する状態変化の観点から「タ」の本質をまとめる。そして、「léo」については、Chiravate (2002) が提案した「隣接性 (Abutment)」を踏まえ、「タ」と同じように述語の意味に内在する状態変化の観点からも加えて「léw」の本質を考えていく。

4. 2. 1. 「タ」の意味

「タ」は少なくとも二義的であると考えられてきた。それは、過去か完了（パーフェクト）かということである。過去ということは、時間ダイクシスの一つ概念であり、発話時以前を示している。しかし、示されたものは出来事自体の発生というより、むしろ話者が示すのは出来事の情報把握した時点であると考えられる²⁸。言い換えれば、「タ」は「出来事を把握した時点が発話時以前である」ことを表している。

一方、「完了」あるいは「パーフェクト」といった用法は、どのようなものであるか。例えば、「あ、バスが来た」の「タ」など、発話時以前に出来事が発生してその結果が現在に及ぶことを示すものである。「完了」も発話時以前の時点に関っていると考えられる。

金水（1998）では、「ムード」の用法も、基本的に「過去」か「完了」の用法から派生してきたと述べている。つまり、各用法が共通点として捉えているのは「タ」の過去性、つまり「出来事を把握した時点は発話時以前である」ということである。そうすると、「タ」の多義性は、話者の捉え方によって異なる述語の意味によるのではないかと予測できる。

- 45) 「タ」の意味：時間軸上、話者が把握した出来事を発話時以前の時点に登録したであることを示す。発話時を含む実現想定区間に出来事の情報に登録される場合、「タ」は「変化」を表し、出来事の状態が変化した場合が結果が発話時現在まで及ぶ。一方、実現想定区間外に登録される場合、「タ」は「過去」を表すことになる。前者の場合、実現想定区間内に把握可能な述語は、その区間内で状態の変化が捉えられる述語に限る。一方、後者の場合話者は出来事をひとまとまりとして捉えるため、実現想定区間外に把握可能な述語の意味は、終了時点を持たなければならない。このような使用

²⁸ 第2章、2.4. 「テンスとしてのダイクシス」を参照。

条件は現実の世界に起こった出来事に対して適応できるが、もし問題とした出来事が話者の認知の世界で仮想（回想・予想を含む）されれば、終了時点を持たない述語でも「タ」と共起できるようになる。この場合、「タ」は「回想」や「想起」などの「ムード」を表すことになる。

これまで「タ」は、「変化（完了）」「過去」「ムード」を表すとされてきた。ここで注意すべきことは、3つある。一つは、発話時現在まで結果を及ぼす用法が「完了」と呼ばれてきたが、活動述語を伴う場合、「完了」よりむしろ新たな状態になるための「変化」を表すと考えられるため、本研究では「変化」という用語を使うことにするという点である。これは、4.3.1.で実例を挙げて考察する。

二つ目は、「タ」の「ムード」用法は、さらに下位分類されているという点である。しかし、「ムード」の分類は未だに一致した見解が見当たらない。本研究は、寺村（1971）の分類を整理した金水（1998）の分類を借用する。金水（1998）は、「ムード」の「タ」を大きく2つのグループに分けている。最初のグループは「期待の実現」「想起」「事後的评价」をテンス的な使い方とし、過去を表していると示している。もう一つのグループは「完了」（本研究の「変化」）の用法に近い「発見」用法だと述べている。つまり、ムードという意味は「タ」そのものからではなく、話し手の主観に関わる要素を表現することから生まれた派生的な存在であるとも考えることもできる。本研究は基本的に金水（1998）に同意するが、「発見」については多少異なる見解をとる。「発見」は「ムード」の一つの用法だとされてきたが、「発見」は話者の目の前に起こった出来事を示すもの、つまり現実の世界に起こった出来事を示すものである。従って、本研究は「発見」と「変化」を区別する必要がないと考える。そして、他の「ムード」用法をまとめて「回想」と呼ぶ。

最後に、「変化」と「過去」は「回想」と異なるレベルで発生した出来事であるという点である。「変化」であれ「過去」であれ、話者は目の前に起こった出来事か、現実の世界に起こった事実を示している。一方、「回想」は話者の認知の世界で起こった出来事であるため、別々に考察する必要があると考えられる。前章で「ル」の意味を考察する際、

この見解を分析に用いなかった理由は、「ル」と「タ」の意味の違いからである。「ル」が「把握した出来事を発話時以降の時点に登録した」ことを示すことは、つまり、基本的にその出来事が発生しておらず、現実の世界に起こった出来事ではないため、全ては話者が現実の世界で起こるだろうと認知の世界で予想した出来事に過ぎない。しかし、「タ」の本質は「把握した出来事を発話時以前の時点に登録した」ことを示すものであるため、当然、「ル」のように話者が認知の世界で自分が体験して得た出来事の情報を思い起こす（「回想」）こともできる。そのうえ、「タ」の場合、話者はまた現実の世界で起こった事実として発話時に判断できる出来事を述べる（「変化」か「過去」）こともできるため、選択する余地が生じるのである。定延（2008）も本研究の見解と類似したような見解を提案している。定延（2008）によると、日本語文法は大きく、知識型文法と体験型文法、2つのタイプに分けられる。助動詞も例外ではなく、「ル」は知識型であるのに対し、「タ」は体験型に属している。つまり、「タ」を使用すれば、その文のニュアンスが過去で話者が体験したことになると述べられている²⁹。なお、本研究では以下、「過去」の「タ」は発話時からの視点で過去に起こった現実の世界の事実としての出来事を述べることを意味する。自分の体験を思い出して述べることは、「回想」の「タ」とする。

- 46) a. タイの軍事クーデターで、軍政に拘束されていたインラック前首相が
25日夜、軍施設での拘束を解かれた。 (GOOGLE 検索)
- b. 私がその用で氷沼さんの部屋を訪ねたとき、歌水先生とは確か顔を合わせ
ましたよ。 (少納言)

例 46) a. は「過去」の「タ」であり、発話時から見た発話時以前に起こったことを述べている。46) b. も現実に関わった出来事ではあるが、話者が認知の世界から捉え、自分の記憶から思い出そうとする形であるため、これは「回想」の「タ」となる。「～と思う」

²⁹ 定延（2008）では「過去」と「回想」が区別されていない。

など思考を表す述語と共起させれば、「過去」と「回想」の違いが観察できる。

46) a' タイの軍事クーデターで、軍政に拘束されていたインラック前首相が

25日夜、軍施設での拘束を解かれたと思う。 (筆者)

b' 私がその用で氷沼さんの部屋を訪ねたとき、歌水先生とは確か顔を合わせ

たと思いますよ。 (筆者)

46)a' の「タ」が表す意味は、46)a. の「過去」から「回想」に変わっている。一方、46)b' は 46)b. とほぼ同じ意味を表している。このように、表面的には「過去」と「回想」は似ているようだが、現実の世界で起こっている事実として出来事を表すのは、「過去」と「変化」で、認知の世界で起こっている出来事は「回想」（「発見」以外の「ムード」を含む）であると分類できる。

「変化」と「過去」と「回想」の「タ」はそれぞれ以下のようにまとめられる。

図 23. 「変化」を表す「タ」

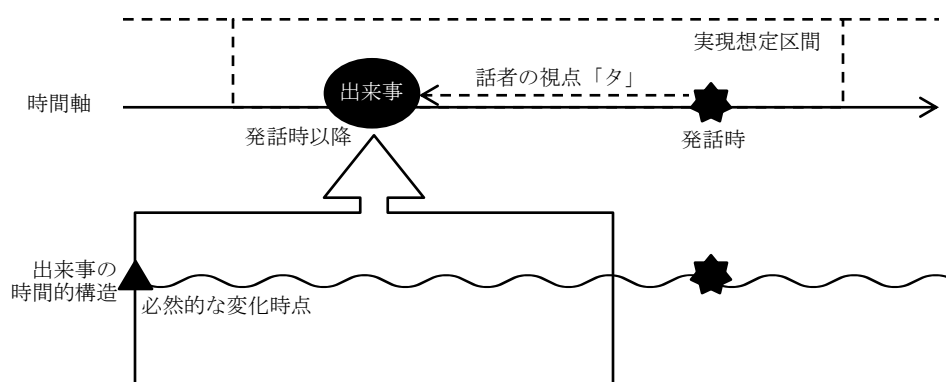
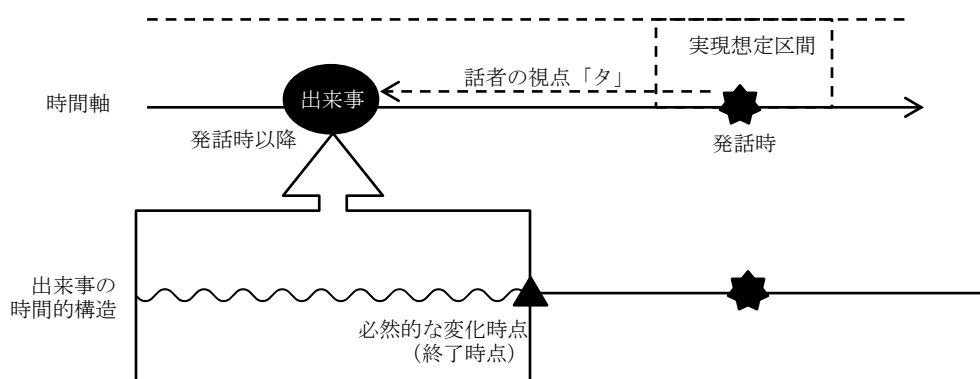


図 23. のように、発話時の状態は変化した後の状態となっているため、「タ」を伴う出来事は現在を示す。終了時点 (Telic) を持たない活動述語の場合、その動作の開始時点が必然的变化時点とされ、「タ」は動作の過程の局面を表す。一方、必ず終了時点が含ま

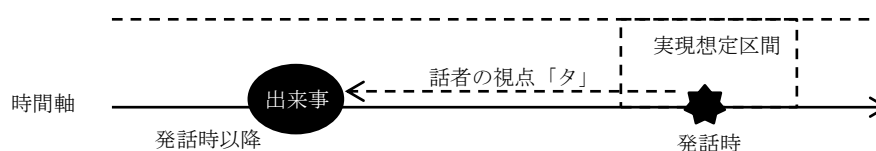
れている活動達成動詞、達成動詞、一回的述語、到達動詞は、開始時点だけ区別して捉えることができないため、結果性を持っている述語だけがその結果を発話時まで及ぼすことができる。当然ながら、必ず不結果性である一回的述語は、「変化」の「タ」を表すことができないと考えられる。一方、静的述語の場合は、述語そのものが変化時点を持たないため、「なる」や「する」など、他の要素を通して現れなければいけない（ラッタナセリーウォン 2011）。

図 24. 「過去」を表す「タ」



「過去」の場合、発話時の状態は出来事の終了時点後にあるため、終了時点前の状態とは異なるというニュアンスが強まる。

図 25. 「回想（＋ムード）」を表す「タ」（認知の世界）



しかし、「回想」は認知レベルで発生するため、話者が把握したその出来事が以前の時点に登録されたことだけを表し、現実の世界では事実ではない可能性もある。

47) a. しかも、私は、北京大学の留学生でした。大学構内の留学生宿舎に住み、
日々暮らしていたのです。 (少納言)

b. そんな私がやる RPG としては FF10 はおもしろいでしょうか??? 確
かに FF3 は傑作だったなあ (少納言)

47)a. は「過去」用法である。一般的に 47)a. の述語は状態述語で終了時点を持たないとされているが、「過去」の「タ」を表すために、変化時点が必然的に要求され、その出来事の状態が「有界状態³⁰」の解釈となり、終了時点が読みとれる。そして、出来事の終了時点前の状態は、発話時の状態と異なっているということを表せるようになる。つまり、今は北京大学の留学生ではないことは、現実の世界においても事実である。

一方、47)b. のような「回想」は、発話時以前の時点で「FF3」というゲームが面白くて傑作だと思ったことがあるが、例えば話者が発話時までは「FF10」など新しいゲームを次々遊んできたとすれば、話者は「FF3」が傑作だという意見を持ち続けていたわけではないと予測できる。現実の世界で話者が事実を確認した際、「FF3」は傑作だと言える可能性もあるし、言えない可能性もある。つまり、「回想」の出来事は現実の世界の事実と関係ないのである。

以上、「タ」の主な用法「変化」「過去」「回想（＋ムード）」を考察した。「タ」がどの用法を示しても、本質である「出来事を把握した時点は発話時以前」であることは変わらないのである。以下 4.3.1. と 4.3.2. で、「タ」の実例を取り上げて論ずる。

³⁰ 本研究の第 2 章 2.2.2. 複雑な場面 (Complex Scene) における状態述語を参照。

4. 2. 2. 「léεo」の意味

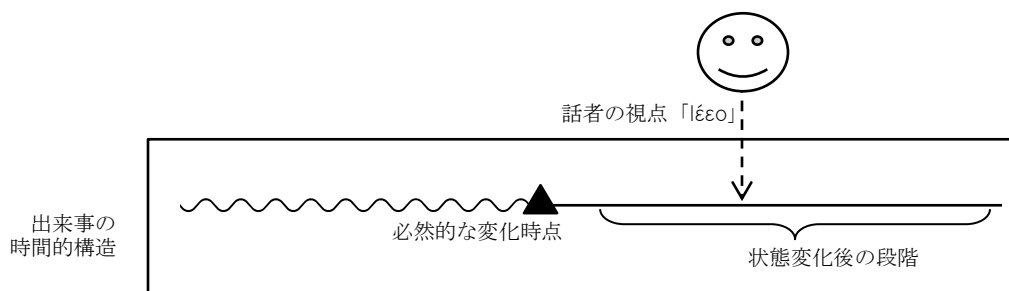
従来多くの研究では、「léεo」は「過去」か「完了（パーフェクト）」の意味として扱われていると 4. 1. 2. で考察したが、これらの概念は例 44) の「léεo」のような近似未来に起こる変化を表す場合を説明できないことが分かった。「タ」の意味を仮定する時と同様に、話者の視点も含め、「léεo」の用法を考えていく。

- 48) 「léεo」の意味：出来事が時間軸上のどこで把握されるかに関係なく、話者は出来事の時間的構造を見通し、「状態変化後の段階」といった各局面における変化が起こった後の段階に視点を置く。そのため、「léεo」が示す出来事の内在的意味は変化時点を持たなければならないこととなる。

4. 1. 2. で述べていたが、「léεo」は「局面の開始」と「局面の終了」といった二義的意味を持っている。「局面の開始」であれ「局面の終了」であれ、広義的に言えば「状態変化」を表す局面であり、どの局面に着目するかは話者の把握による。しかし、どちらでも話者は変化時点が起こった後に視点を置くと考えられる。本研究は、変化時点が発生した後の状態を「状態変化後の段階」と呼ぶことにする。

「léεo」は未来の出来事における状態変化に対しても使用できることから、時間ダイクシスの意味が含まれていないと考えられる。

図 26. 「状態変化後の段階」を表す「léεo」



時間ダイクシスの意味が含まれていないため、「タ」と違って出来事が把握された時間軸上の位置と発話時の相関が使用条件ではない。図 26. のように、述語の時間的構造のフレームのみ現れており、話者の視点は述語の時間的構造内にある「状態変化後の段階」に着目していると考えられる。

「léεo」が示すものは、現実の世界に発生した出来事における状態変化と、条件文や未来など、認知の世界に発生した出来事における状態変化に分けられる。後者の場合、よく「cà」と共起する。第3章で述べたように、「cà」を使用する際、話者が「基準的段階」に着目して状態変化を予測するため、「cà」が示す状態変化は常に認知の世界に起こった出来事である。そのため、「cà」と共起することで、その意味が強調されることが考えられる。

49) a. nîi khon cà hĩu-soo maa léεo si, thũŋ dâi klàp-bân.

こら [だろう] cà 腹が減る 来る léεo [ENDP] から dâi 帰宅する

= (犬に言う) 「こら、腹が減ってきただろう、家に戻ったとは」 (TNC)

b. [khon[cà[[hĩu-soo maa]léεo]]thũŋ dâi klàp-bân.]

例 49)a. では、意味が反対であるように見える「cà」と「léεo」が共起している。これは認知の世界における出来事だからこそ、話者が出来事全体の流れを客観的に捉えることができたのである。49)b. は 49)a. の意味関係を表している。つまり、まず「léεo」は動詞句「hĩw-soo maa (腹が減ってくる)」を支配し、出来事の「局面の開始」に着目して「腹が減ってきた」ように変化したことを表す。そして、「cà」は「腹が減ってきた」状態の基準的段階を示し、「腹が減ってきた」状態が予測の内容であるニュアンスが生じると考えられる。このように、「léεo」は「cà」など他のアスペクト形式と共起しても、その本質は変わらない。「léεo」の実例を取り上げて分析する際、「léεo」が単独に現れる場合（単文と複文を含む）に加え、例 49)a. のように他の形式と複合的に現れる場合も扱う。

4. 3. 「タ」と「|έεο」の用法

以上の 4.2. で「タ」と「|έεο」の本質について論じた。この仮説がいかに各形式の実例に適用できるか、コーパスなどからの実例を取り上げて考えていく。

4. 3. 1. 「変化」を表す「タ」と「状態変化後の段階」を表す「|έεο」

「変化」の「タ」による結果は、発話時現在まで続くと考えられる。話者にとって現在の出来事は、発話時前後を含めて出来事がいつ発生してもおかしくないという「実現想定区間」（井上 2001i）の内部に出来事が捉えなければならない。そして「変化」の「タ」と共起できる述語は実現想定区間内に変化時点を持たなければいけない。「|έεο」も「状態変化後の段階」を表すために、述語に内在している意味は変化時点を持たなければいけない。この共通点から、翻訳上、「|έεο」はよく「変化」を表す「タ」に対応させられているが、実際にはいくつかの点で「|έεο」は「変化」の「タ」と一対一の関係ではないことがわかった。これから各種の述語によって両形式が表す意味はいかに変化していくか考察する。

4. 3. 1. 1. 活動述語の場合

活動述語は一般的に終了時点を持っていないため、「タ」が現れる際、話者は内在している開始時点の状態の変化時点として捉え、開始の局面を表す。

50) a. ①「いちいちうるせーな。穂はそんなつまんねーウソはつかねーよ」

②「…おい、お前！ 今、なんて言った!？」 (少納言)

b. わたしはふっと手を離してみた。すると…、「ワー、できた！立った！」

長さ三〇センチはあるクリスが、スーと立ったのだ。 (少納言)

c. 私（話者②）は墓地の手前にある苗畠の左側からはいって、両方に楓を植え付けた広い道を奥の方へ進んで行った。するとその端に見える茶店の中から先生（話者①）らしい人がふいと出て来た。…

①「誰の墓へ参りに行ったか、妻がその人の名をいいましたか」

②「いいえ、そんな事は何もおっしゃいません」 (『こころ』³¹⁾)

例 50) は、活動述語を伴って「変化」を表す「タ」の例である。50)a. では、話者②は発話時直前に起こった話者①の発話を新たな状態の開始時点として「変化」を表している。話者①の発話による何らかの結果は、話者②が発話する時点にまで及んでいるため、話者①の発話は発話時以前に起こっていたとしても、話者②にとってその出来事は現在の出来事として捉えられる。そのため、話者①は「タ」を「今」と一緒に使ったと考えられる。次の 50)b. では、観察対象である「クリス」が「立つ」ことができない状態から、「できた」状態に変化し、発話時まで「立つ」行動が続いていたと考えられる。内在的意味に複数の局面を持っている活動述語が「変化」を表すのは、例 50)a. と b. のように、状態が変化して発話時まで観察か知覚が可能な特定の場面以外には容易ではないと考えられる。これは話者にとって、瞬間に起こる状態の変化時点（開始時点）より、ある程度の期間を経る過程の局面のほうが発話時に観察しやすいためである。さらに、例 50)c. のように、話者の解釈は主観的である。50)c. では、話者①の発話に現れた「タ」は、話者①にとって「変化」を表すのではない。しかし、話者②は話者①の妻が言ったことを聞いた結果として発話時に自分がお墓にいることを強く感じるため、発言に「回想」の「タ」を使わず、代わりに「現在」の「ル」を選択した。つまり、話者②は話者①の発言に現れた「タ」を「変化」の「タ」として捉えていると考えられる。

一方、「λέο」は「状態変化後の段階」を示す。「λέο」は出来事を把握した時点と発話時の時間関係を問わず、開始の局面でも終了の局面でも表せるため、比較的「変化」の「タ」より幅広く使えると考えられる。

³¹ 夏目漱石『こころ』（青空文庫）

- 51) a. phrâi-phon kin khâao-châao léεo tàaŋ kô dâi phák-phôn
 兵士 食べる 朝食 léεw それぞれ [CJT] dâi 休憩する
 noon kan rá-nee-rá-naat. (TNC)
 寝る 一緒に ごちやごちや
 =兵士（たち）は朝食を食べ（終わっ）て、ばらばらに寝転がってみんな休
 憩することができた。
- b. ni-tà-yaa faŋ léεo hŭa-ro book wâa dii-cai léεo tham-mai
 ニタヤー 聴く léεo 笑う 言う と 嬉しい léεo なぜ
 tŋ rŋ-hâi dŭai là. (TNC)
 [しなければならない] 泣く 共に [ENDP]
 = ニタヤーが聴（き終わっ）て笑った。「喜んでいるのになぜ泣くの？」と
 言った。
- c. toon-níi nâa-năao phŏm lēn-klâam léεo ʔŋwâa mâi ʔŋok
 今 冬 僕 筋トレする léεo 汗 [否定] 出る
 læi kháp. léεo man cà dâi-phŏn lŋ. (GOOGLE 検索)
 全然 [ENDP] léεo あれ cà 効果がある か
 =今は冬で、僕は筋トレし（終わっ）ても汗が全然出ない。これで効果が
 あるの？

例 51)の「léεo」は、局面の終了時点を捉え、話者は終了した後の段階に着目している。
 51)a. では、兵士が食べている途中や食べ始める意味ではなく、「朝食を食べ終わってか
 ら休憩する」というニュアンスが含まれている。51)b. では、主語のニタヤーが聴いてい
 る途中で笑ってしまったとも解釈できなくはないが、主語が話を全部聞いた後に笑ったと
 考えた方が一般的である。51)c. も同様に、主語が筋トレの途中で汗が出ないとも解釈可
 能であるが、筋トレをした後に汗が出ないと解釈することも難なくできる。

52) a. ʔaa-hǎan maa léεo. ʔim-thóɔŋ kòɔn léεo khô-i-wâa-kan
料理 来る léεw おなかがいっぱい 先に léεo 後で話そう
rûaŋ ʔûwn. (TNC)

話題 他

=料理が来た。満腹になってから、他の話題について話そう。

b. kíp phlòo-nâa maa bòɔk sân-sân wâa maa-thîas maa
ギフト 顔を出す 来る 言う 短い と マティアス 来る
léεo. (TNC)

léεo

=ギフトは顔を出してきて「マティアスが来た」と短く言った。

c. kεε làp léεo rûw sùk. sùk mai tòɔp. khǎo làp
お前 寝る léεo か スック スック [否定] 答える 彼 寝る
pai léεo. (TNC)

いく léεo

=「スック、お前寝たのか」スックは答えない。彼は寝てしまったのだ。

そして、「léεo」は「局面の開始」の変化時点を選択して「状態変化後の段階」を表すこともできる。例 52)a. では、料理が既に話者の目の前に並んでいる状態を説明することもできなくはないが、この場合、話者は店員が料理を持って来ている様子を見て発言したと考えられる。52)b. も、主語の「ギフト」は対象の「マティアス」が来ることを期待していたと考えられ、「マティアス」はまだ着いていないが、遠くから「マティアス」を観察して報告した状況だと考えられるため、「来る」という述語の開始場面を表している。52)c. も同じく、話者は対象の「スック」が寝ているかどうか確認するため、「léεo」を使用して「寝る」という状態の開始した段階に着目して尋ねている。「変化」の「タ」も活動動詞の開始時点を取ることができるため、日本語の訳からわかるように、「局面の開始」の「状態変化後の段階」を表す「léεo」と対応させることが可能である。

4. 3. 1. 2. 必然的終了時点を持つ述語の場合

述語の内在的意味に必然的な終了時点を持っている述語の間には、相違が観察される。達成述語（活動達成述語を含めて）は終了時点に達しなければその出来事が成り立ったとは言えないため、終了時点の状態の変化時点と捉えなければならない。一方、開始と終了の区別が付かない到達述語の場合、話者は難なく状態の変化を表すことができるため、最も「変化」の「タ」が現れやすい環境であると考えられる。

53) a. おはようございます。また今年も JRA 開催が始まりました！（少納言）

b. ①「手をのばしてごらん、澄子」

②「…オー…」

澄子さんが初めて声で答えたのだった。

①「あっ！声が出た！！声が出たよね？ いま！！」 確認を求めるようにカメラに向かって声をかける河野さん。 (少納言)

c. 「父さん…！」 父の顔は、すうっと後景に退き、背後の白い闇のなかに溶けた。 (少納言)

d. ①「だから、 $180^{\circ} \times 2$ で、 360° ！ わかった？」

②「はははっは～～ん、わかった！ 簡単じゃん！」 (少納言)

e. 「あっ！ 見て！ほらっ、駅だよ！ついに着いたのかな？」 (少納言)

例 53)a. から c. までの述語は達成述語であり、「JRA 開催」が始まっていない状態から始まった状態に変化し、その結果は発話時まで及ぶと解釈できる。53)b. では、話者①は話者②の変化に気づき、声が出るようになった状態を述べている。53)c. は「父さん」の顔が見える状態から見えなくなった（溶けた）といった状態変化を表す。そして 53)d. と e. の述語は到達述語であるが、53)d. の場合、話者②が何かの問題を理解できずにいたが、話者①の説明で理解できるようになった状態変化を表す。そして、53)e. の場合、「駅」＝到着地だと考えられるため、駅が見えるようになったことは、つまり目的地に着いたと

いう状態に変化したということである。「変化」の「タ」には、発話時以前に起こった状態変化の結果が発話時でも観察できる意味合いが含まれているのである。

一方、「状態変化後の段階」を表す「léεo」も、達成述語を伴う場合、話者は「局面の終了」後の状態に着目すると考えられる。

- 54) a. phrá-câao-chon-phuu-bɔ-dii soŋ sǔam cha-lǝŋ-phrá-bàat
 チョムプーバディ王 [RPF] 履く 靴
 kêεo-ma-nii-chôot léεo hò pai thǔŋ praa-sàat khǝŋ
 ケアウマニーチョート léεo 飛ぶ 行く 着く お城 の
 phrá-câao-phim-pí-sǎan. (TNC)
 ピムピサーン王

= チョムプーバディ王はケアウマニーチョートという靴を履いて、ピムピサーン王のお城に飛んで行った。

- b. phrá-thâat-cɔɔm-thɔɔŋ nǐi sâaŋ maa naan léεo kaa câao-luŋ,
 チョムトーン仏塔 この 建つ 来る 長期的 léεo か 叔父様
 câao-yǐŋ ʔəi thǎam khà-nà dən-taam câao-phô.
 姫様 言う 尋ねる 時 後ろを付いて歩く 父様
 = 「このチョムトーン仏塔は建ってから長いですか」姫様は（自分の）父様の後ろに付いて歩いている時に尋ねた。

- c. kaan-rúu sǎa-hèet cà mǎi chûai ʔà-rai khun ləəi nôk-càak
 知ること 原因 cà [否定]助ける 何 あなた 全然 以外
 cà yām khwaam-chôk-châm-ra-kam-cai kèε khun mâak
 cà 強める 胸がつぶれるような悲しさ [使役] あなた 多い
 khûn phrô khǎao dâi tàt-sǐn-cai léεo thîi cà thínŋ
 上がる [理由] 彼 dâi 決心する léεo [RP] cà 捨てる

khun pai. (TNC)

あなた いく

= (別れる) 原因を知ることは、あなたの胸がつぶれるようなその悲しさを
ひどくさせる以外、何一つあなたの役に立たないのだ。彼があな たを捨て
て (あなたから) 離れると (既に) 決心した のだから。

d. âi-phûak-nîi man tòk phúwn mòt léεw nîi. khâaŋ-nai

このやつら [PRON] 落ちる 床 全部 léεw じゃない 内部

khonj tɛɛk mòt. (TNC)

たぶん 割れる 全部

= このやつらは (既に) 全部落ちた じゃない。内部は全部割れているだろう。

e. chaao-naa hee! thoo-koo-soo rêm càai

農民 万歳 農業協同組合銀行 始まる 支払う

?ŋən-cam-nam-khâaw léεo. (GOOGLE 検索)

米担保資金 léεo

= 農民万歳！タイ農業協同組合銀行が米担保資金を支払い始めた。

例 54)a. の「sũam (履く/着る)」は活動達成述語であり、54)b. の「sâaŋ (建つ)」
と 54)c. の「tət-sĩn (決まる)」と 54)d. の「tòk (落ちる)」は達成述語である。54)a.
では、主語の「チョムプーバディ王」は靴を履いた後に出発したと解釈でき、靴が足にあ
るという状態に変化したことを表す。54)b. の主語は、仏塔が「建った」状態になってか
らの期間について尋ねている。これはもちろん工事が始まった時からの期間ではなく、仏
塔が完成してからの期間を表している。同様に、54)c. から e. までもそれぞれの動作が終
わった後の「状態変化後の段階」を表している。

そして、点的で開始と終了の時点が区別不可能である到達動詞の場合、話者は直ぐに変
化を読み取れる。従って、「léεo」は「状態変化後の段階」を示すことができる。

55) a. naai-phɛɛt sǝm-mǎai thɔɔŋ-prà-sə̀ət sǎ-chii-wít léɛo dūai
 医師（男性）ソムマーイ トーンプラセート 亡くなる léɛo [理由]
 ʔaa-kaan-tai-waai-chiàp-phlan. (GOOGLE 検索)

急性腎不全

= 医師のソムマーイ・トーンプラセート氏は急性腎不全で亡くなった。

b. maa-thǔŋ léɛo kô khǝɔ thàai-rûup pen thîi-ra-lúk nòi.
 着く léɛo [CJT] [許可] 写真を撮る [CPL] 記念 ちょっと
 = (やっと) 着いたから、ちょっと記念写真を撮らせてもらいます！

(GOOGLE 検索)

例 55)a. は主語が生きている状態から死んでいる状態に変化したことを示す。そして、
 55)b. では主語が目的地に着いた状態になったという変化を表す。「sǎ-chii-wít（亡くな
 る/死ぬ）」や「(maa) thǔŋ（着く）」のような動詞は瞬間的に発生するため、「léɛo」
 と共起すると、話者は「状態変化後の段階」と容易に捉えることができる。

4. 3. 1. 3. 状態述語の場合

以上、変化時点（開始・終了時点）を持つ述語を見てきたが、一般的に変化時点を持た
 ない状態述語と共起すれば、「タ」と「léɛo」の意味はいかに変わるのか、これから考察
 していきたい。

「タ」が「変化」を表す場合、話者の視点は出来事に置かれており、現在を表す「実現
 想定区間」の内部に出来事を登録させる。しかし、ここで確認しておきたいことは、

「タ」は状態変化や変化時点を表すのではなく、「タ」の本質は「出来事を把握した時点
 が発話時以前」であると示すことである。「タ」が「変化」の意味に解釈されるかどうか
は話者によって捉えられた述語の意味によるものである。例えば、「変化」と解釈するた
 めには、その出来事に内在的な変化時点が存在しなければならないと考えられるが、もし
 その出来事が変化時点を持たなければ、「タ」の性質で出来事に変化時点を与えることも

ない³²。従って、「変化」の「タ」は状態述語を伴うことができないという結論になる。

「変化」の意味を表すためには動詞の「なる」「する」「できる」などと共起させなければならぬ。

一方、「léεo」は「変化」の「タ」と異なる。「léεo」の本質は「状態変化後の段階」に着目することであるため、出来事が内在的な変化時点を持っていなくても、「léεo」の性質でその出来事に状態変化時点を与えることができると考えられる。そして、「タ」とは逆に、「léεo」が表す出来事が発話時以前に把握されたのか、または発話時以降に把握されるのかについては、話者が捉えた時間的ダイクシスの意味によると考えられる。したがって、「léεo」は状態述語とも共起することができると考えられる。

56) a. ?ee, tham-mai pen phùwn thîi thócŋ léεo mǝc (GOOGLE 検索)

へえ なぜ [CPL] 皮疹 [場所] 腹 léεo 医者

tōŋ khǝc duu lǝŋ khǝc duu kōn dûai-là.

「しなければならない」[許可]見る 背中[許可]見る 尻 [疑問]

=へえ、なぜお腹に皮疹ができた(のに)、医者は背中とお尻を見させてもらうよう(患者に)頼まなければいけないのでしょうかね。

b. khun ?ɔk cà yùu pàa naan kən-pai khun-chít, con pen

あなた 傾向 cà 住む 森 長い 過ぎる チットさん ほど [CPL]

khon-pàa pai ?iik-khon léεo. (TNC)

野蛮人 しまう もう一人 léεo

=あなたは森に長く住みすぎたようだ、チットさん。もう一人の野蛮人になつてしまうほどだ。

c. naŋ kèet nà, khǝ mii phǝa mài pai léεo ná.

あばずれ ケート[ENDP]彼女 有る 旦那 新しい しまう léεo [ENDP]

³² しかし、認知レベルで捉えられた出来事であれば、また別である。例えば「寒かったら、…」

「学生だったら、…」のように条件文を通して(仮想された)状態変化を読みとることができる。

man khon mâi klâp-bâan ?iik ròok. (TNC)

彼女 はず [否定] 帰宅する 再び だろう

= あばずれのケートはね、彼女は新しい旦那ができてしまったのよ。彼女はもう二度と家に戻らないはずだ。

例 56) a. から c. までの述語は状態動詞である。状態動詞は一般的に状態変化を持たないが、「léεo」の性質で話者は状態変化時点を捉えることができる。56) a. では、「léεo」は「pen phûwn (皮疹だ)」という述語を伴い、「皮疹になった/ができた」という意味を表している。56) b. も「pen khon-pàa (野蛮人だ)」という述語が「野蛮人になった」という意味を表すようになっている。56) c. も同じく、「mii phûa (旦那がいる)」という述語は、「旦那ができた」状態に変化したという解釈になる。

57) ni-tà-yaa faŋ léεo hûa-ro book wâa dii-cai léεo tham-mai
ニタヤー 聴く léεo 笑う 言う と 嬉しい léεo なぜ
tôŋ róng-hâi dûai là. (TNC)

[しなければならない] 泣く 共に [ENDP]

= ニタヤーが聴（き終わっ）て笑った。「喜んでいるのになぜ泣くの？」と言った。

例 57) は、「léεo」が形容動詞 (Adjective State) と現れた例である。日本語は動詞の「喜ぶ」と形容詞の「嬉しい」があるが、タイ語の「dii-cai」はどちらかと言えば「嬉しい」に近い使い方ではあるものの、日本語として動詞の「喜ぶ」に訳した方が状態変化の場面を思い浮かべさせやすい。ここでは、「dii-cai」が「léεo」を伴って「嬉しくなった」というニュアンスを加えている。

- 58) kaan thîi phûak-thəə dâi lēn la-khɔɔn-wee-thii dūai-kan dooi
 こと [RP] 彼女たち dâi 演ずる 戯曲 一緒に で
 rāp-bòt pen khūu-rāk man tham-hâi thəə rúu-tua wāa thəə
 役をもらう [CPL] 恋人 [RP] [使役] 彼女 気づく と 自分
 m̄ai dâi chɔɔp khiŋ ʔik-tɔɔ-pai lɛɛɔ. (TNC)
 [否定] dâi 好き キング もうこれ以上 lɛɛɔ

=彼女たちが恋人の役をもらって一緒に戯曲を演じたことで、彼女は自分が
もうこれ以上キングのことが好きではなくなったことを気づかされた。

「lɛɛɔ」は、また例 58)のように肯定状態から否定状態に変化したことも表せる。例 58)では、「彼女」が「キング」のことが好きな状態から好きではない状態に変化したことを表している。

4. 3. 1. 4. 「発見」の「タ」

4. 3. 1. 3. で「変化」の「タ」は状態述語を伴わないと論じた。それでは、動詞「ある」を伴う「発見」の「タ」をいかに説明すればよいのか。

前述のように、「発見」も「変化」と同様に、発話時の状態を述べるため、「変化」の派生的な用法であると考えられる。しかし問題は「発見」の「タ」と共に現れる「ある」が持っている内在的意味は、「在る」・「有る」といった状態述語的な意味だけではなく、「現れる」のような到達述語的な意味も持っているのである。

- 59) 後家となったのちは化粧の方法も違い、着馴れた振袖も留袖に変え一度つけた口紅も紙で拭わねばならないが、そういうことよりも、やはりこんな姿になったため、表から以前にも増してないがしろにされはしないかという危惧がある。(少納言)

例 59) での「ある」は、「こんな姿になった」という設定において解釈する場合、危惧が元々「有る」・「在る」という意味より、「現れる」に近いニュアンスになると考えられる。つまり、日本語の「ある」は、状態述語的な意味だけを持っているのではないと見られる。このことから、「発見」の「タ」が伴う「ある」も到達述語の意味を果たしていると考えられる。

60) a. 赤星選手、1000 試合出場おめでとう！今日は他に何か言うことある？

あ、あつた！ 関本選手 30 歳のお誕生日おめでとう。つか関本くんは
30 なんだ、、、 (少納言)

b. 「なんかぼくにぴったりのテーマってないかな。う〜ん。あつた！ 野球があるじゃないか。最後のテーマは野球人長嶋なんですね…」 (少納言)

c. ハイキングをしながらこの時期に採れる山菜やその採り方の説明を受けた後、参加者たちが挑戦。草むらに隠れているワラビを見つけると、「あつた！あつた！」と歓声を上げ、山菜採りを楽しんでいました。 (少納言)

例 60) は「発見」を表す「タ」である。60) a. から c. までの共通点は、話者が探していたその何かが現れた場面である。そして、「変化」の「タ」のように、話者は「ある（現れる）」の状態変化における結果が発話時現在まで及んでいることを感じていると考えられる。

4. 3. 1. 5. その他の「|έεο」の使い方

これまで文末に現れた場合と接続詞としての「|έεο」を見てきたが、この基本的な機能以外の使い方もある。

61) trà-krâa-săan sǝŋ bai, nai-nán mii khùat phǝŋ-kaa-fɛɛ
編みかご 2 [QF] その中 有る 瓶 コーヒー粉

săm-rèt-rûp nùŋ khùat, nom-khôn pèet léεo nùŋ krà-pǝŋ
 インスタント 1 [QF] 練乳 開く léεo 1 [QF]
 =編みかご2袋、その中はインスタントコーヒーの瓶が1本、開いた練乳1
 缶がある。 (TNC)

例 61) のように「léεo」は名詞の修飾節としても現れることができる。61)の述語「開く」は達成動詞であるため、当然ながら終了時点が捉えられているが、「食べる」などの活動動詞の場合では、文末の「léεo」と同じく、「局面の開始」または「局面の終了」を表すといった曖昧性がまだ残っている³³。

62) khǎo rîp kèp ʔŋaan bâaŋ. léεo rîp ʔɔɔ càak
 彼 急ぐ 片づける 仕事 も. léεo 急ぐ 出る から
 sam-nák-ʔŋaan pai yuwn lɔp mum yùu lǎŋ krà-thǎaŋ-mái-
 事務室 行く 立つ 隠れる 角 居る 後ろ 鉢植えの大きい木
 phûm-yài nâa ʔaa-khaan phûa dāk-rɔɔ ní-rá-naa. (TNC)
 前 ビル [関係] 待ち伏せする ニラナー
 =彼も急いで仕事を片付けた。そして、ニラナーを待ち伏せするために、急
 いで事務室を出て、ビル前の角当たりにある鉢植えの大きい木の後ろに
 立って隠れた。

「léεo」に関しては文中の接続詞としての使い方を多く見てきたが、例 62)のように文頭に現れることもあり、日本語の接続詞「そして」と一般的に対応している。しかし、この場合でも「léεo」の本質である「状態変化後の段階」に着目するという点は変わらない。文脈から読み取れた「局面の終了」と共に、テキストで現れた「局面の開始」を表すこと

³³ 例えば、「nom (ミルク) thîi (RP) dùwm (飲む) léεo=飲んだミルク」は、飲み終わったミルク、あるいは飲みかけたミルクの両方とも表せる。

ができる。62)では、「仕事を片付ける」ことが終わって、「事務室を出た」状態の始まりとして捉えても良いのである。

- 63) nai kaan pen phrá-phút-thá-câao níi mâi-châi wà kèt maa
 中 こと [CPL] 仏陀 この [否定] と 生まれる くる
 châat rêk phiang châat diao kê dâi trát-sà-rúu pen phrá-
 誕生 最初 だけ 誕生 一つ [CJT] dâi 悟る [CPL]
 phút-thá-câao ləəi. tɛɛ tɔŋ kèt léəo
 仏陀 [ENDP] しかし「しなければならない」生まれる léəo
 kèt ʔiik, kèt léəo kèt ʔiik nai
 生まれる また 生まれる léəo 生まれる また 中
 hûaŋ-wát-tha-càk-sǝŋ-sǝan.

輪廻

=一回生まれただけで悟って仏陀になれるわけではないのだ。輪廻の間に何度も何度も生まれ変わらなければならない。

例 63)は、状態が繰り返して発生することを表している。「léəo」は「状態変化後の段階」を表し、連続して繰り返す出来事の性質と親和性が高いため、共に現れやすい。この場合、「léəo」は「～ʔiik（また）」とよく使われており、「V+léəo+V+ʔiik」という文型として認識されていることが多い。

- 64) nɔk-(nǝa)-càak cha-làak léəo yaŋ mii thèep-sǝi
 以外 標示 léəo まだ 有る カラーテープ
 kam-nòt khwaam pen phîť. (TNC)
 決める こと [CPL] 毒

=標示以外には、まだ毒性を決めるカラーテープがある。

さらに、「léo」はある話題に注目して説明する場面にもよく現れる。例 64) の場合、通常の着目点は「標示」にあるが、「léo」の性質で注目が変化したというようなニュアンスを出すことができ、新たな話題の「カラーテープ」に注目し始めたということである。

タイ語のアスペクト形式は複合的に共起することが可能であるため、いくつかの上記の例文で見られたように、「léo」も「cà」や「dâi」など他のアスペクト形式と共起していることが多い。二つ以上の要素から融合して新たな表現が生まれる可能性もあるが、それは「léo」の本質から派生してきたものだと考えられる。

4. 3. 2. 「過去」を表す「タ」

4.3.1. で性質が類似している「変化」の「タ」と「léo」の使用を考察した。しかし、「タ」の場合、話者が出来事の情報を実現想定区間外に登録すると、表す意味が「過去」となり、発話時にその出来事の状態が存在していないことが認識され、共起する述語は終了時点を持たなければならない。一方、「léo」は実現想定区間の概念が適用されず、「局面の終了」と「局面の開始」の二義的な意味を表現できるため、話者が出来事の開始局面を切り捨てて終了場面だけを認識するのは難しい。文脈や、他の要素で読み取れた時間ダイクシスが発話時以降を示しても、発話時の状態は過去の状態変化からの結果である意味が強いため、「過去」の「タ」には対応しない。

65) a. オバマ米大統領は 28 日、外交政策などについて演説し、南シナ海で実効支配を強める中国の動きや、ウクライナに軍事的圧力を強めるロシアの行動について、「局地的な侵略」と非難した。(朝日新聞³⁴)

b. 囲碁のアマ名人、洪ソッ義（ホンソッギ）さん（27）＝アマ本因坊、アマ竜星＝が 22 日、プロ公式戦、阿含・桐山杯第 21 期全日本早碁オープン戦の本戦入りを、前期に続いて果たした。(朝日新聞)

³⁴ www.asahi.com から検索した例である。

- c. 「爆発したレース工場の真ん中にいるみたいだな」彼女はくすくすと笑った。おかげで、ゆっくりとだが、頭痛とむかつきがおさまってきた。

(少納言)

例 65) のように、「過去」の「タ」はニュースや小説の叙述テキストなど、話者が現実の世界に起こった事実として述べる場面によく現れる。「過去」の場合でも話者は発話時から発話時以前に起こった出来事をひとまとまりとして見通し、「以前にそういう出来事が起こったことは事実だが、今とは違う」というような客観的な見方から出来事を捉えたニュアンスが強く現れている。

4. 3. 3. 「回想」を示す「タ」

「回想」の「タ」は、性質が「過去」とよく似ているが、話者は認知の世界で出来事を捉えている。認知の世界であるため、捉えられた出来事は現実の世界と異なる可能性がある。

- 66) a. 二〇時一〇分の北京への飛行機は、四〇分遅れでようやく飛ぶ。二二時、二八〇〇km の旅は終わる。北京の星空も、郊外ではきれいだった。
- b. 正木時堯の一行が、抜け穴を脱して、夷隅川の土手に出たとき、夏の陽はようやくうつろいかけながら、まだ頭上に高かった。空は青かった。日が暮れるには間があった。(少納言)
- c. 宝塚を卒業してから、今回が初めての舞台出演となる。最初は「予定がないことに困りました。スケジュール帳に1日でも真っ白な日が出てきたときには、なんだかとても怖くなってしまった」という。(朝日新聞)

例 66) a. と b. の述語は一般的に終了時点を持たない状態述語であるため、一緒に現れる「タ」は「過去」を表すことができず、話者は認知レベルで出来事を捉えるため、「タ」

の意味は「回想」となる。終了時点が捉えられていないため、発話時の状態を「回想」された状態と同一視している可能性がある。66) a. と b. もその一例である。一方、66) c. のような動的述語の場合、「タ」は「過去」を表すか「回想」を表すか曖昧になることもある。話者が出来事を現実の事実として捉え、そしてその出来事の終了時点を抑えて「過去」に解釈することも可能である一方、話者が自分の記憶における出来事として抑えて述べることも考えられるのである。

「状態変化後の段階」を表す「léəo」は、4.3.2 と 4.3.3. で見た「過去」と「回想」の「タ」と対応できない。「léəo」の本質からいえば、状態変化時点があれば「過去」を表すことができるはずだが、「léəo」が求める使用条件は状態変化後の段階であるため、状態変化時点とその後の状態が結合し、別々の要素として捉えることができない。言い換えれば、「léəo」が「状態が変化した結果」を表すとも考えられるのであり、状態の変化がなければ結果も当然成り立たないのである。

4. 4. 「léəo」と「dâi」と「khəəi」の比較

実は発話時以前に起こった出来事を表現可能な形式は、「léəo」以外にも「dâi」と「khəəi」がある。田中（2004）によると、「dâi」は複数の用法を持つとされている。主な用法は、動詞句の前に現れる場合は「予定確信」、「受身³⁵」を表し、動詞句の後ろに現れる場合は「可能」を表す用法がある（pp. 424-425）。そして「khəəi」は「経験」を表す形式とされ、日本語の「～タことがある」構文を表す際に使用されるが、「khəəi」は形容動詞を伴うことも可能であるのに対し、「～タことがある」構文は形容詞を伴うことができない（田中 2004 : 437）。両方の形式とも「léəo」と共に現れることができる。

- 67) a. phrâi-phon kin khâao-cháao léəo tàaŋ kô dâi phák-phòn
 兵士 食べる 朝食 léəo それぞれ[CJT] dâi 休憩する

³⁵ 「dâi」は許可を表す受身として使われているが、被害を表す受身としては使われていない。

noon kan rá-nee-rá-naat. (TNC)

寝る 一緒に ごちやごちや

= 兵士（たち）は朝食を食べ（終わっ）て、ばらばらに寝転がってみんな休憩することができた。

b. kaan-rúu sǎa-hèet cà mâi chûai ʔà-rai khun læi nǝk-càak

知ること 原因 cà [否定]助ける 何 あなた 全然 以外

cà yām khwaam-chǝk-chám-ra-kam-cai kɛɛ khun mâak

cà 強める 胸がつぶれるような悲しさ [使役]あなた 多い

khûn phrô khǎao dâi tât-sǐn-cai léɛo thîi cà thǐŋ

上がる [理由] 彼 dâi 決心する léɛo [RP] cà 捨てる

khun pai. (TNC)

あなた いく

= (別れる) 原因を知することは、あなたの胸がつぶれるようなその悲しさをひどくさせる以外、何一つあなたの役に立たないのだ。彼があなたを捨てて (あなたから) 離れると (既に) 決心したのだから。

「dâi」が単独に現れた 67)a. は「予定確信」用法である。休憩することは兵士にとって欠かせないことであり、常に予定されていることである。67)a. から読み取れた「dâi」には、「予定していた出来事がやっと起こった」というニュアンスが含まれている。67)b. は、「léɛo」と共に現れた例である。この場合も、両形式のそれぞれ持っている性質が発揮され、話者は「léɛo」で「tât-sǐn-cai (決心する)」の終了時点を状態変化として捉えながら、「dâi」で「tât-sǐn-cai léɛo (決心した)」という状態が成り立つまでに、悩んだりするという何らかの過程を経てから状態が起こったという意味を捉えている。両形式の関係は、[dâi [[tât-sǐn-cai]léɛo]]のように書ける。「dâi」の「予定確信」用法は時間ダイクシスの意味と深く関わっていると考えられる。

一方、「khəəi」は「経験」を表す。「経験」はパーフェクトの一種であり、発話時にその出来事の結果や影響が及ぶ (Comrie 1976)。

68) a. khun ta-na-kà khəəi pai duu muai-thai.

さん 田中 khəəi 行く 見る ムエタイ

=田中さんはムエタイを見に行ったことがある。(田中 2004 : 437)

b. khun khəəi pai na-khɔɔn-wat maa léɛo rǔw? (TNC)

さん khəəi 行く アンコールワット 来る léɛo か

=あなたはアンコールワットに行ってきたことがありますか?

例 68) a. は「khəəi」が「経験」を表す例である。68) b. では、「khəəi」と「léɛo」が一緒に現れ、述語の「pai na-khɔɔn-wat maa (アンコールワットに行ってくる)」の終了時点が「léɛw」で状態変化とされ、そして、「pai na-khɔɔn-wat maa léɛo (アンコールワットに行ってきた)」ことが発話時以前に起こって、その影響が発話時まで及び、話者の経験として解釈されている。両形式の関係は、[khəəi[[pai na-khɔɔn-wat maa]léɛo]]とも表示できる。

「léɛo」と「dâi」と「khəəi」はどちらも発話時以前に起こった出来事を表すことが可能であるが、このような時間的ダイクシスの意味は「léɛo」が含有していないのに対し、「dâi」と「khəəi」に含まれていることが分かった。そして、各形式はそれぞれ異なる機能を持っているため、一緒に現れても意味の矛盾や同義反復の現象は起こらないと考えられる。

4. 5. まとめ

本章は「タ」と「léɛo」の様々な用法から、両形式の本質について論じた。「タ」の本質は「出来事を把握した時点が発話時以前」であるということだが、話者の述語解釈によってアスペクト性を表す用法が生じる。一方、「léɛo」の本質は「状態変化後の段階」で

ある。「léεo」そのものはアスペクト性を指す形式であり、その本質は話者が文脈や他の要素から時間的ダイクシスを解釈したことから生じたと考えられる。この違いが最も観察されやすいのは変化時点が内在していない状態述語との共起である。「タ」は状態述語を伴うと、「変化」と「過去」の解釈ができなくなり、認知レベルで捉えられる「回想」の解釈のみ可能であるが、「léεo」は状態述語に変化時点を与え、変化した後の結果を述べることができる。他の種の述語を伴う場合、「léεo」は、認知レベルで捉えられた未来の変化を表す場合以外においては、「変化」の「タ」と対応可能であると考えられる。

第5章 「テイル」と「kamlaŋ」・「yùu」のアスペクト性

翻訳において、「テイル」は「kamlaŋ」、あるいは「yùu」と訳されていることが多い。しかし、両言語の母語話者は各形式を使用する際、同じ捉え方をしていない。ある動作が継続的に実現されている場合、「テイル」、「kamlaŋ」、「yùu」、全ての形式で表すことができる。それに対し、ある状態が一時的、継続的に保持されている場合は、各形式の異なる捉え方が観察される。本章では、各形式のそれぞれの意味用法及び話者の捉え方を考察し、共通点・相違点をまとめる。

「テイル」の場合、今まで論じた時間ダイクシスを示す「ル」と「タ」と異なり、話者の視点は述語の時間的構造内部に置かれていると考えられる。結論を簡単に先取りしてしまうと、「テイル」は局面を問わず、話者は使用する際、単なる「継続」を認識しているのに対し、「kamlaŋ」と「yùu」は「開始時点と終了時点の間における継続」を表すと考えられる。さらに、「kamlaŋ」は「ちょうど」という意味も含まれているため、開始時点に視点が置かれているが、「yùu」は「3年間」など明確に終了時点を持つ期間を表す副詞を伴うことができることから、終了時点に視点が置かれていると考えられ、両形式の意味には差もある。「テイル」は開始時点と終了時点の問題としないため、「kamlaŋ」と「yùu」が共起できない到達動詞と共起でき、Perfect の用法としての使用も可能になるのだと考えられる。

5. 1. 先行研究のまとめと問題点

「テイル」、「kamlaŋ」、「yùu」の意味については、数多くの研究がなされてきた。ここでは従来の研究成果を踏まえながら、残された問題点などを考察していく。

5. 1. 1. 「テイル」について

「テイル」に関する研究は、「テイル」と「テイタ」を区別せずに分析を行っている研究と別々に扱っている研究に分けられる。本研究は、「テイル」と「テイタ」が実際のテ

クストにおいて両形式の違いが見られる可能性を認めるが、それはあくまで「ル」と「タ」の違いから派生したものと捉え、この点で前者と同じ立場をとる。さらに、タイ語のアスペクト形式は時間的ダイクシスの意味が含まれていないことから、「ル」と「タ」の部分とアスペクトの「テイ-」の部分は別々に考察すべきであろう。本研究は、「テイル」と「テイタ」をまとめて「テイル」を呼ぶことにするが、「テイタ」の例文も一緒に扱う。

「テイル」は一般的にアスペクトの観点から分析され、複数の意味を持っているとされている（工藤（1995、1998）、金水（2000）など）。しかし、アスペクトの意味だけでは説明できない場合が多く指摘されているため、エビデンシャルや報告性などの認知的な観点から「テイル」を説明しようとする見方もある（柳沢 1992、定延 2006 など）。ここでは、まず一般的な「テイル」の分析を見ていく。

工藤（1998）における「テイル」の意味記述は次のようなものである。工藤（1998）が主張しているのは、「テイル」は基本的に「①動作の継続」「②変化の結果の継続」といった2つのアスペクト性を持っており、これらの基本的意味から「③反復」「④現在有効な、過去の運動の実現」「⑤単なる状態」という3つの意味が派生するということである。この分類は非常に効果的であり、「テイル」の用法を幅広く説明できる。工藤（1998）によると、「テイル」が何の継続を表すかを決めるのは、動詞の語彙的な意味の側面である。本研究での用語を用いて言い換えると、いわゆる視点アスペクト（この場合、「テイル」の継続性）は、状況アスペクト（述語の時間的構造）と意味が重なる場合に限って、使用可能となる。

金水（2000）でも工藤（1998）と類似した分析をしているが、細かい点には少し違いが見られる。「テイル」は「継続相」とされ、「進行（progressive）」か「結果（resultative）」のどちらを表すかを決定するのは、3つの要因だと述べている。それは、「①動詞固有の意味のアスペクト的な性質」、「②受身、使役、あるいは主語・目的語など項の性質、連用修飾語などの形態的・構文的条件」、「③発話状況やテキストなど、文脈的条件」である。金水（1998）が指摘した「テイル」の「①進行（progressive）」は工藤（1998）の「①動作の継続」と同類のものであると考えられるが、金水（2000）の

「②結果 (resultative)」は性質的に工藤 (1998) の「②変化の結果の継続 (Perfect の意味 (工藤 1995))」とは異なる。Resultative と Perfect の関係については、未だに曖昧さが残っている。例えば、Smith (1997) によると、Resultative は Imperfective の一種に定義されているが、Comrie (1976) では Perfect の下位に Resultative Perfect という類も存在するとされている。Imperfective の下位であれば、話者は出来事の時間的構造内部に際して結果状態を捉えるが、Perfect の下位であれば、話者は出来事をひとまとまりとして捉え、そしてその出来事が起こした結果の効力が発話時まで及ぶことを示すという違いが考えられるため、金水 (2000) の「結果 (resultative)」と工藤 (1998) の「変化の結果の継続 (Perfect)」を同様に扱っていいのかという疑問が生じる。この問題を考えるために、まず都築・張 (2012) の研究成果を考察しておく必要がある。

都築・張 (2012) は「テイル」の Perfect 用法と「現在との関り」のあり方、つまり発話時との関係について興味深い指摘をしている。Perfect の最も代表的な用法は「経験・効力持続」と「記録」があるが、「現在との関り」の観点からさらに「経過報告」用法を Perfect の「テイル」として追加すべきだと主張している。

68) a. 太郎：「次郎って、この作家知っているかな？」

花子：「知ってるんじゃない？ 文学部 *出た/出てるんだから。

b. (鈴鹿の 8 時間耐久レース中に) A チームはまだ 150 週目だが、B チームは既に 200 週している。

c. (鈴鹿の 8 時間耐久レース終了後に) A チームは 150 週に終わったが、B チームは 200 週した。

(都築・張 2012)

例 68) a. は「経験・効力持続」を表し、出来事と発話時を結び付けており、話者は出来事を主題の属性として捉えるのが特徴だとされ、「タ」に置き換えられないと述べられている。68) b. と c. の場合、発話時において主題となる出来事が進行中であれば、68) b. の

ように「経過報告」を表す「テイル」を使わなければならないが、出来事の期間が確定され、つまり終了時点が認識されていれば、68)c. のように「タ」を使用しても良いのである。なお、68)c. と同じ場面で「テイル」を使うと、成績を報告する形の「経験・効力の持続」用法となる。

都築・張（2012）が指摘した「経過報告」は、Resultative と Perfect の違いを説明するために応用が可能である。実は、都築・張（2012）は「経過報告」を Perfect の下位概念だとして主張しているが、「発話時において主題となる出来事が進行中であれば」ということは、Resultative の定義に近い。例 68) b. を見ると、レースの進行に着目することは、出来事の時間的構造の内部に着目することであると考えられる。このことから、「テイル」は Resultative の用法としても Perfect の用法としても使えることになり、両意味を区別する必要があると考えられる。本研究では、「テイル」の基本的意味は「①動作の継続 (progressive)」、「②（一時的）結果の継続 (resultative)」、そして「③変化の結果の継続 (Perfect)」であると考える。「テイル」の本質については 5.2.1. で考察していきたい。

工藤（1998）と金水（2000）は述語の内在している時間的構造によって「テイル」の表す意味が異なってくることを強く主張しているが、話者の視点の立場から分析している研究もある。高見・久野（2006）では、以下の文が可能であることを解説している。

69) a. アイスcreamがゆっくり溶けている。

b. 早く食べないから、アイスcreamがもう溶けている。

c. 夕日が徐々に沈んでいる。

d. 夕日がとっくに沈んでいる。 (高見・久野 2006 : 106)

例 69) は同じ動詞であっても文脈や話者の解釈によって「テイル」の意味が異なってくるものである。69)a. と c. は動作の継続を表しており、69)b. と d. は結果の継続を表している。高見・久野（2006）は動作と結果の継続の違いをこのように説明している。「動詞

が、主体のある動作・作用を表し、その過程・経過を話し手が発話時の時点で観察できれば、「テイル」構文は動作継続の解釈となる。一方、動詞が主体の動作・作用を表し、主体がその動作・作用の結果、状態変化を受け、その変化状態を話し手が発話の時点で観察できれば、「テイル」構文は結果継続の解釈となる」(p. 121)。つまり、「テイル」の意味を決定する最も大きな役割を果たしている要素は、動詞が内在している時間的構造ではなく、話者の観察による解釈である。金水(2000)でも「テイル」の意味が決定される一つ条件として「③発話状況やテキストなど、文脈的条件」が取り上げられているが、金水(2000)は「①動詞固有の意味のアスペクト的な性質」を中心にして分析している。本研究は、高見・久野(2006)と同様の立場であり、述語の語彙的に内在している時間的構造というより、話者の解釈から捉えられた述語の時間的構造が「テイル」の意味を決める最も重要な要素であると考ええる。

定延(2006)は、「テイル」が使用される際の「話者の観察」についてさらに詳しく考察している。定延(2006)によると、アスペクトと述語の語彙的な時間構造の概念で説明できない「テイル」のいくつかの現象を取り上げ、「エビデンシャル(Evidential)」といった認知的な観点から分析し、非常に興味深い解釈を行っている。

70) a. 2本の平行線はどこまでも交わらずに伸びる。

b. 2本の平行線はどこまでも交わらずに伸びている。(定延 2006 : 168)

例 70) a. と b. の意味は同じではない。70)a. は抽象的な規則を述べているが、70)b. は自分の判断に基づく具体的な判断を述べている。このことから、定延(2006)はアスペクトの概念で「①「テイル」が抽象性を嫌い具体性と結びつくことが説明できない」ことを指摘している。なお、この性質はタイ語とよく似ている。「kamlaj」・「yùu」も抽象的な属性を伴わないのである。

71) (さあ、いま、あの実験室の照明をリモコンで切りました)

a. これで、実験室の中は真っ暗で、何も見えません。

b. これで、実験室の中は真っ暗で、何も見えていません。(定延 2006 : 169)

71)b. が言えるようになるためには、その実験室の中には人か動物の存在が必要である。つまり、71)b. は「実験室の中は真っ暗になったので、部屋にいと想定された人、あるいは動物が何も見えなくなった」というように解釈できるであろう。これに関して、従来アスペクトの観点からでは「②「テイル」が観察対象を必要とすることが説明できない」一つの例として挙げられている。

72) a. *彼は痛みを感じる。

b. 彼は痛みを感じている。(定延 2006 : 170)

さらに、アスペクト概念だけでは、「③内部状態表現の人称制限が説明できない」。「テイル」の人称制限については、柳沢（1992）にも指摘されているが、相手の感覚を知るためには、相手の様子などを観察する必要がある。もし相手の感覚ではなく話者自身の感覚であれば、「ル」も「テイル」も共起できる。しかし、内部状態を表す場合でも、もし話者がその出来事を「当然の理屈」として捉えれば、「テイル」も共起することができる。

73) a. さあ、いま彼の神経を切断しました。もう彼は何も感じません。

b. さあ、いま彼の神経を切断しました。もう彼は何も感じていません。

(定延 2006 : 171)

73)b. のように、当然の理屈として捉えられる出来事であれば、内部状態表現の場合でも「テイル」が使用される。要するに、アスペクト概念では「④「当然の理屈」の例外性が説明できない」のである。

74) a. 太郎はきのうから絵をかいている。

b. *太郎はきのうから明日まで絵をかいている。 (定延 2006 : 171)

発話時現在まで継続している場合は「テイル」が許されるが、未来にまたがる期間表現は述べることができないため、定延 (2006) はアスペクトの概念では「⑤期間表現のえり好みが説明できない」と述べている。

75) (雷が光った瞬間の夜空の写真を何気なく見て)

お、雷が光って (い) る！ (定延 2006 : 172)

最後に、例 75) は一般的に瞬間的な出来事であるが、この場合は継続や繰り返しの解釈になりにくい。アスペクトの概念だけでは説明できない「⑥瞬間的な出来事を表わせることが説明できない」というもう一つの現象である。しかし、例 75) の場合は話者の観察対象が写真であることをここに注意すべきである。

以上6つの現象を説明するため、定延 (2006) は、エビデンシャル (Evidential) の考えを取り入れ、「テイル」は話者が「観察」した状態を表すエビデンシャルである、つまり「観察してみると現在これこれである (これこれの出来事情報がある)」ということを表すと主張している。なお、「テイル」が表す観察は現実のものである必要はない。観察の仮想性というものも存在すると、定延 (2006) は述べている。

本研究では、述語の時間的構造と話者を含めて、5.2.1. で「テイル」の意味を考えていきたい。そして、5.3. で実例を挙げて「テイル」の意味を解説しながら、タイ語の「kamlaŋ」と「yùu」などとの共通・相違性を述べる。

5. 1. 2. 「kamlaŋ」と「yùu」について

日本語では継続を表す形式は一つだけであるが、タイ語では「kamlaŋ」と「yùu」など複数存在する。「kamlaŋ」は元々名詞であり、「力」という意味を表す。そして、「yùu」

が本動詞として現れる場合、「居る」「存在する」「住む」などの意味を表す。両者ともアスペクト形式として現れる場合、継続を表す形式だとされている。Meepoe (2001) と Sripasit (2003) によると、「yùu」は Bybee 他 (1994) による普遍的な Imperfective の文法化経路³⁶に従って発展してきたが、「kamlaŋ」はまだ「yùu」のように文法化が進んでいないことが推測される。そして、形態的にみると、「kamlaŋ」は動詞句の前に、「yùu」は動詞句の後ろに置かれているという違いがある。多くの先行研究は一般的に「kamlaŋ」を「進行 (progress)」を表す形式とし、「yùu」は「Imperfective」を表す形式だとしている (Meepoe 2001、Chiravate 2002、田中 2004 など)。

76) a. mɛɛ-rîi kam-laŋ sài tàaŋ-hǔu.

メリー kamlaŋ つける イヤリング

=メリーはイヤリングをつけている (イヤリングはまだ手にある)。

b. mɛɛ-rîi sài tàaŋ-hǔu yùu.

メリー つける イヤリング yùu

=①メリーはイヤリングをつけている (イヤリングはまだ手にある)。

②メリーはイヤリングをつけている (イヤリングはすでに耳にある)。

(Chiravate 2002)

例 76) のように、「sài tàaŋ-hǔu (イヤリングをつける)」など結果性のある述語と共起する場合、「kamlaŋ」は Progressive の意味しか表せないのに対し、「yùu」の場合、文脈を明確に示していない限り、Progressive も Resultative も表すことができる。Imperfective は Progressive の上位概念であるため、「yùu」が Progressive を表すことも可能であることは不思議なことではない。この点については、Meepoe (2001) でも論じられている。Meepoe (2001) は会話に現れる「kamlaŋ」と「yùu」を分析し、「kamlaŋ」

³⁶ Locative→Progressive→Continuous→Imperfective→Present

phûut-sɛɛo wâa “róɔŋ sǎŋ yaŋ-kàb khwaai” tham-hâi phûu-taai
からかう と 歌う 声 のように 水牛 [使役] 死者
nóɔi-cai.

恨めしい

=死者が歌を歌っている間に、自分（目撃者）は「水牛のように歌うんだ
な」とからかって、死者に恨まれた（と言った）。

例 77) の会話の内容の一部であるが、「ra-wàŋ-thîi (間に)」という副詞が現れたため、この「kamlaŋ+動詞句+yùu」は、「róɔŋ-phleɛŋ (歌う)」と「phûut-sɛɛo (からかう)」が同時に起こっている、もしくは近い時間帯に起こっていることを表している。しかし、「kamlaŋ+動詞句+yùu」が示す出来事は必ず先に起こる。

そして、③終結点のある活動述部（本研究の「活動達成述語」と同じである）を伴う場合、「kamlaŋ+動詞句+yùu」は Progressive を表すと、Mekthawornwathana&Chaisirivikorm (2010) は指摘している。

一方、「kamlaŋ+動詞句+yùu」が Imperfective を表すと解釈できるのは、以下のような2つの場面に現れる場合である。①「現在」や「今日」など発話時を含む時間副詞が共起する場合、「kamlaŋ+動詞句+yùu」を伴う出来事の状態がある期間内に継続することを示す。そして、②副詞が共起しない場合、「kamlaŋ」と「yùu」それぞれの意味によって、「ある期間で継続する」意味が発現されると指摘している。

Mekthawornwathana&Chaisirivikorm (2010) における最も大きな問題は、「kamlaŋ」と「yùu」各形式の意味を明確にしないまま、「kamlaŋ+動詞句+yùu」を一つの形式として扱って分析を進めていることである。しかし、「kamlaŋ+動詞句+yùu」は、「kamlaŋ」と「yùu」から成り立つ形式であることを前提にして分析していくべきであると本研究は考える。

次に、述語の時間的構造は「kamlaŋ」と「yùu」の意味とどのように関わっているのだろうか。Kullavanijaya&Bisang (2007) では、「yùu」は限界性のない期間を示すとされ、

「yùu」は開始時点と終了時点の間にある期間といった局面を持つ出来事としか現れないとされている。そして、「yùu」は一時性 (Temporal) を持っているため、述語が「tham-ma-daa (一般的に、普通)」などの副詞を伴う場合や超時性か属性を表す場合、「yùu」は使用できない。状態変化を含んだ状態述語とは共起可能であるが、必然的な終了時点を持つ述語とは共起できない。このことから「yùu」は「基準に達していない」という派生的な意味を表すこともある。

78) a. *hĩn khěɛŋ yùu.

石 硬い yùu

=石が硬い。

b. *khǎo khĩan còp yùu.

彼 書く 終わる yùu

=彼は書き終わっている。

c. ʔaa-hǎan ʔà-ròì yùu.

料理 美味しい yùu

=料理はまあまあ (どちらかというと) おいしい。

(Kullavanijaya&Bisang 2007 : 74-76)

例 78)a. は属性を表す述語であるため、「yùu」は現れない。そして、78)b. の述語「khĩan còp (書き終わる)」は、必然的な終了時点を持っているため、「yùu」の使用は許されず、非文となる。そして、78)b. の「yùu」は派生的な用法であり、この場合、料理の美味しさは、「おいしい」と判明できる基準にまだ達していないというニュアンスに解釈できるのである。

一方、「kamlaŋ」は設定時に起こる出来事の過程を表す形式であると述べられている (Kullavanijaya&Bisang 2007 : 76)。「kamlaŋ」は「yùu」と同じく、一時的性 (Temporal) が含まれているため、超時性と属性を表す述語とは共起できない。状態変化

を含んだ状態述語とは共起可能であるが、必然的な終了時点を持つ述語とは共起できない点でも「yùu」と共通している。

79) a. *hĩn kam-lan khěɛŋ.

石 kamlan 硬い

=石が硬い。

b. *khǎo kam-lan taai.

彼 kamlan 死ぬ

=彼は死んでいる。

c. khǎo kam-lan cà taai.

彼 kamlan cà 死ぬ

=彼は死にかけている。

(Kullavanijaya&Bisang 2007 : 76-77)

例 79)a. のように、「kamlan」は属性を表す述語を伴うことができない。そして 79)b. では、「taai」が到達述語であるため、「kamlan」は使えない。しかし、79)c. のように、「cà」が省略された形で解釈すれば、「kamlan」は必然的終了時点を持つ述語と共起できると指摘されている。本研究で論じた「cà」の性質によって説明してみると、「cà」は「基準的段階」を示すため、出来事が開始する前に期間を与えると考えられる。従って、「kamlan」はその出来事が開始する前の期間中での過程を表すことができる。(Kullavanijaya&Bisang 2007 : 76) では記述されていないが、ここでもう一つ興味深い点がある。もし「kamlan」と「yùu」が Progressive の同じ意味を表すとすれば、両方とも期間を与える性質を持つ「cà」を伴って必然的終了時点を持つ述語と共起できるはずであるが、実は「cà+動詞句+yùu」という複合形式は存在しないのである。

80) a. *khǎo cà taai yùu.

彼 cà 死ぬ yùu

b. *khǎo kam-lan cà taai yùu.

彼 kamlan cà 死ぬ yùu

c. khǎo cà taai léεo.

彼 cà 死ぬ léεo

d. khǎo cà taai yùu léεo.

彼 cà 死ぬ yùu léεo

e. khǎo kam-lan cà taai yùu léεo.

彼 kamlan cà 死ぬ yùu léεo

= 彼は死にかけている (死ぬ直前だ)。

(筆者)

ニュアンスが少々異なることがあるが、例 79) の例文は全て「死ぬ」が開始する前の段階を指す。例 80) c. のような「kamlan+cà+動詞句」は現れるものの、例 80) a. のような「cà+動詞句+yùu」は非文となる。79) b. のように「kamlan」を加えても非文である。しかし、80) d. と e. のように「léεo」と共起し「yùu」が現れるため、「kamlan」は「cà」と、そして「yùu」は「léεo」の意味が深く関わっていると考えられる。このことは、「kamlan」と「yùu」の意味の違いを理解するために重要な一つのヒントとなる可能性がある。

田中 (2004) は、「kamlan」が「cà」と共起する形式によって「今から～するところだ」「～しようとする」という意味が生じると指摘しているが、「kamlan+cà+動詞句」を深く分析してはいない。一方、Koenig&Muansuwan (2005) では「kamlan」と「cà」が共に現れる構文を形態的に分析しており、「kamlan」は Progressive の形式とされ、「cà」は英語の「be about to」の意味を表すとしている。

81) a. wi-lai kam-lan cà yép-phâa sèt.

ウィライ kamlan cà 裁縫する 終わる

b. wi-lai yép-phâa kam-lan cà sèt.

ウィライ 裁縫する kam-lan cà 終わる

c. *wi-lai kam-lan yép-phâa cà sèt.

ウィライ kam-lan 裁縫する cà 終わる

d. *wi-lai cà yép-phâa kam-lan sèt.

ウィライ cà 裁縫する kam-lan 終わる

=ウィライはそろそろ裁縫し終わる。 (Koenig&Muansuwan 2005 : 342)

述語「yép-phâa sèt（裁縫し終わる）」は活動達成述語であり、開始時点と終了時点及び過程も含まれている述語である。81)a. から d. まで見ると、「kam-lan」と「cà」が一緒に現れる構文は2つに分けることができる。それは「kam-lan+動詞+cà+動詞」と「kam-lan+cà+動詞句」である。そして、例 81)a. と b. の意味関係は[kam-lan [cà [[yép-phâa]sèt]]]と書くことができる。つまり、「cà」は「sèt（終わる）」が支配した述語「yép-phâa」を支配し、さらに「kam-lan」は「cà」を支配すると考えられる。

一方、Sriprasit (2003) は「yùu」と「léεo」が一緒に現れる構文を3つのタイプに分けている。それは文末に現れる「動詞句+yùu+léεo」と、修飾節に現れる「動詞句+yùu+léεo+修飾語句」、そして動詞句が現れず、単独に使われる場合である。

82) a. kòt-măai dem dii yùu léεo. tâa phûu-yǐng yàak chái

法律 旧 いい yùu léεo もし 女性 ほしい 使う

naam-sà-kun-dem kô khuan wong-lép wái.

旧姓 なら べき 括弧を付ける 置く

= 元々の法律は既に良かった。もし女性は旧姓を使いたかったら（旧姓を）括弧に入れるべきだ。

b. phǎm chôp don-trii yùu léεo dūai kô khào pai ?òp-rom

僕 好き 音楽 yùu léεo も それで 入る 行く 研修

prà-maan nùŋ pii hěn-cà-dâi.

くらい 1 年 ようだ

= 僕は元々音楽が好きなこともあるから、それで一年くらいかな、研修に参加していた。

c. theə kô hěn yùu léəo wâa chăan kam-lan yûŋ.

君 も 見える yùu léəo と 私 kamlan 忙しい

= 私が（今）忙しいのを君が既に見てた（でしょう）。（Sriprasit 2003）

Sriprasit (2003) は複合形式が「yùu」と「léəo」のそれぞれの意味から成り立つという立場である。このことは、本研究の主張と類似しているが、「léəo」を「完了」の形式とする点は、本研究の主張と異なる。Sriprasit (2003) によると「yùu+léəo」は、例 82)a. と b. のように出来事がしばらく完了していたことを表す。そして、82)c. のように話者の「確信」などを表すこともできる (pp. 174-176) としている。日本語は聞き手の視覚や思考に関して言い切る場合があまりないため、82)c. の日本語訳には「だろう」などのモダリティ形式が必要である。「yùu+léəo」の「確信」、「自信」、「誇り」などの意味は、「yùu」と「léəo」のそれぞれの性質から派生した意味だと、本研究は考える。

以上、先行研究による「kamlan」と「yùu」の意味に関する分析をまとめた。最も大きな問題だと考えられるのは、「kamlan」と「yùu」の意味の違いがまだ十分に究明されていないことである。以下では、「kamlan」と「yùu」の本質を探り、アスペクトの面では同じ局面を表しているように見えるものの、話者が捉えるモダリティ的な意味が異なる場合を含め、両形式の違いを考察する。

5. 2. 本研究の仮説

5. 2. 1. 「テイル」の意味

これまでも述べてきたが、「テイル」はアスペクトを表す「テイ-」の部分と時間ダイクシスを表す「ル」か「タ」が組み合わさったものである。「テイル」はどの述語とでも

共起できるが、述語の語彙に内在している時間的構造は「テイル」の意味を決定する最も重要な要素ではない。話者が観察して解釈した時間的構造により、同じ述語でも「テイル」を伴って「動作継続」も「結果継続」も表すことができる（高見・久野 2006）のである。

先行研究によれば、「テイル」の基本的な用法には「動作の継続 (Progressive)」「(一時的結果)の継続 (Resultative)」「変化の結果の継続 (Perfect)」の3つがあると考えられる。各意味の定義については、第2章の2.3. 視点アスペクトで述べているが、つまり、Progressive と Resultative は Imperfective の下位概念であるが、Perfect は別のカテゴリーである。Imperfective の特徴は、出来事の時間的構造の内部に注目し、静的であれ動的であれ、述語に間隔 (interval) を要求する視点である。一方、Perfective は、観察地点が発話時として以前に起こった出来事の結果に視点を置くと考えられる。Imperfective が表す時間的構造の内部は、一時的な局面であり、開始時点と終了時点を持っているため、この種の「テイル」は「一時的結果の継続」と呼ぶことにする。一方、Perfect が表す出来事の結果は発話時まで及び、発話時以降にも効力が続いて行くため、終了時点を持たず、永遠に続くとも考えられる。Imperfective と Perfect が共通しているのは、話者が着目する出来事に間隔を要求することである。従って、「テイル」（「テイ-」部分）の本質は以下のようにまとめられる。

- 83) 「テイル」の意味：話者の観察地点が時間軸上のどこに設定されるかに関わらず、話者の視点は出来事が実施された期間から出来事を観察して間隔 (interval) を要求し、その出来事における間隔の開始時点と終了時点の有無を問題外とする。なお、話者の観察地点の位置を指すのは「ル(発話時以降)」もしくは「タ(発話時以前)」である。

つまり、出来事の時間的構造内部であれ、変化の結果であれ、話者が間隔を捉えられれば「テイル」の使用が可能になる。

図 27. 「テイル（「テイ-の部分」）」の意味

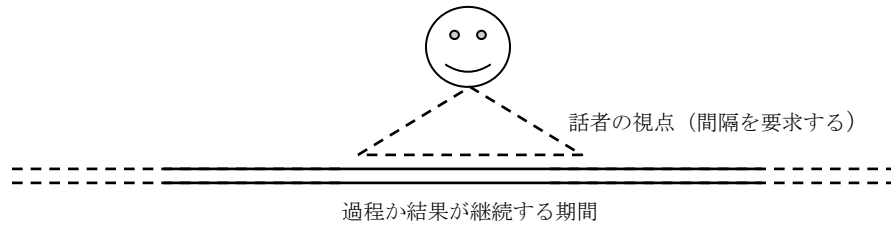


図 27. のように、話者の観察地点がどこにあるのかについては問題とせず、話者が対象の出来事から間隔を捉えることができれば、十分に使用条件が満たされると考えられる。さらに、開始時点及び終了時点の有無に関して問題としないため、終了時点のない属性を表す出来事や超時的な出来事を伴い、「経験」や「記録」などの「変化の結果の継続（Perfect）」用法として使用することも可能であるし、一時的（Temporal）な出来事を伴って「動作の継続」「（一時的）結果の継続」を示すこともできる。しかし、「テイル（テイ-の部分）」は「タ」と共起して「テイタ」になると、「タ」の働きで終了時点が捉えられると考える。以下の 5.3.1. で「テイル」の各用法について考察する。

5. 2. 2. 「kamlag」と「yùu」の意味

5. 2. 2. 1. 「kamlag」の意味

上述したように、「kamlag」は本来名詞であり、「力」を意味する。一方「yùu」は「居る」「存在する」「住む」という意味の動詞である。

- 84) a. ʔàp-braa-moo-wîʃ prəəy-wâa mâi-khîi shôp-cai sa-phâap
 アルカディエヴィッチ 言い出す あまり 好き 状態
 khǒŋ thiim shel-sii nai kha-nà-níi nûag-càak khàat
 の チーム チェルシー の 現在 [理由] 欠ける
 cùt-dèn-cha-phó-tua súŋ ton dâi né-nam pai wâa
 個性 [RP] 自分 dâi 助言する 行く と

nâa cà sǎəm kam-lan nai dɛɛn-klaan. (TNC)

べき cà 加える 力 中 ミッドフィールダー

= アルカディエヴィッチは、チェルシーFC に個性が欠けているのが気に入らないと言い出して、(チーム) にミッドフィールダーの力を加えるべきだと助言した(と言いました)。

b. mûa ʔyìp sǐn-kháa rǔw sǐŋ-khǒŋ càak lǎŋ ráan chán-bon
とき 取る 商品 あるいは 品物 から 後ろ 店 上階
rǔw thīi-kèp-khǒŋ khuan mii phûu yùu duu-lɛɛ nâa ráan
あるいは 倉庫 べき 有る 人 いる 世話する 前 店
rǔw yùu kàp lûuk-kháa sà-mǎə. (TNC)

あるいは いる と一緒に お客さん 常に

= 店の後ろ、上の階、あるいは倉庫から商品や品物を取るとき、店で待機するためにいる人や、お客さんと一緒にいる人を置くべきだ。

例 84)a. は名詞「力」を意味する「kamlan」で、84)b. は動詞「いる」を意味する「yùu」の例である。本研究はこのような「kamlan」と「yùu」は考察の対象外とする。

先行研究によると、「kamlan」は Progressive (進行)、「yùu」は Imperfective (不完結)を表す形式だとされている。しかし、実例を分析したラッタナセリーウォン (2014) では、「kamlan」は Progressive 以外にも Resultative を表す形式として現れることが可能であると述べている。

一般的に Progressive は動作の継続だけに限定されているが、「kamlan」は、状態変化を状態の開始として捉えることが可能な静的述部と受身成分を伴うことも可能であり、さらに、修飾節で現れる「kamlan」は、状態変化を捉えやすい語り手の視点の回転による話者の知覚動詞、例えば「見える」「見る」「見つめる」「気づく」など、述部が動的であっても、Imperfective の Resultative を表す例も見られる。そして、絵・像・写真のような動きのないものの様態を状態変化の結果として位置づけて説明するときにも、

「kamlaŋ」が多く使われている。さらに、「kamlaŋ」はアスペクト性以外にモダリティ性も含まれている。タイ語では「ちょうど」と言いたい時、「kamlaŋ」が使用される。

- 85) a. má-mûaŋ kam-laŋ sùk læi.
 マンゴー kamlaŋ 熟する [ENDP]
 = マンゴーが (ちょうど) 熟しているよ。 (ラッタナセリーウォン 2012)
- b. *má-mûaŋ kamlaŋ dīp læi.
 マンゴー kamlaŋ 未熟 [ENDP]
 = ?マンゴーは (ちょうど) 熟していないよ。 (ラッタナセリーウォン 2012)

85)a. の述語「sùk (熟する)」は状態が出現する開始時点を含んだ終期状態³⁷であるため、「kamlaŋ」はその開始時点に焦点を当てると考えられる。そして、マンゴーが食べごろになったというニュアンスも含まれている。一方、85)b. のように初期状態述語の「dīp (未熟)」は開始時点に焦点を当てることができないため、「kamlaŋ」を伴うことができない。

- 86) a. kòt-măai lăai cha-bap thīi kiau-không kàp rûaŋ-nīi
 法律 いくつか [数量詞] [RP] 関る と このこと
 kam-laŋ thùuk sa-nǎə khâo maa nai sa-phaa khooŋ-krees.
 kamlaŋ [受身] 提案する 入る 来る 中 国議会 コングレス (TNC)
 = このことに関するいくつかの法律は、アメリカ合衆国議会で提案されて
 いる。
- b. khǎo nóm kaai loŋ trong phra-phak phra-ma-hǎa-ka-sàt.
 彼 折り曲げる 体 下がる [場所] [RPF]前 王様

³⁷ 第2章の2.2.2.を参考。

mũa kôm-lonj mɔɔŋ khǎo kô phóp-wâa tua-ʔeerj kam-lan
 とき うつむく 見る 彼 [CJT] 気づく 自分 kamlan
 sũam khruwɔŋ-bɛɛp khâa-râat-cha-săm-nâk temyót. (TNC)
 着る 制服 公務員 立派な

=彼は王様の前でうつむくと、自分が立派な公務員の制服を着ている
 のに気づいた。

c. kha-nôm-mô-kɛɛŋ thîi khǎo hâi maa ʔa-ròi mâak. mâi
 タイ風プリン [RP] 彼 あげる 来る おいしい とても [否定]
 wǎan pai. wǎan kam-lan dii. (TNC)
 甘い 過ぎる 甘さ kamlan いい

=彼からもらったタイ風プリンはとてもおいしかった。甘すぎず、(甘さが)
(ちょうど)いい。

「kamlan」が受け身マーカの「thùuk」と共起する例は多く見られる。一般的に受身構文は何らかの動作の結果状態を示す場合に現れると考えられるため、この場合の「kamlan」はProgressiveではなく、Resultativeとしての解釈が難なく可能である。例 86)a. では話者の視点が「法律が提案される」動作の結果に置かれており、Resultativeとして読み取れる。例 86)b. は、「kamlan」が「sũam (着る)」の動作継続を表すのではなく、動作が終わった後の動作の結果を表していると考えられる。これは、Chiravate (2002) で挙げられた例 76)の反例である。しかし、例 86)b. では、「kamlan」は話者の知覚動詞、「mɔɔŋ (見る)」の内容節であることを注意したい。これは話者が「見る」動作を行う瞬間を状態の開始時点として捉えるのだと解釈できるであろう。さらに、例 86)c. はモダリティ性が含まれている「kamlan」の使用例である。「甘さがいい」とは、話者による判断の出来事であり、話者が判断した瞬間が状態変化の開始と捉えられる。

例 85)と 86)のような使用から、「kamlan」を使用する際、話者は継続する期間以外に状態の開始時点にも視点を置いていると考えられる。

87) 「kamlanj」の意味：話者の観察地点が時間軸上のどこに設定されるかに関らず、話者の視点は出来事が実施された期間から間隔（interval）を要求しながら、その出来事における間隔の開始時点（Initial Point）にも視点を置く。「kamlanj」は一時的な出来事としか共起しない。

Kullavanijaya&Bisang（2007）によると「kamlanj」には一時性（Temporal）が含まれているため、「kamlanj」が示す出来事は一時的でなければならない。一時的であることは、いつかは終了するということも予測できるのだが、これまで考察したように「kamlanj」は状態変化の開始時点に着目していることが分かっている。なお、ここで注意すべきことは、状態の開始は現実の開始時点でもなくとも良いということである。例 86)b. と c. のように話者が意識し始める時点を開始時点として捉えることも可能である。「kamlanj」が表す意味は以下の図のように描くことができる。

図 28. 「kamlanj」の意味

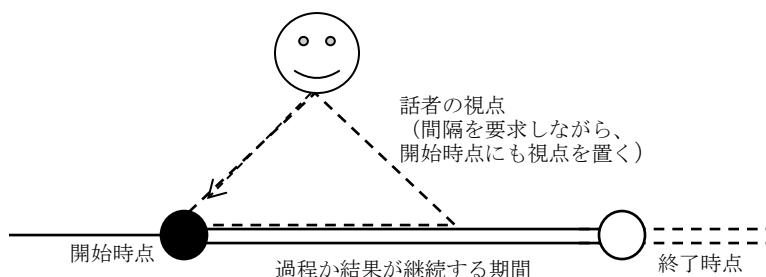


図 28. のように、話者の視点が捉える状態の間隔に開始時点が含まれている。動作の継続を示す Progressive だけではなく、話者にとって出来事が一時的な存在であり、そして開始時点と間隔が捉えられる場合であれば、状態述語でも到達述語でも「kamlanj」を使用することができる。 実例は 5.3.2. で取り上げたい。

5. 2. 2. 2. 「yùu」の意味

沈 (2005) によると、「yùu」が示す状態は「kamlaŋ」の反対であり、終了時点が捉えやすい初期状態と共起することができると述べられている。

88) a. sŭa (yaŋ) mài yùu leei.

服 まだ 新しい yùu よ

= この服は (まだ) 新しい。

b. *sŭa (yaŋ) kào yùu leei.

服 まだ 古い 継続 よ

= ? この服は (まだ) 古い。 (ラッタナセリーウォン 2012:181)

例 88) a. の「mài (新しい)」は初期状態であり、開始時点を捉えないが、一時的な出来事であるため、いつか終了時点が必ずあると考えられる。一方、88) b. の「kào (古い)」は終期状態であり、終了時点を捉えにくい(服を修繕に出すなど、もう一度新しくなるという予期があれば、「古い」の終了時点をとることができるかもしれないが)ため、「yùu」が現れると不自然なのである。

さらに、「kamlaŋ」は、終了時点を持つ期間を表す副詞と共起しないが、「yùu」は共起する。この現象は「yùu」が状態の終了時点に焦点を当てることを反映していると考えられる。

89) a. khǎo ywuŋ yùu sǎŋ naa-thii.

彼 立つ yùu 2 分間

= 彼は 2分間立っていた。

b. *khǎo kam-laŋ ywuŋ sǎŋ naa-thii.

彼 kamlaŋ 立つ 2 分間

= *彼は 2分間立っている。 (ラッタナセリーウォン 2012:181)

c. khǎo yuwn sǎɔŋ naa-thii léɛo.

彼 立つ 2 分間 léɛo

= 彼は2分立った。

(筆者)

例 89) の「sǎɔŋ naa-thii (2 分間)」という期間副詞は、終了時点を持っているため、終了時点に着目する「yùu」が現れるが、89)b. のように開始時点だけに着目する「kamlaŋ」は使えないのである。例 89)a. では、「sǎɔŋ naa-thii (2 分間)」の働きで出来事終了時点が既に確認されているため、発話時まで状態が継続していない。この場合、「yùu」と対応するのは終了時点を捉えられる「テイタ」となる。一方、「状態変化後の段階」を表す「léɛo」が現れる例 89)c. と比べると、89)c. の出来事は発話時にまだ存在している可能性がある（彼がまだ立っている）。89)c. の「léɛo」はただその状態が開始してから発話時までには 2 分間経過したことを示すだけである。

90) tâŋ-cai wâa tam²-ŋaan yùu sák hâa-pii léɛo cà tèɛŋ-ʔŋaan.

つもり と 働く yùu ぐらい 5 年間 léɛo cà 結婚する

= 5 年間働いて、それから結婚するつもりです。

(ラッタナセリーウォン 2012:182)

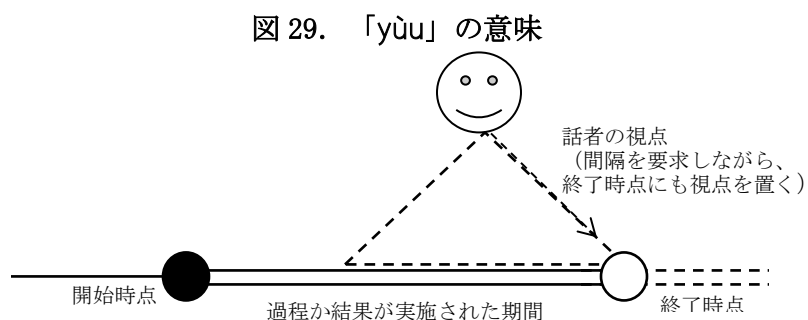
「yùu」は過去の出来事とも未来の出来事とも共起できる。「yùu」を使用する際、話者が着目する終了時点は、現実の世界に起こらなければならないわけではなく、話者が認知レベルで捉えることがあれば問題ないのである。例えば、90) では話者は発話時以降に起こる終了時点（5 年間経った時点）を予想し、期間「hâa-pii (5 年間)」が終了した後の状態「tèɛŋ-ʔŋaan (結婚する)」を述べている。「5 年間働く」状態が発話時に既に実現されているとも解釈できるし、まだ始まっておらず、これからのことであると解釈することも可能である（「cà」を付けることで、その曖昧性は避けることができる。）。

この曖昧性は「yùu」を使用する際、話者が開始時点に着目していないことの証拠となる。

「yùu」の意味は以下の通りまとめられる。

- 91) 「yùu」の意味：話者の観察地点が時間軸上のどこに設定されるかに関らず、話者の視点は出来事が実施された期間から間隔（interval）を要求しながら、その出来事における間隔の終了時点（Final Point）にも視点を置く。「yùu」は一時的な出来事としか共起しない。

Kullavanijaya&Bisang（2007）によると「yùu」も「kamlaŋ」と同じく、一時性（Temporal）が含まれているため、「yùu」が示す出来事は一時的でなければならない。「yùu」の意味は以下の図のように表すことができる。



話者は「yùu」を使用する際、出来事の間隔だけではなく終了時点にも着目していると考えられる。「yùu」は開始時点の問題としないため、単独で「基準的段階」を表す「cà」と共起することができない。しかし、例 90)のように「léeo」と共に現れれば、「cà」と「yùu」は共起が可能となる。

- 91') tâŋ-cai wâa cà tam²-ŋaan yùu sák hâa-pii léeo cà
つもり と cà 働く yùu ぐらい 5年間 léeo cà

tɛɛŋ-ʔŋaan.

結婚する

= (これから) 5年間働いて、それから結婚するつもりです。(筆者)

例 91') の意味関係は、[cà [[[[tamʔ-ŋaan (仕事する)]yùu]hâa-pii (5年間)]léɛo]] と記述できる。つまり、「cà」は[yùu]を支配した「léɛo」を支配するという関係になっている。つまり、「cà」と「yùu」は直接に結ばれていないと考えられる。

以上、「kamlaŋ」と「yùu」が表す意味を考察した。次の 5.3. では実例を取り上げながら「テイル」との類似・相違点を分析する。

5. 3. 「テイル」と「kamlaŋ」・「yùu」の用法

この節では各形式の基本的用法とその意味から派生してきた用法に分け、各種の述語を伴う場合、どのような違いが現れてくるか。そして、話者の視点はどのように関わっているのかを観察する。

5. 3. 1. 「テイル」の用法

これまでで述べたとおり、「テイル」の基本的用法は3つあると考えられる。それは、①「動作の継続 (Progressive)」、②「(一時的結果)の継続 (Resultative)」、③「変化の結果の継続 (Perfect)」である。この3つの用法以外は基本から派生したものと考えられる。

5. 3. 1. 1. 活動述語と共起する場合

まず、活動動詞と共起する「kamlaŋ」の用法を見ていきたい。

- 92) a. 奴は微笑んでいた。それもなんというのか、こう温かく優しく。「なんだ、なに笑ってんだ？」訊ねるが、小坂は首を振って応えない。(少納言)

- b. 話しあっているうちに、ちょっとおかしいぞと思うようになって、こう
いったこともあるわ。「ちょっと待ってよ、何を話してるのよ」って。
- c. 「ねえ、モノポリーやろうよ！」無言。返事はない。三人とも、なにも聞
こえなかったみたいになんた座ってる。「わかった。じゃあ、スクラブル
は？」無言。みんな、ぼくの後ろを見てる。 (少納言)
- d. ご飯を一緒に… と言われたけど、食べてたしもう時間もそんなになくて、
東京もちょっと回りたいかったし…彼女とはそこでバイバイ。 (少納言)

例 92) a. から d. まですでに現れた「テイル」は「動作の継続 (Progressive)」を表している。話者は発話時に継続している動作を観察しなければならないため、会話の中で多く見られる。しかし、定延 (2006) が述べているように、その観察は現実のものを対象する必要はなく、仮想的な観察も可能である。例えば、例 92) d. では、話者は「食べている」期間を想像し、記憶の中の状態を観察して述べていると考えられる。この場合、「テイル」と「タ」が融合した意味解釈となる。

- 93) a. 最近、米をよく食べる。1回で1合くらい食べてる。 (少納言)
- b. 恋って、どうしてこんなにうまくいかないの？百合さんは、兄貴を見て
て。慎吾は、百合さんを見てて。あたしは、慎吾を見てる。 (少納言)
- c. それが現在では九六パーセントの子どもたちが高校に進学しています。
- d. 本当は別居が希望ですが、このままの状況が続くのであれば、離婚も考えています。 (少納言)

例 93) の述語も活動述語であるが、話者は動作が終わった結果の継続を観察したために、活動述語でも「(一時的) 結果の継続 (Resultative)」を表すことができると考えられる。93) a. の「食べてる」は習慣の意味ではなく、「最近」などの一時的な期間内で一回食事をした後に、話者が食べた量を観察した結果である。93) b. では「見る」行為の結果

として「恋する」という意味が解釈できる。93)c. では、記録の用法に見えるが、副詞「現在」を伴うため、「96%パーセントの子どもたちが高校に進学している」状態は一時的であると捉えられている（これから進学率はまた下がったり上がったりするかもしれない）。そして、93)d. では、もちろん「離婚」を考えるということを継続的だと捉え、「テイル」は「動作の継続」として解釈することも可能であるが、ここでは「本当は別居が希望」という前提があるため、「このままの状態が続く」場合を想定した結果として捉えたほうが妥当であると考ええる。

- 94) a. 私はそれほどひどいわけではないのですが、冬で乾燥してくると椿油を
使っています。 (少納言)
- b. 週に何回、家族そろって夕食を食べていますか? (GOOGLE 検索)
- c. 仙台出身でお姉さんも芸能人だったのですが……。普通の会社員のひと
結婚されてお子様も生まれて幸せに暮らしています。 (少納言)
- d. 私は脱毛エステで社員として働いています。 (少納言)

例 94) の述語は活動述語で、「習慣 (habitual)」を表している。Comrie (1976) によると、「習慣 (habitual)」は Imperfective の下位概念であると述べているが、例 94) で見られるように、「習慣 (habitual)」用法の中でも、94)a. と b. のように、「反復」的に行われている出来事ではあるが永遠に続くわけではない場合と、94)c. と d. の出来事のように終了時点を捉えることができず、出来事が主題の属性のように解釈されている場合とに分けられると考えられる。94)a. と b. は一時的な出来事であることから「(一時的) 結果の継続 (Resultative)」の意味から派生してきたと考えられる。一方、属性的な意味が含まれている 94)c. と d. のような場合は、「変化の結果の継続 (Perfect)」から派生したと扱うべきではないかと考えられる。つまり、94)c. は「幸せに暮らしているお姉さん」、94)d. は「社員として働いている私」のように解釈できる。

95) a. 私は地味な顔をしています。

(少納言)

b. 誰による、どのような方法に対処すべきか、わかりませんから、受動的な盗聴に対処するには全般的な保護手段がベストです。その中で、特に暗号化が優れています。

「単なる状態」用法も「テイル」の「変化の結果の継続 (Perfect)」から派生してきたと考えられる。開始時点は明確に捉えられないが、存在していると解釈できる。例えば、95) a. は生まれた時を開始時点とし、95) b. も暗号化が誕生した時を開始時点として捉えることができる。ただし 95) a. と b. の両者とも、話者は終了時点を抑えていないと考えられる。

活動述語は話者の解釈によって「テイル」の基本的な 3 つの意味を全て表現可能であるが、必然的終了時点を持っている一回的述語と達成述語と到達述語は内在している意味から動作の過程を抑えられないため、「動作の継続 (Progressive)」を表すことができず、「(一時的) 結果の継続 (Resultative)」か「変化の結果の継続 (Perfect)」になると考えられる。

5. 3. 1. 2. 必然的終了時点を持つ述語と共起する場合

必然的な終了時点を持つ述語と共起する場合、「テイル」は述語の内在している結果の局面における継続期間を抑えなければならないため、「動作の継続 (Progressive)」より「(一時的な) 結果の継続 (Resultative)」か「変化の結果の継続 (Perfect)」を表すようになる。

96) a. 再生可能電力買取法によって採算性も維持され飛躍的にすすんでいるドイツなどの経験をもとに、日本でも法制化を求める NGO の活動が始まっています。

(少納言)

b. 母と会話するたびに動悸がして自信をなくしています。家を出たほうが

いいのでしょうか？ (少納言)

c. いまや私には、考えるべきことが一つ生じています。 (少納言)

d. 2008 年 7 月 18 日 Palyul (中国語では Baiyu) 郡、甘孜 (カンゼ) (中国語では Ganzi) 「チベット自治地区」、カム (現在は中国四川省の一部に統合) -ゾクチェン僧院と中国軍が衝突、今年 3 月から相当の数にのぼる中国軍がゾクチェン僧院に到着している。 (少納言)

例 96) a. と b. の述語は達成述語で、96) c. と d. は到達述語である。達成述語と到達述語は終了時点に達しないと出来事が成立しないという特徴を持っている。例 96) の「テイル」は「(一時的) 結果の継続 (Resultative)」を表していると解釈でき、96) a. では、NGO の活動が始まった結果を示していると考えられる。96) b. では、自信をなくした結果を述べているが、話者は解決方法 (家を出たほうがいいでしょうか) などを見通しているので、これは一時的な出来事として解釈されていると考えられる。そして、96) c. の「生じる」は発話時以前に発生し、発話時まで結果が続いていると考えられる。96) d. は日付が含まれているため、「記録」用法のようにも解釈できるが、「今年の 3 月から」に着目すれば、永遠に残る記録より一時的な出来事として捉えたほうが妥当である。

97) a. どんなに時代が暗く、私たちの課題が大きくても、聖書は、希望のメッセージを与えています。 (少納言)

b. 巨人ファンは野球ゲームでもして現実逃避してるのですか？ ううん。ただ諦めてるだけです。まあ、何度も優勝してるから、余裕もありますし。

c. 半年間オーディションに費やしたが芽が出ず帰国しようとしていた矢先にカウンセラー・トロイの役を得た。1992 年にロックギタリストのマイケル・ランパーと結婚している。 (少納言)

例 97) では話者が出来事の終了時点を読みとっていない。97)a. は属性的に表す「変化の結果の継続 (Perfect) 」の一種であり、97)b. は「経験」、そして 98)c. は「記録」である。この「テイル」は（現実の世界では出来事が既に終わっていたとしても）終了時点を抑えないという点で共通している。

- 98) a. 酔っ払いっぱいおっちゃんが床をガンガン脚で叩いてる。 (少納言)
b. ピーターと手鏡男のまぶた見てみ。同じタイミングで同じ回数まばたきしてるから。 (少納言)
c. 祖父は背が低く、ずんぐりした体型で、何かにつけて悪態をつき、いつも咳をしてた。 (少納言)

例 98) の述語は一回的述語である。出来事が一瞬で終わる点で到達動詞と類似しているが、現実の世界には何の結果も残さないという点で異なっている。この場合、「テイル」と共起すると、話者が動作を何回も繰り返していると解釈でき、「テイル」は「反復」を表すことになる。98)a. の「叩く」は一回的述語であるが、「ガンガン」と共起して「反復」の意味が強調される。98)b. も同様に、「回数」と共起しているために複数回起こっていると解釈できる。98)c. の「咳をする」も「いつも」を伴うため、反復して起こっていた出来事として捉えられる。そして、「タ」の働きでその「反復」の出来事は発話時に存在していたと解釈できる。

5. 3. 1. 3. 受身構文で現れた「テイル」

金水 (2000) では、「テイル」の意味を決定する要因の一つとして、形態的・構文的条件が挙げられている。ここでは受身構文を取り上げて「テイル」の意味を考察する。

- 99) a. この比率も固定比率と同様 100%以下が望ましいと考えられています。

b. 400 年も続いてきた世界ですから、善も悪も含め、独自の因習や価値観が
確立されています。

c. ブログの『ガチャピン日記』の 11 月 18 日付けの記事に掲載されています。

「テイル」は受け身構文と共起する場合、「(一時的) 結果の継続 (Resultative)」も「変化の結果の継続 (Perfect)」も表すことができるが、「動作の継続 (Progressive)」の用法はあまり見られない。99)a. の「テイル」は「考えられる」という一時的な結果を示している。99)b. は「変化の結果の継続 (Perfect)」用法であり、終了時点が捉えられていない。同様に、99)c. は「変化の結果の継続 (Perfect)」から派生した「記録」用法である。この場合も話者は終了時点が捉えられていない。

以上、「テイル」の各用法を表す実例を取り上げて考察した。「テイル」は Imperfective も Perfect も表すことができ、終了時点が捉えられる出来事ともそうではない出来事とも現れる。「テイル」をこのように幅広く使用できる要因は、「テイル」が「間隔を要求する」といった単純な性質を持っているからである。そして、話者の観察も述語の内在的意味も「テイル」の意味用法を決める際に重要な役割を果たしていると考えられる。

5. 3. 2. 「kamlaj」の用法

以上で述べたように、現代タイ語の「kamlaj」は2つの基本的用法があると考えられる。それは①Progressive、②Resultative である。便宜上、以降、前者は「動作の継続 (Progressive)」、後者は「(一時的) 結果の継続 (Resultative)」と呼ぶ。以下では、これらの基本的用法と述語の種類といかに関っているのか見ていく。

5. 3. 2. 1. 活動述語と共起する場合

活動述語は開始時点と動作の過程の局面を持っているため、「kamlaj」が現れやすく、「動作の継続 (Progressive)」を表すことになる。

100)a. nâ-t-sù-mi yùu nai chut sũa-yũwt kaŋ-keŋ-khãa-sân lế

なつみ いる 中 服 Tシャツ 半ズボン そして

kam-lan chét phỏm sũŋ piak màat-màat.

kamlan 拭く 髪 [RP] 濡れる ひたひたに

=なつみはTシャツと半ズボンの姿で(立って)いて、ひたひたに濡れた髪を拭いている。

b. thũi rim khỏŋ tũn-lam-krà-dỏŋ nám kam-lan lăi chũa. (TNC)

で ほとり 小川 トンラムグラドン 水 kamlan 流れる 激しい

=トンラムグラドン小川のほとりでは、水が激しく流れている。

c. wan-nũi răt-thà-baan kam-lan duu-lẻ khon-con.

今日 政府 kamlan 世話する 貧乏

=今日、政府がお金のない(国民)を世話している。

d. rao kam-lan phũt thũŋ khỏŋ-pit-kòt-mảai muu-lá-khũa pen

我々 kamlan 話す について 法律違反品 価値 [CPL]

mũwn-mũwn lản bàat.

数万 百万 バーツ

=我々は数百億バーツの価値もある法律違反品について話している。

例 100)の述語「chét(拭く)」「lăi(流れる)」「duu-lẻ(世話する)」「phũt(話す)」は活動述語である。話者はこれらの動作における動きの過程を捉えているのである。

5. 3. 2. 2. 状態述語と共起する場合

「kamlan」は先行研究で述べられたように、「動作の継続(Progressive)」のみ表すことができるとすれば、動きのない状態述語とは共起できないはずである。しかし、コーパスから調べた結果、状態述語と共起している例も少なくない。

101)a. dèk ʔûan kam-lan pen pan-hăa khǒŋ sǎŋ-khom thîi mii-ʔan-ca-kin

子供 太る kamlan [CPL] 問題 の 社会 [RP] 豊かな

chèn sa-ha-rát-ʔa-mee-ri-kaa yîi-pùn kao-lǐi lé ciin. (TNC)

例えば アメリカ合衆国 日本 韓国 と 中国

=子供の肥満は、アメリカ合衆国、日本、韓国、中国など、豊かな社会における問題となっている(ところだ)。

b. lôok thúk-sùan kam-lan mii nɛɛo-nóom khâo sùu ra-bòɔp thîi

世界 全地域 kamlan 有る 傾向 入る に 制度 [RP]

sěe-rii lé pəət-kwâŋ mâak yîŋ-khûn. (TNC)

自由 と 開放的 多い より

=世界の全地域はより自由的で開放的な制度に向かう傾向を持っている。

c. ʔaa-kaat pàk-kìŋ nai tòn rú-duu-chuw-thian kam-lan sa-baai

天気 北京 中 初め 秋 kamlan 気持ちいい

chiao. khrai nùai cà ʔŋîp-làp pia-kòn kô-dâi. (TNC)

ね 誰 疲れる cà 一眠り 先に でもいい

=秋の初旬の北京の天気は(ちょうど) いいですね。疲れている人は、とりあえず一眠りするのでもいいです。

d. khun chéem sǔŋ kam-lan dii sùan phîi thái sǔŋ kəən-pai.

さん チャム 高い kamlan いい 一方 兄 タイ 高い 過ぎる

=チャムさんの身長は(ちょうど) いいですが、タイ兄さんは高すぎる。

例 101)a. の「pen pan-hăa (問題だ)」と 101)b. の「mii (有る)」は状態動詞であり、101)c. の「sa-baai (楽だ、気持ちいい)」と 101)d. の「dii (いい)」は形容動詞である。これらは状態述語を表している。101)a. と b. からは「昔はそうではなかった」ことを読みとることができ、「kamlan」は開始時点に焦点を置いていると考えられる。つまり、101)a. では問題が最近発生したことであり、101)b. では自由的で開放的な制度に向

かうつもりになかった国々でも最近変わり始めたと解釈できる。一方、101)c. と d. は現実の世界で起こった開始時点ではないが、話者の認識から生じた開始時点と考えられる。話者がその状態を判断した時点を開始時点として捉えるのである。101)c. では気づく前に天気がどのようになっているか話者は認識していないが、認識し始めて判断が行われた時点で天気が「気持ちいい」と気づくのである。101)d. も同様に、話者は何かの目的で「チャムさん」の背の高さを判断し、判断して初めて「いい（相応しい）」ことに気づいた時点の状態の開始時点として考えても良いのである。この場合、「kamlaŋ」は「（一時的）結果の継続（Resultative）」を表している。そして、開始時点が強調されているからこそ「～するところだ」や「ちょうど」といったモダリティ的な意味も生じると考えられる。

5. 3. 2. 3. 知覚動詞の内容節に現れる場合

「kamlaŋ」を発話する際、話者が捉える開始時点は、必ずしも現実に行っている開始時点ではなくても良いということから、叙述テキストでは「見る」「見える」「気づく」など、主題の知覚動詞の内容節として「（一時的）結果の継続（Resultative）」の「kamlaŋ」がよく現れる。この場合、「kamlaŋ」は知覚動詞が行われる時点の状態の開始時点として捉えている。そして知覚動詞の対象は人の行動に限らず、動きのない写真や像などの状態を説明する際にも「kamlaŋ」が使用される。

- 102)a. naai ʔa-phí-sít dái yùt mɔɔŋ klùm-khon-sûa-dεεŋ thîi
 氏 アピシット dái 止まる 見る 赤服軍団 [RP]
 kam-laŋ chum-num yùu nâa tùk sǎm-nák-ʔgaan kɔɔ-phɔɔ.
 kamlaŋ 集まる yùu 前 ビル 事務所 文官任用委員会
 =アピシット氏は足を止めて、文官任用委員会の事務所の前で集まっている
 赤服軍団(反独裁民主同盟)を見た。
- b. ʔa-maa-dee-ʔô yaŋ khɔŋ mɔɔŋ duəŋ-taa thîi kam-laŋ bəək too
 アマデオ まだ まま 見る 瞳 [RP] kamlaŋ 開く大きい

kwàa pa-ka-tì yàaŋ chûwn-chom. (TNC)

より 普通 のように 憧れる

= アマデオはまだ普段より 大きく開いている丸い瞳を憧れて見ている。

c. nâa múk-yài mii sǎo-hĩn ri-aŋ-raai ráp cùu sũŋ kè

前 中央ベランダー 有る 石柱 並ぶ 支える 破風 [RP] 刻む

hĩn nuun pen rûup thêep-phra-cáo ?a-phol-lô kam-laŋ

石 突出する [CPL] 図 神 アポロン kaml-aŋ

khàp-khii máa-thiam-rót lîu. (TNC)

運転する 馬車 走る

= 中央ベランダの前に並んだ石柱があり、今にも走り出しそうな馬車に乗っ
ているアポロンの絵を線刻した破風を支えている。

例 102)a. と b. の「kaml-aŋ」は、主題の知覚動詞「mooŋ (見る)」を開始時点として捉え、知覚動詞の対象の状態を説明している。102)c. では知覚動詞が明示的に現れていないが、出来事は知覚動詞の対象であると想像できる。102)a. の述語「chum-num (集まる)」は、現実の世界では、主題の「naai ?a-phí-sít (アピシット氏)」が見る前に既に発生していたが、話者は「mooŋ (見る)」を開始時点として「kaml-aŋ」を使用している。なお、102)a. の「yùu」は場所を表す。102)b. も同様である。102)c. は動きのない線刻された破風を説明するために「kaml-aŋ」が使われている。なお、102)a. と b. はニュアンスが少し異なる「yùu」と入れ替えることができるが、102)c. の用法は「yùu」と入れ替えると不自然になる。動きのないものの状態としての出来事 (102)c. の場合、「khàp-khii (運転する)」は、元々現実の世界に起こっていないため、開始時点も終了時点も持っていないと考えられる。そのため、「kaml-aŋ」は「mooŋ (見る)」という要素によって開始時点を捉えられるが、「yùu」は終了時点を捉えられる要素がないため、入れ替えることができないのである。

5. 3. 2. 4. 到達述語と共起する場合

到達述語は一般的に動作の過程を持たないため、「kamlaŋ」と共に起できないが、その到達述語の結果が一時的であり、開始時点が捉えられれば、「kamlaŋ」を伴うことも可能である。

103)a. ʔoo-kàat khǝŋ khuan maa thǝŋ léɛo! (GOOGLE 検索)

チャンス の あなた くる 着く léɛo

=あなたにチャンスが到来!

b. ii-búk kam-laŋ thǝŋ cùt-ʔim-tua? (GOOGLE 検索)

E-book kamlaŋ 着く ピーク (頭打ち)

=E-book (のマーケットは) 頭打ちになっているか?

一般的に到達述語は「kamlaŋ」と「yùu」を伴わず、例 103)a. のように「léɛo」と共起する。しかし、103)b. の場合、「thǝŋ cùt-ʔim-tua? (ピークに着く) =頭打ちになる」は、一時的な状態として解釈されているため、間隔を読みとることができる。さらに、「この前、E-book がよく売れた」ことが予期として想像され、「kamlaŋ」は状態が変化した時点を開始時点として捉えることができる。

以上、「kamlaŋ」の各用法を分析した。話者が出来事の開始時点と間隔を捉えることができれば、「kamlaŋ」の使用条件が満たされ、状態述語や到達述語と共に現れることもできるのである。

5. 3. 3. 「yùu」の用法

5.2.1. で論じたように、「yùu」は「kamlaŋ」と同じく、一時性 (Temporal) を持っているため、永遠に続くような Perfect の用法を持たない。しかし、話者は「yùu」を発話する際、出来事の間隔と終了時点に着目しているという点で「kamlaŋ」と異なる。さら

に、「yùu」は元々「いる」「住む」「存在する」という意味を表す動詞から文法化してきたため、位置・場所や存在を表す述語 (verb constellations of the positional or locative type (Smith 1991)) とよく共起している。

5. 3. 3. 1. 活動述語と共起する場合

コーパスから「yùu」の実例を分析してみると、「yùu」は「kamlaŋ」とは共起せず、単独で「動作の継続 (Progressive)」と「(一時的) 結果の継続 (Resultative)」を表す場合は非常に少ないことが分かった。このことは、話者が「yùu」を発話する際、開始時点に着目しないことと、コーパスの例文がほとんど会話以外の叙述のテキストであることが原因であると予測できる。その実例は「しばらく経ってから」や「相変わらず」など特殊的な意味合いが含まれるものか、終了時点が明確に述べられるものに限られる。

104) a. see-hun hǔa-ró ʔarai! thàai ʔem-wii yùu ná. (GOOGLE 検索)

セフン 笑う 何! 撮影する MV yùu よ

=セフン、なぜ笑うの! ミュージックビデオを撮影している途中だよ。

b. phǒm kô phaa-wá-naa wâa yàaŋ-nóci chûaŋ thîi phǒm yaŋ

僕 も 祈る と 少なくとも 間 [RP] 僕 まだ

tham-ʔaŋ yùu thîi máo-sai-naai nai mai-ʔaa-mîi-bîit níi

働く yùu で マウントサイナイ 中 マイアミビーチ この

kô yàa pèet pen khaa-si-noo læi. (TNC)

なら [禁止] 開業する [CPL] カジノ 必死

=僕も少なくとも、僕がマイアミビーチのマウントサイナイで働いている間

にはカジノに開業しないように必死に祈(った/る)。

c. chaaw-roo-man boo-raan rian kan yùu sǎam rûaŋ thào-nán

ロマン人 古代 勉強する 共に yùu 3 話題 だけ

kháp. kaan-ʔaan kaan-phûut lé kha-nit-saat. (TNC)

[ENDP] 読解 会話 と 数学

= 古代ロマン人は共通して3つの科目だけ勉強していた（/?る）んだよ。

（それは）読解、会話、数学だ。

d. naaŋ mâi khâo-cai læi wâa câo còk khăao-khăao bai

彼女 [否定] 理解する 全然 と やつ 片口 白っぽい [数量詞]

nán man cà pen tûai pai-dâi-yàaŋ-rai. naaŋ thăam khăo

その [RP] cà [CPL]お宛 どうやって 彼女 質問する 彼

dûai khwaam-sǝŋ-sǎi tɛɛ sǎa-mii naaŋ kô yaŋ ywun-yan

で 疑わしさ しかし 旦那 彼女 も まだ 言い張る

wâa man pen thûai yùu nân ʔɛɛŋ.

と [RP] [CPL] お宛 yùu その のだ

=彼女はどうやってこの白っぽい片口がお宛になってしまったか全く理解できなかった。彼女は疑念から彼に尋ねたが、それでも彼女の旦那はそれがお宛だとまだ言い張っているのだ。

例 104)では、活動動詞を伴う「yùu」である。104)a.は「動作の継続」を表しているが、しばらく続いてきた動作のようなニュアンスが含まれている。つまり、104)a.は「その撮影は始まってしばらく経ったのに、なぜ笑うのだ」という意味に解釈できる。104)b.も「動作の継続 (Progressive)」を表しているが、ここでは終了時点が「chûaŋ (間)」という副詞ではっきりと捉えられる。さらに、104)では「thîi mâo-sai-naai nai mai-ʔaa-mîi-biit (マイアミビーチのマウントサイナイで)」といった場所を表す句も現れている。104)c.は日本語に訳すと効力持続を表す「テイル」になるかもしれないが、このタイ語の解釈は、「yùu」で終了時点が認識されているため、「テイタ」に近いと考えられる。そして、例 104)d.の述語「ywun-yan (言い張る)」は以前起こっていたと考え

られ、今回も「相変わらず」同じ行動をし、開始時点として以前起こっていた時よりも、発話時の状態に着目していると考えられる。

5. 3. 3. 2. 状態述語、必然的終了点を持つ述語と共起する場合

状態述語は一般的に終了時点が捉えられない述語とされているが、一時性を持っている「yùu」の働きで話者は状態の終了時点を認識することができるようになる。

105) yàaŋ-rai-kô-taam thâa mii ʔaa-kaan yùu ta-lòt sǎŋ sǎam
 それにも関わらず もし 有る 症状 yùu ずっと 2 3
 duan léəo yaŋ mâi dii khûn kô khuan phaa lûuk maa
 月 léəo まだ[否定]いい 上がる なら べき 連れる 子供 来る
 phóop cìt-tà-phêet-dèk.

会う 児童精神科医

=それにも関わらず、もし症状が2-3か月続いてまだ良くならなかったら、子供を連れて児童精神科医に会いにくるべきです。

例 105)の「mii (有る)」は状態動詞である。その出来事が一時的 (Temporal) であると解釈され、さらに期間を表す副詞とも共起している。そのため「yùu」が現れることができる。この場合、「yùu」は「(一時的) 結果の継続 (Resultative)」を表している。

106) man luwm taa yùu dâi phak-diao, nai-taa kô khôoi
 やつ 開く 目 yùu [可能] しばらく 目 も ゆっくり
 pruu lé pìt loŋ pai ʔiik. (TNC)
 目を小さくする と 閉じる 下がる いく また

=やつはしばらく目を開いていて、また目を小さくして閉じてしまったのだ。

例 106)の「luwm taa (目を開く)」は結果性達成動詞である。この場合、「pìt lon pai ʔik (また閉じてしまったのだ)」といった文脈から結果状態の終了時点を捉えることができるため、「yùu」を伴うことができる。106)の「yùu」は「(一時的な)結果の継続 (Resultative)」を表している。なお、他の述語も期間を表す副詞と共に共起して「yùu」が現れることができる³⁸。

5. 3. 3. 3. 派生的な用法

頻度を表す副詞と共に共起すれば、「yùu」は「反復」を表すこともできる。

- 107) dì-chǎn kô mǎi chûa ʔik la-khà, wâa thîi rao phûut yùu
 私 も [否定]信じる また よ と [RP] 我々 言う yùu
 thúk-wan wâa hâi ʔòk-kam-lan-kaai, lûak râp-pà-thaan
 毎日 と [使役] 運動する 選ぶ 食べる
 ʔaa-hǎan yàa pai sìan tham-sǎn-ya-kam cà mii sák
 料理, [禁止] いく リスク 整形する cà 有る どれ程
 kii-khon thîi tham-dâi. (TNC)
 何人 [RP] できる

＝私も信じません。運動する、食事を選ぶ、リスクを顧みずに整形しない、
 というような我々が毎日言っていることができる人は(一体)何人位いるの
 だ。

例 107) は「反復」の例を表している。「phûut yùu (言っている)」は「thúk-wan (毎日)」と共に共起しているが、この場合、属性的で永遠に続くことを表す出来事ではなく、一定の期間内で反復することを示す出来事である。つまり、「運動することなどいい」

³⁸ 例 90)を参照。

という価値観が一時的であると、話者は捉えていると考えられる。そのため、107)の「反復」は「(一時的) 結果の継続 (Resultative)」から派生した用法だと考えられる。

5. 3. 3. 4. 複合動詞としての「yùu」

コーパスから見つかった「yùu」の例は、ほとんど位置・場所や存在を表す述語 (verb constellations of the positional or locative type (Smith 1991)) の例である。そしてこの場合、アスペクト形式としての「yùu」と複合動詞としての「yùu」に分けることができる。

108) a. phí-pít-thà-phan-lúuf pen waj kào tâŋ yùu rim m̃ê-nám
ルーヴル美術館 [CPL] 宮殿 古い 位置する yùu ほとり 川
sen. (TNC)

セーヌ

=ルーヴル美術館はセーヌ川のほとりに位置している歴史のある宮殿である。

b. praa-sàat-pha-nom-rúŋ s̄aŋ yùu bon yôot phuu-khăao-fai thîi
パノムルン宮 建てる yùu 上 山頂 火山 [RP]
dàp sà-nit léəo. (TNC)

消す 完全に léəo

=パノムルン宮は死火山の山頂に建っている。

タイ語の複合動詞の構造は「V+V」であるため、表面的にはアスペクト形式と同じである。しかし、アスペクト形式の場合、文の中から削除しても大体の内容が変わらないのに対し、複合動詞の場合は一部分でも削除すると全体的な意味がおかしくなるか非文となる。「kamlaŋ」の機能は名詞とアスペクト形式であり、複合動詞として現れることはないが、「yùu」は複合動詞の機能も持っているため、区別する必要がある。例 108) は属性的な述語のように見えるが、「yùu」が複合動詞の一部として現れており、単なる場所を表す動

詞として使用されているため、アスペクトの「yùu」の一時性 (Temporal) といった本質とは反していない。例 108)a. の「tâŋ yùu (位置する+居る)」は一つの複合動詞だと考えられ、「yùu」がなくなると非文となる。108)b. も同様に、この場合の「sâaŋ yùu (建つ+居る)」複合動詞であり、「yùu」がなくなると不自然となる。

以上、「yùu」の実例を取り上げて分析した。本節ではアスペクト形式の「yùu」が使用される際、話者は出来事の間隔と終了時点に着目していることが確認できた。しかし、「yùu」は位置・場所や存在を表す意味が強く、アスペクト形式として現れる場合でもその意味がまだ残っていると考えられる。

5. 3. 4. 「kamlaŋ+動詞句+yùu」

「kamlaŋ」と「yùu」は一時性を持つ出来事 (Temporal) に間隔 (interval) を要求しながら、「kamlaŋ」は出来事の開始点に着目し、「yùu」は終了時点に着目することが 5.3.2. と 5.3.3. で確認された。次に両形式が複合的に現れる場合、どのような意味を表すのか見ていく。

以上で紹介した Mekthawornwathana&Chaisirivikorm (2010) の研究では、「kamlaŋ+動詞句+yùu」は一つの形式として扱われ、Progressive と Imperfective を表すことができると述べられている。本研究も「kamlaŋ+動詞句+yùu」が Progressive と Imperfective を表すことができると考えるが、それは各形式における意味の異同から現れると考える点で主張が異なる。

- 109)a. kà-tì-kaa thaŋ kaan-muaŋ thîi kam-laŋ chái kan yùu pen
 ルール に関する 政治 [RP] kamlaŋ 使う 共に yùu [CPL]
 kà-tì-kaa thîi dii thîi-sùt nai rôp hòk-sìp-pèet pii. (TNC)
 ルール [RP] いい 一番 中 回り 68 年
 = (みんなが) 使っている政治に関するルールは、(この)68 年間で一番いい。

b. khon-nùm thîi kam-lan ?àan koo-lâm níi yùu yàa phêŋ dùan
 若者 [RP] kamlan 読む コラム この yùu[禁止]ばかり 急ぐ
 tra-nòk-tòk-cài. (TNC)

驚く

=このコラムを読んでいる若者たち、(慌てて) 驚いてばかりいないで。

例 109)では、「kamlan」と「yùu」の意味により、話者は出来事を全体的に読み取ることができる。つまり、出来事の開始時点から、出来事の状態が存在する期間、そして終了時点まで捉えている。「kamlan+動詞句+yùu」が「kamlan」と「yùu」から成り立っていると考えることによってはじめて、「今から出来事の状態がしばらく続くがいつか終わる」というようなニュアンスが解釈できるのである。例 109)a. では「chái (使う)」、109)b. では「読む」といった出来事が実施される期間を話者が捉えていると考えられる。

次は「(一時的) 結果の継続 (Resultative)」の例である。

110)a. phâap khǝŋ khǎo nai ?nao sa-thoon sóon-tháp káp krò-lèk
 姿 の 彼 中 影 映る 重なる と 鉄の鎧
 raao kam-lan sũam-sài yùu ciŋ. (TNC)

のように kamlan 着る yùu 本当に

=映っている彼の影は鉄の鎧と重なって、本当に着ているようだ。

b. nai khà-nà thîi kam-lan pen phêet in-thœn yùu thîi roŋ-pha-yaa-baan
 中 時 [RP] kamlan[CPL]医者 研修 yùu [場所] 病院
 thîi sen-da-?i phǝm kê dâi khàao wàa phôo pùai nàk. (TNC)

で 仙台 僕 も dâi ニュース と 父 病気 重い

=仙台の病院で研修医として (働いて) いた時、父が重病になったと聞いた。

例 110)a. の「着る」は動作の最中を表すのではなく、着た結果状態を示している。
110)b. では、話者が働いていた期間を最初から最後まで想像し、その期間内で「父が重病になった」ことが起こったと捉えているのである。さらに、「yùu」の本来の意味で場所を表す句も現れる³⁹。「(一時的) 結果の継続 (Resultative)」の場合でも、「kamlan」と「yùu」のそれぞれの意味が発揮されていると考えられる。

5. 4. まとめ

本章は継続を表す両言語の形式、「テイル」と「kamlan」・「yùu」を分析した。「テイル」の本質は「話者の視点は出来事が実施された期間から出来事を観察して間隔 (interval) を要求し、その出来事における間隔の開始時点と終了時点の有無を問題外とする」ことである。一方、「kamlan」の本質は「話者の視点は出来事が実施された期間から間隔 (interval) を要求しながら、その出来事における間隔の開始時点 (Initial Point) にも視点を置く」ことで、そして、「yùu」の本質は「話者の視点は出来事が実施された期間から間隔 (interval) を要求しながら、その出来事における間隔の終了時点 (Final Point) にも視点を置く」ことである。「テイル」は一時的な出来事 (Temporal) も属性的な出来事も表すことができるが、「kamlan」と「yùu」は一時的な出来事のみ表現可能である。このことは、翻訳上、「テイル」の「変化の結果の継続 (Perfect)」が「kamlan」か「yùu」に対応していないことを説明することができる。

³⁹ 場所を示す「thîi」も共起しているため、例 108) に現れた複合動詞の一部としての「yùu」と異なる。ここは「yùu」が現れなくてもアスペクトの意味以外、全体的な意味が大きく変わらない。

第6章 むすび

本章では、日本語とタイ語の基本アスペクト形式の意味を分析した結果を踏まえ、包括的に両言語のアスペクト体系をまとめることを試みる。そして、そこから明らかになった現象が日本語話者とタイ語話者の異なる事態把握のし方をどのように反映しているか考察する。最後に、本研究から得られた成果を、いかにして第二言語教育に生かすことができるのか、タイ語話者のための日本語教育の場合を例として考えていく。

6. 1. 日本語とタイ語の基本アスペクト体系

第1章で述べたように、従来の日本語とタイ語のアスペクト対照研究では、ほとんどが日本語のアスペクト体系を基準にしている。両言語において対応している表現はどのようなものであるか確認できることに意義があると言えるが、日本語の表現に対応していないタイ語の各形式の意味用法が分析対象外となってしまうため、各形式の本質が十分に究明されていないと言える。言い換えれば、何か中立的な基準で各言語のアスペクト形式を分析する必要があると考えられる。本研究では第2章で紹介した普遍的なアスペクトとテンスの概念を応用し、「ル」と「cà」、「タ」と「lɛɛo」、「テイル」と「kamlaŋ」・「yùu」の分析を進めてきた。

タイ語と日本語の時間体系は根本から異なっている。日本語はテンスがアスペクトと混合しており、区別することができない。一方、タイ語は時間ダイクシスの概念を持っているものの、その概念を表す要素を持たない。言語の使用は文字や文法だけから成り立つのではなく、話者の認識や環境など様々な要因から成り立っていると考えられるため、その言語の話者が言葉遣いの障害を感じなければ、形態的に表す必要がないと考えられる。従って、タイ語のアスペクト形式を分析する際、無理矢理に日本語のテンス・アスペクト体系に合わせる必要はないのである。本研究では、日本語のテンス・アスペクト体系とタイ語のアスペクト体系を別々にまとめる。

日本語の「ル」と「タ」はアスペクト性とテンス性（時間ダイクシス）の合体であるが、本質は話者が把握した出来事の位置と発話時の位置との関係を表す時間ダイクシスである。

「ル」は話者が把握した出来事を「発話時以降」の時点に登録したことを示す。そして、「タ」は出来事が「発話時以降」の時点に登録したことを示す。この本質から、話者の視点と述語に内在している意味と融合して様々なアスペクト的な用法が生じる。「ル」を発話する際、話者が現在を表す区間「実現想定区間」（井上 2001i）の内部における発話時以降の時点に出来事を登録させれば、「ル」を伴うその出来事の解釈は「現在」となる。しかし、「ル」の「発話時以降」であるという本質は変わらない。「タ」も同様に、出来事が実現想定区間内に登録されていれば、現在に起こった「変化」を表す。一方、「テイル（テイ-部分）」は時間ダイクシスと関らず、単なる「間隔」を表すアスペクト標示であるため、「ル」と「タ」とは異なるレベルに発生すると考えられる。ここまでは先行研究と大きな違いはないが、本研究では話者の視点、つまり話者の認知に起こったことも考慮する。

表 9. 「ル」・「タ」・「テイル」と話者の認知の世界との関係

	現実の世界	話者の認知の世界
「ル」	－	「現在」と「未来」
「タ」	「変化」と「過去」	「回想」と各種の「ムード」 (仮想を含む)
「テイル」(テ イ-部分)	直接に観察する	観察しているように捉える

「ル」は発話時以降に出来事が登録されたことを示すため、例え出来事が現実の世界で起こったとしても話者は現実の世界を見ておらず、自分が想像して認知の世界の出来事を述べると考えられる。そして、「タ」は発話時以前に登録された出来事を示すため、発話時に立ってその事実を確認できる場合とできない場合がある。できる場合は「変化」か「過去」用法の解釈となり、できない場合は「回想」及び各種の「ムード」を表すと考え

られる。この場合も、現実の世界で起こった出来事でも、その事実をニュースの報告のようにそのまま述べても良いし（過去）、自分の記憶を回想させて述べる（回想）もできる。

一方、「テイル」には、エビデンシャル（Evidential）の性質がある（定延 2006）。本研究では詳しく言及していなかったが、「テイル」には「観察」といったエビデンシャル的な性質が含まれている。本研究は、話者が出来事を「観察」しなければ、「間隔」を捉えることができないと考え、エビデンシャルの「観察」も「テイル」の本質から派生して来たのではないかと予測する。定延（2006）によると、「観察」とは現実の世界のものをみるのではなくても、話者は認知の世界で「観察」しているように出来事を捉えても良いとされる。このように、日本語のテンス・アスペクト形式が示す出来事は、話者だけが見ている認知の世界の出来事と現実の世界の出来事に区別することが可能である。

一方、タイ語は日本語のように区別する必要はない。現実の世界でも認知の世界でも各形式が表す意味が変わらないのである。「cà」は出来事の「基準的段階」、「léeo」は出来事の「状態変化後の段階」といった本質を表している。言い換えれば、「cà」は状態変化の前、「léeo」は状態の後、といった対立をなしているとも考えられる。「cà」は「非現実」と表すモダリティ形式であると先行研究で述べられているが、それは「cà」がたまたま認知の世界の出来事を示す場合から派生した意味だけで、現実の世界で起こった出来事を示す時には「非現実」といった考え方は無効であると考えられる。そして、「kamlaŋ」 と「yùu」は両方とも「テイル（テイル部分）」と類似して出来事の「間隔」を要求する。しかし、「kamlaŋ」は話者が出来事の開始時点に、「yùu」は話者が出来事の終了時点に着目する。さらに、「kamlaŋ」 と「yùu」は一時性（Temporal）を持っており、いつか終了することが予測できる出来事しか伴わない。そのため、「テイル」のように属性的な出来事を示す「経験」「記録」などの「変化の結果の継続（Perfect）」用法を持たないわけである。この場合、出来事の終了時点の問題としない「léeo」や「dâi」や「khəəi」などの形式、あるいは動詞原形そのものか副詞と共起するようになる。

6. 2. 日本語話者とタイ語話者の事態把握

人は、他者と同じ出来事を観察したとしても、他者と同じ言葉でその観察した出来事を表現するわけではない。特に話者の母語が異なれば、そのずれは一層著しくなるであろう。このことから、6. 1. で論じた両言語におけるアスペクト形式の捉え方は、どのように日本語とタイ語の話者の事態把握のし方を反映しているか、考察していく。

6. 2. 1. 「事態把握」とは

人間は言語能力、つまり「文法に適った無限の文を生成できるという能力」（池上 2009 i : 4）を持っていると考えられ、言語は単なる人間のコミュニケーションの道具として使われている。人は発話する際に単なる文法の仕組みを考えるだけではなく、自分の意図やその場の適切さなど、様々なことを考慮しなければならない。何かを発話する際に、頭の中で起こる過程を「事態把握（construal）」と呼ぶ。池上（2008）で述べられた事態把握の定義をここに取り上げたい。

話者は言語使用に先だって、(i) まず、言語化しようとする〈事態〉のどの部分を言語化し、どの部分を言語化しないか、また、言語化する部分については、それをどのような視点から言語化するか—要するに、言語化しようとする〈事態〉を自らとの関連でどう把握するか—という〈認知的〉な営みを〈主体的〉に行い（「事態把握」）、(ii) その上で、自らの〈事態把握〉の仕方にふさわしい表現の仕方を選び、言語化する（[発話]）、ということである。（池上 2008 : 2）

要するに、話者はある事態（出来事）を判断し、どの部分を、どうやって把握するかを決め、そして、その事態に適する表現を選んで発話するのである。母語が異なる話者の場合、事態を読み取る過程の仕方が似ている（が同じではない）言語もあり、相違が著しく見られる言語もある。例えば、前者は日本語と韓国語、後者は日本語と英語などである。当然、日本語とタイ語の事態把握のし方にも相違点が存在すると考えられる。

6. 2. 2. 事態把握のし方

各言語によって事態把握のし方が異なると考えられるが、ここで注意しなければいけないことは、一つの言語では一つの事態把握のし方だけが存在しているのではない、ということである。しかし、その言語の話者はどうやって事態を把握しているのか、というあくまで主な傾向としては、まとめられる（池上（2009 ii））。

事態把握のし方の類型を考える時には、まず話者と事態の関係を考える必要がある。話者と事態という二項はある関わり合い（interaction）で結ばれるとすれば、ある類型的対立が存在しているのであろう。それは極限的に言うと、一つは話者と事態が何の関わり合いも持たない事態、そして、もう一つは話者と事態がある形で関わり合っている事態である。池上（2008、2009 i、2009 ii）によると、前者は「主観的把握」、後者は「客観的把握」と呼ばれている⁴⁰。それぞれは以下のように定義される。

主観的把握：話者は問題の事態の中に自らの身を置き、その事態の当事者として体験的に事態把握をする場合。実際には話者が問題の事態の中に身を置いていない場合であっても、話者は自らがその事態に臨場する当事者であるかのように体験的に事態把握をする。（池上 2008：3）

客観的把握：話者が問題の事態の外に自らの身を置き、その事態の傍観者、ないし観察者として客観的に事態把握をする場合。実際には問題の事態の中に身を置いている場合であっても、話者は（自分の分身をその事態の中に残したまま）自らはその事態から抜け出し、事態の外に身を置いて、傍観者、ないし観察者として客観的に（自分の分身を含む）事態を把握する。（池上 2008：3）

⁴⁰ 前者は「ナル形」、後者は「スル形」という呼び方もあるが、ここは池上（2008）に従って「主観的把握」と「客観的把握」と呼ぶことにする。

図 30. 主観的把握と客観的把握（長谷部 2012：8）

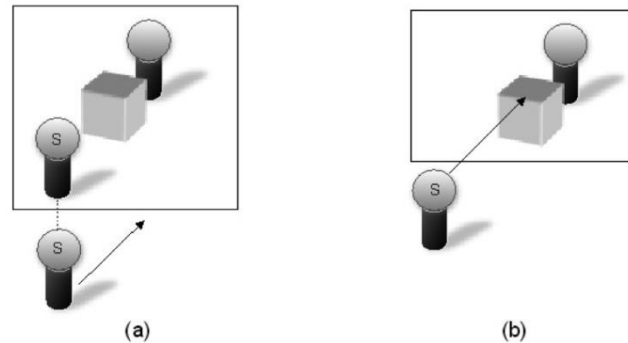


図 30. の(a)は「客観的把握」、(b)は「主観的把握」を表している。「s」と書いている人は話者 (Speaker) の代わりである。「主観的把握」は、話者自身が事態の中に入り込んでいるように当事者として事態を把握しているものである。一方、「客観的把握」は、話者は自らと事態の間に距離を取っていつも第三者のように事態の外から捉えようとする。話者は自分が事態の中に存在していても、外から観察して事態の中にもう一人の自分がいるように発言する。

日本語話者に好まれる事態把握は「主観的把握」の仕方だとよく述べられている（池上 2008、姫野 2007、本多 2009、長谷部 2012、副島 2014 など）。この現象は日本語話者のテンス・アスペクトの捉え方にも応用できると考える。

「ル」と「タ」は時間ダイクシスを表す形式であり、常に発話時を観察地点とし、つまり「今、ここ」から見えた出来事を述べる。出来事を把握した（する）時点の位置を発話時の時点と比較させ、「今、ここ」の以前であるか、以降であるか、といった位置関係を示す⁴¹。この捉え方は、「主観的把握」のし方に属していると考えられる。日本語では「テイ-部分」だけでは現れないため、時間ダイクシスの要素「ル」および「タ」と融合

⁴¹ 第2章の図 14. を参照。

している「テイル」と「テイタ」も同様の解釈ができる。従って、日本語の基本テンス・アスペクト形式の捉え方は「主観的把握」のし方を反映すると考えられる。

一方、タイ語のアスペクト形式は時間ダイクシスの意味を持っていない。「cà」と「lɛɛo」、「kamlaŋ」と「yùu」など、対立的な存在の形式とでも共起できることはタイ語の特徴であるとも考えられる。話者は発話時「今、ここ」と出来事を捉えた（る）時点の関係に関心なく、単なる外から出来事の過程順序を見ているように述べる。例え過去の時間副詞と共に現れても、出来事の過程順序を見て述べることは変わらない。このような捉え方は「客観的把握」のし方であると見られる。

両言語における事態把握のし方は異なっていると予測できる。この主張の証拠として状態述語と共起する「タ」と「lɛɛo」の例を取り上げたい。

111)a. その時彼女が大きく首を持ち上げた。目が合った。覗き込む瞳が青かった。

(少納言)

b. tɔɔn-nán thəə yûwt khɔɔ ʔŋəi-nâa. taa rao sòp kan.

その時 彼女 伸ばす 首 顔を挙げる 目 我々 合う 共に

ʔtaa thəə thîi mɔɔŋ maa pen sǐ nám-ʔŋən lɛɛo.

目 彼女 [RP] 見る くる [CPL] 色 青い lɛɛo (筆者訳)

111)a. の「青かった」は、話者が出来事の情報把握した時点が発話時以前であることを示しており、主観的な把握のし方であることを反映している。一方、タイ語では「lɛɛo」を使用すると、「彼女の目が別の色だったが、目が合って気づいたら青色になった」という解釈になっている。このことから、タイ語話者は「lɛɛo」を使用する場合、変化の前の状態も意識しながら変化した結果までの過程を観察しているため、客観的な把握のし方が反映されていると捉えられる。

6. 3. 第二言語教育に生かすために

以上、日本語とタイ語のアスペクト形式の意味用法及び両言語話者の事態把握の仕方についてまとめた。本研究は、今までの分析から得られた対照言語的研究の成果を第二言語教育に生かすことを期待しているため、最後のむすびとして、実例を取り上げてこれからの教育への応用について考えてみたい。実際のところ、日本語教育で教えられる文法は主に日本語研究の成果を応用して構築されていると言ってよい。しかし、学習者に対して効果的な文法指導を行うためには、学習者の母語と日本語との対照言語的研究の成果を参照し、学習者の母語の感覚に合わせた文法説明を作成すべきであると考えられる。ここには、タイ語話者のために書かれた日本語教科書で記載されている「テイル」の文法説明を例として取り上げる⁴²。

一般的に教科書は「テイル」の用法を「動作継続」と「結果状態」（本研究の「動作の継続 (Progressive)」と「(一時的) 結果の状態 (Resultative)」）の2つに分けている。しかし、これだけではタイ語を母語とする学習者（以下 TJL）にとって分かりやすい説明とは言えない。実際に TJL の習得状況を調査した先行研究では、「動作継続」より「結果状態」の習得の方が難しいと指摘されている（パオサタポーン 2013、クルアパーン 2013）。問題となった「結果状態」は実際にどう説明されているか。ここではタイの高校で使われている、タイ語で書かれた『あきこと友だち』⁴³という教科書を見てみる。

⁴² 6.3. は、筆者が第8回日本語実用言語学国際会議（ICPLJ）で発表した内容の一部に加筆修正を加えたものである。

⁴³ 教科書の紹介は、http://www.jpf.go.jp/j/japanese/dispatch/voice/tounan_asia/thailand/2004/report06.html で参照。写真も同サイトから引用。

図 31. 『あきこと友だち』



●『あきこと友だち』の「ている」（以下、筆者による訳）

1. 進行しているか起こっている動作を述べる。（省略）
2. 状態を述べる。例えば、

服装を説明する場合

- ・シリクワンさんはめがねをかけていますか。（省略）

形と様子、状況、様々な状態を述べる場合

- ・リーさんはやせていますか、ふとっていますか。
- ・赤ちゃんはお父さんににっていますね。
- ・コムサンさんはしんせきの家に住んでいます。
- ・お姉さんはどこの大学でべんきょうしていますか。

本研究では、「テイル」の基本的用法は、①「動作の継続（Progressive）」②「（一時的）結果の継続（Resultative）」③「変化の結果の継続（Perfect）」といった3つの用法に分けることができると述べた。ここで取り上げた文法説明を見ると、「（一時的）結果の継続（Resultative）」と「変化の結果の継続（Perfect）」との混乱が見られる。今までの文法説明は、できるだけ網羅的かつ体系的に作成しようとするあまり、説明を補足する必要があるポイントを見逃してしまったり、本来なら特に必要のない説明が記載されてしまったりすることもしばしば見られる。この場合、TJLの母語であるタイ語を考慮すれば、「テイル」に関しては、少なくとも3つの用法に分けられるべきであるということを本研究では提案したい。その理由は、「動作の継続（Progressive）」と「（一時的）

結果の継続 (Resultative) 」は一時的な出来事であるため、「kamlaŋ」 と「yùu」 と対応し得るが、属性的で恒常的な性質を持つ「変化の結果の継続 (Perfect) 」とは対応できないからである。そうすると、一時的な出来事しか示さない「kamlaŋ」 と「yùu」 の使用を既に習得している TJL にとって、より分かりやすい説明になると考えられる。

注意したいことは、多義の文である場合、例えば「A 会社はお菓子を作っている」という文に対し、「A 会社はお菓子を専門に生産する会社」という属性的な解釈も、「A 会社は様々な商品を生産する会社で、その中でお菓子も作っている」という一時的な結果の解釈も両方無理なくできる。この場合、日本語ではどの解釈でも「テイル」が使われるが、タイ語では解釈によって「kamlaŋ」 と「yùu」 の使用の可否が決定される。従って、TJL の誤解を招かないために、ある一つの文について話者の解釈によって捉えられる意味が異なり得ることに注意を向けさせる必要があると考えられる。

謝辞

本研究を進めるにあたり、修士の時から5年間にわたりご指導を頂いた主指導教官の山川太先生にお礼を申し上げます。浅学の私に対して研究の基礎からお教えてくださり、悩んだときにも親身に相談に乗ってくださいました。未熟な私が先生の助言なくしては、本論文の完成はできませんでした。心から深く感謝しております。

また、対照言語に関する有益な多くの先行研究をご紹介していただいた副指導教官の角道正佳先生に大変お世話になりました。ご退職まで多くのご助言をくださり、いつも暖かく見守ってくださいました。本当にありがとうございます。そして、いつも研究会「北大阪言語フォーラム (FoLK)」と勉強会を催してくださった副指導教官の今井忍先生に感謝致します。先生のおかげで、認知言語学に興味を持つようになりました。また、タイ語に関して貴重なご意見をたくさん頂いた副指導教官の宮本マラシー先生にお礼を申し上げます。学問のことだけではなく、人生についても相談に乗ってくださいました。ご指導していただいた指導教官の先生方が4人もいた自分は、とても幸運であると感じております。さらに、いつも授業のTAとして参加させていただいていた中田一志先生、いつも応援してくださった加藤均先生、そしてお名前を全て挙げることはできませんが、先生方に心からの感謝を申し上げます。

さらに、日本語の指導をしていただいたチューターの方たちにも大変お世話になりました。伊藤翼斗さん、榎原美香さん、笠井陽介さん、本当にありがとうございます。そして、互いに応援し合った友人の皆さんに、謝意を表します。

最後に、どれだけ大変な時でもそばにいて励ましてくれた洪爽義さん、いつまでも変わらぬ愛を注いでくれたタイの家族のみんな、本当にありがとうございます。

参考文献

- 池上嘉彦（2008）「主観的把握：認知言語学から見た日本語話者の一側面」『昭和女子大学大学院言語教育・コミュニケーション研究』3 昭和女子大学大学院 pp. 1-6
- 池上嘉彦（2009 i）「＜認知言語＞から＜日本語らしい日本語＞へ向けて」池上嘉彦・守屋三千代編（2009）『自然な日本語を教えるために』ひつじ書房 pp. 2-40
- 池上嘉彦（2009 ii）「日本語話者における＜好まれる言い回し＞としての＜主観的把握＞」『ことば工学研究会』31 ことば工学事務局 pp. 23-29
- 池上嘉彦・守屋三千代編（2009）『自然な日本語を教えるために』ひつじ書房
- 井上優（2001 i）「現代日本語の「タ」」つくば言語文化フォーラム編『「た」の言語学』ひつじ書房 pp. 97-163
- （2001 ii）「中国語・韓国語との比較から見た日本語のテンス・アスペクト」『言語』30（13）大修館書店 pp. 26-31
- 井上優・生越直樹（1997）「過去形の使用に関わる語用論的要因—日本語と朝鮮語の場合—」『日本語科学1』国書刊行会 pp. 37-52
- 井上優・生越直樹・木村秀樹（2002）「テンス・アスペクトの比較対照—日本語・朝鮮語・中国語」『シリーズ言語科学4 対照言語学』東京大学出版会 pp. 125-157
- 岡野ひさの（1999）「判明を表すタの用法」『日本語教育 102 号』日本語教育学会 pp. 1-10
- 奥田靖雄（1978）「アスペクトの研究をめぐって（上）」『教育国語 53』むぎ書房 pp. 14-27
- （1978）「アスペクトの研究をめぐって（下）」『教育国語 54』むぎ書房 pp. 33-44
- 生越直樹（2009）「コラム テンスとアスペクト」池上嘉彦・守屋三千代編（2009）『自然な日本語を教えるために』ひつじ書房 pp. 111-112
- 影山太郎（1996）『動詞意味論—言語と認知の接点—』くろしお出版

- 許宰碩（2009）「現代日本語における「た」形と「ている」形の関係」『日本研究』40
韓国外国語大学日本語研究所 pp. 601-619
- 桐生和幸（2003）「タイ語の否定表現に添えられる完了辞の意味」『美作女子大学・美作
女子大学短期大学部紀要』48 pp. 16-26
- 金水敏（1998）「いわゆる‘ムードの「タ」’について一状態性との関連から」『東京大
学国語研究室創設百周年記念国語研究論集』汲古書院 pp. 170-185
- （2000）「時の表現」仁田義雄・盛岡隆志編『日本語の文法2 時・否定と取立て』
pp. 3-90
- （2001）「テンスと情報」音声文法研究会（編）『文法と音声Ⅲ』pp. 55-79
- 金田一春彦（1976）『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房
- 工藤真由美（1982）「シテイル形式の意味のあり方」『日本語学』1-2 pp. 36-45
- （1989）「現代日本語のパーフェクトをめぐる」『ことば科学3』むぎ書房
pp. 53-118
- （1995）『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現』
ひつじ書房
- （1998）「シテイル形式の意味記述」『言語研究』114 pp. 51-88
- （2001）「述語の意味類型とアスペクト・テンス・ムード」『言語』13
大修館書店 pp. 40-47
- クルアパーン・ニチャラー（2013）「タイ人日本語学習者による「テイル」の使用に関す
る研究—「結果の状態」の用法を中心に—」『日本研究論集』7 チュラーロン
コーン大学・大阪大学 pp. 36-56
- 定延利之（2001）「情報のアクセスポイント」『言語』12 pp. 64-70
- （2006）「心内情報の帰属と管理—現代日本語共通語「ている」のエビデン
シャルな性質について」中川正之・定延利之編『言語に現れる「世間」と「世界」』
くろしお出版 pp. 167-192
- （2008）『頭脳の文法』ちくま新書

- 定延利之・アンドレイマルチュコフ（2006）「エビデンシャリティと現代日本語の「ている」構文」中川正之・定延利之編『言語に現れる「世間」と「世界」』くろしお出版 pp. 153-166
- 新村朋美（2009）「「あった！」イマ・ココで見た」池上嘉彦・守屋三千代編（2009）『自然な日本語を教えるために』ひつじ書房 pp. 106-110
- 徐雨蓁（2008）「“タ”の表す「発見」について」『日本語・日本文化 34』大阪大学日本語日本文化教育センター pp. 23-40
- （2009）「見通しの状況に用いられる“タ”」『間谷論集 3』日本語日本文化教育研究会 pp. 79-96
- 副島健作（2014）「人為的事態の結果の表現—日本語とロシア語の受動文とアスペクト」『The Eight International Conference on Practical Linguistics of Japanese (ICPL8) Conference Handbook』国立国語研究所 pp. 148-151
- 孫敦夫（2009）「日本語アスペクトの新しい形—助動詞「タ」における「変化」の意味について—」『日本語学』2009・11 明治書院 pp. 21-33
- 高橋清子（2007）「タイ語の非現実モダリティマーカー」『神田外語大学紀要』19 号 pp. 189-210
- （2009）「タイ語の非現実性マーカーが生起する意味文脈の歴史的変化」『認知類型論的観点からみたモダリティ研究—文法化のあり方をめぐって—』pp. 131-162
- 高見健一・久野暲（2006）「「～ている構文」—「桜の花が散っている」はなぜ曖昧か」高見健一・久野暲著『日本語機能的構文研究』大修館書店 pp. 106-110
- 田中寛（2003）「タイ語テンス・アスペクト論序説」『語学教育フォーラム』特別号 大東文化大学語学教育研究所 pp. 56-72
- （2004）『統語構造を中心とする日本語とタイ語の対照研究』ひつじ書房
- 沈力（2005）「状態変化とアスペクトについて」中日理論言語学研究会第一会議 <http://cjtl.doshisha.ac.jp/data1/01-shenli.pdf>

- チュンスイーウィロート・アルニー (2001) 「日本語の「た」に対応するタイ語のアスペクト表現に関する一考察」『日本語教育学会大会予稿集』2001-10-07 pp. 45-50
- 寺村秀夫 (1971) 「‘タ’の意味と機能」『言語と日本語問題』くろしお出版 pp. 244-289
- (1984) 『日本語のシンタクスと意味』第2巻 くろしお出版
- 仲本康一郎 (2008) 「予期の構造と言語理解」山梨正明編『認知言語学論考8』ひつじ書房 pp. 81-124
- 中村ちどり (2001) 『日本語の時間表現』くろしお出版
- 仁田義雄 (1995) 「シテ形接続をめぐって」仁田義雄 (編) 『複文の研究 (上)』くろしお出版 pp. 87-126
- (2010) 「事態の類型と未来表示」『日本語文法』10巻2号 日本語文法学会くろしお出版 pp. 3-21
- 長谷部陽一郎 (2012) 「内からの視点と外からの視点：認知言語学に基づく英語教育に関する試論」『コミュニケーレ』1 同志社大学グローバル・コミュニケーション学会 pp. 1-27
- 姫野伴子 (2007) 「日本語教科書における＜視点＞—『みんなの日本語の場合』」『Journal of Center for International Exchange』1 埼玉大学国際交流センター pp. 1-9
- 本多啓 (2009) 「コラム「テイル」と「タ」」池上嘉彦・守屋三千代編 (2009) 『自然な日本語を教えるために』ひつじ書房 pp. 103-105
- (2013) 『知覚と行動の認知言語学—「私」は自分の外にある—』開拓者
- パオサタポーン・ドゥアンケーオ (2013) 「タイ人日本語学習者の「テイル」の習得—「動作の持続」と「結果の状態」を中心に—」『日本研究論集』7 チュラーロンコーン大学・大阪大学 pp. 36-56
- 楊紅・柏崎雅世 (2006) 「日本語教育の視点からの“着”の用法分析—日中アスペクト表現の対照研究 (1) —」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集 32』東京

- 外国語大学 pp. 63-75
- 吉永尚 (2008) 「動詞のアスペクト性をめぐって—持続性と限界性を中心に—」『園田学園女子大学論文集』42 園田学園女子大学 pp. 1-9
- ラッタナセリーウォン・センティアン (2011a) 「日タイ両語のアスペクト形式について—「タ」と「leew」を中心に—」『日本言語学会第 142 回大会予稿集』日本言語学会 pp. 266-271
-
- _____ (2011) 「タイの日本語教育での「タ」」『日本語・日本文化研究』21 大阪大学大学院言語文化研究科 pp. 215-226
-
- _____ (2012) 「日タイ両語の継続を表す形式に関する一考察—「テイル」と「kamlang」、「yuu」を中心に—」『日本語・日本文化研究』22 大阪大学大学院言語文化研究科 pp. 177-184
-
- _____ (2014) 「コーパスにおける「kamlang」の意味—Progressive から Imperfective への拡大—」『KLS』34 号 関西言語学会 pp. 265-276
- ラッチャニー・ピヤマーワディー (1981) 「日・タイ語におけるテンスとアスペクトの比較対照—「〜ル」「〜タ」「〜シテイル」「〜シテイタ」について—」『日本語教育』44 号 pp. 81-88
- 劉綺紋 (2006) 『中国語のアスペクトとモダリティ』大阪大学出版会
- 山岡政紀 (2000) 『日本語の述語と文機能』くろしお出版
- 山岡實 (2012) 「第 3 章 談話における状態動詞の進行形」山岡實著『文学と言語学のはざまで：日英語物語の言語表現分析』開拓社 pp. 95-163
- 柳澤浩哉 (1992) 「シテイル形式の報告性」『地域文化研究』18 広島大学総合科学部紀要 pp. 53-74
- Methapisit, Tasanee・坂田睦深・Chuensrivirote, Arunee (2000) 「タイ人日本語学習者のアスペクト表現」http://jpforlife.jp/pdf/pr_0116_thas1.pdf 国立国語研究所

- Bache, C. (1995) . *The Study of Aspect, Tense and Action*. Frankfurt am Main, Germany
- Bybee, J., R. Perkins and W. Pagliuca. (1994) . *The Evolution of Grammar: Tense, Aspect, and Modality in the Languages of the World*. Chicago, University of Chicago Press
- Chung, K. (2012). *Space in Tense: The interaction of tense, aspect, evidentiality and speech acts in Korean*. John Benjamins Publishing Company, Amsterdam: Philadelphia
- Chiravate, B. (2002). *Syntactic and Semantic Properties of Aspectual Markers in Thai*. Ph.D.dissertation. Michigan State University
- Comrie, B. (1976) . *Aspect: An Introduction to the Study of Verbal Aspect and Related Problems*. Cambridge University Press, Cambridge
- Dahl, Ö. (1985) . *Tense and Aspect Systems*. Bath, The Bath Press
- Dowty, D.R. (1979) . *Word Meaning and Montague Grammar*. Dordrecht, D. Reidel Publishing Company
- Frazier, L., C. Clifton (1996). *Construal*. Cambridge, The MIT Press
- Higbie, J. (2006) . *Thai Reference Grammar*, Orchid Press.
- Klein, W. (1994) . *Time in Language*. London, Routledge
- Koenig, J Pierre., N. Muansuwan (2005) . The Syntax of Aspect in Thai, *Natural Language & Linguistic Theory* 23, pp.335-380. Springer
- Kullavanijaya, P. (2003) . A Historical Study of Time Marker in Thai. *Manusya: Journal of Humanities Spacial Issue No.6*, pp.87-106. Chukalongkorn University Press
- Kullavanijaya, P., W. Bisang (2007) . Another Look at Aspect in Thai. *Manusya: Journal of Humanities Spacial Issue No, 13*, pp.61-86. Chulalongkorn University

- Langacker, R. W. (1987). *Foundations of cognitive grammar: Theoretical Prerequisites*. Stanford, CA: Stanford University Press
- (2008). *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford University Press
- Meepoe, A. (2001) . Imperfective Markers in Thai: An Analysis of *kamlang* and *yu* in Natural Spoken Discourse, in *Papers from the Sixth Annual Meeting of the Southeast Asian Linguistics Society*, ed. K. L. Adams and T. J. Hudak, Tempe, pp. 283-297. Arizona
- Mekthawornwathana, T., C. Paphonpat. (2010) . Aspectual Meaning of a Sentences with Thai Aspect Markers “kamlaŋ” and “yùu” . *NIDA Development Journal*. National Institute of Development Administration, Bangkok
- Michaelis, L. A. (1998) . *Aspectual Grammar and Past-Time Reference*. London, Routledge
- Muansuwan, N. (2002) . *Verb Complexes in Thai*. PhD Dissertation. University at Buffalo, The State University of New York
- Phillips, A., P. Thiengburanathum. (2007). Verb Classes in Thai. *Language and Linguistics Special Issue 8.1*, pp. 167-191. Role and Reference in Taiwan
- Ratchabandittayasathan. (1982). *Potchananukrom*. Aksoncharoenthat, Bangkok
- Scovel, T. S. (1970) *A Grammar of Time in Thai*. Ph.D. Dissertation. The University of Texas at Austin.
- Smith, C. (1991) . *The Parameter of Aspect*. Kluwer Academic Publisher, Dordrecht
- Srioutai, J. (2004i) . The Thai Cla¹: A Marker of Tense or Modality?. *CamLing: Proceedings of the University of Cambridge Second Postgraduate Conference in Language Research*, pp. 273-280. Cambridge
- (2004ii). The (Non-) Progressive in Thai. *Cambridge Occasional Papers in Linguistics 2*, pp. 100-120. Cambridge

- Sriprasit, M. (2003). *A Diachronic Study of /læw/, /yuu/, /yuulæw/*. M. D. dissertation. Chulalongkorn University
- Tawilapakul, U. (2010). *The Application of Optimality-theoretic Pragmatics to the Reappraisal of the Role of lɛw45 in Thai*. CAMling2010 Proceedings of the Sixth Cambridge Postgraduate Conference in Language Research. <http://www.srcf.ucam.org/camling/proceedings/tawilapakul.pdf>
- Uppakitsinlapasarn, Phaya. (1964). *Waiyakornthai*. Thaiwattanaphanit, Bangkok
- Vendler, Z. (1967). *Linguistic in Philosophy*. Cornell University Press, Ithaca
- Verkuyl, H. J. (1993). *A Theory of Aspectuality : The interaction between temporal and atemporal structure*. Cambridge, Cambridge University Press
- Visonyangoon, S. (2000). *Parallelism between noun phrases and clauses in Thai*. Ph. D. dissertation. Michigan State University
- Warotamashikkhadit, U. (1996). *Thai reference grammar*. Ramkamhaeng, Bangkok

資料

- 藤子・F・不二雄 (1975) 『ドラえもん』 第7巻 てんとう虫コミックス 小学館
- Fujiko・F・Fujio (2005) 『โดราเอมอน (doo-raa-ʔɛɛ-môn)』 Vol. 7 NED COMICS
- 夏目漱石『こころ』 http://www.aozora.gr.jp/cards/000148/files/773_14560.html
(青空文庫)

略語

感嘆	感嘆詞
場所	場所前置詞
理由	理由前置詞
関係	関係修飾語
受身	受身表現
使役	使役表現
否定	否定表現
可能	可能表現
CJT	Conjunction (接続詞)
CPL	Copula (コピュラ動詞)
ENDP	Ending Preposition (終助詞)
MOD	Modifier (修飾語句)
RPF	Royalty Prefix (王室接頭語)
RP	Relative Pronoun (関係代名詞)
PRON	Pronoun (代名詞)
QF	Quantifier (数量詞)